

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2022年12月26日

【事業年度】 第1期（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

【会社名】 人・夢・技術グループ株式会社

【英訳名】 People, Dreams & Technologies Group Co., Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 永治 泰司

【本店の所在の場所】 東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目20番4号

【電話番号】 03（3639）3317（代表）

【事務連絡者氏名】 管理統括センター経理部ゼネラル・マネージャー 野中 卓也

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目20番4号

【電話番号】 03（3639）3317（代表）

【事務連絡者氏名】 管理統括センター経理部ゼネラル・マネージャー 野中 卓也

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
（東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第1期
決算年月	2022年9月
売上高 (百万円)	37,604
経常利益 (百万円)	3,891
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	2,333
包括利益 (百万円)	2,365
純資産額 (百万円)	19,839
総資産額 (百万円)	33,463
1株当たり純資産額 (円)	2,242.31
1株当たり当期純利益金額 (円)	261.95
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額 (円)	-
自己資本比率 (%)	59.0
自己資本利益率 (%)	11.82
株価収益率 (倍)	9.68
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	1,234
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	941
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	767
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	7,413
従業員数 (人)	1,760

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。
 2. 当社は、2021年10月1日設立のため、前連結会計年度以前に係る記載はしていません。
 3. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第1期の期首から適用しており、第1期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第 1 期
決算年月	2022年 9 月
営業収益 (百万円)	2,152
経常利益 (百万円)	1,095
当期純利益 (百万円)	775
資本金 (百万円)	3,107
発行済株式総数 (株)	9,416,000
純資産額 (百万円)	13,674
総資産額 (百万円)	14,547
1株当たり純資産額 (円)	1,553.07
1株当たり配当額 (円)	66.0
(うち1株当たり中間配当額)	(-)
1株当たり当期純利益金額 (円)	87.02
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	-
自己資本比率 (%)	94.0
自己資本利益率 (%)	5.67
株価収益率 (倍)	29.13
配当性向 (%)	75.8
従業員数 (人)	51
株主総利回り (%)	-
(比較指標: TOPI)	(-)
最高株価 (円)	2,791
最低株価 (円)	1,725

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
 2. 当社は、2021年10月1日設立のため、前事業年度以前に係る記載はしておりません。
 3. 第1期の株価総利回り及び比較指標は、設立第1期のため記載しておりません。
 4. 最高株価及び最低株価は、2022年4月4日より東京証券取引所プライム市場におけるもの、それ以前は、東京証券取引所市場第一部におけるものです。

2【沿革】

年月	概要
2021年10月	株式会社長大が単独株式移転により当社を設立し、当社株式は東京証券取引所市場第一部に上場（株式会社長大は2021年9月に上場廃止）
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより、東京証券取引所の市場第一部からプライム市場に移行

また、2021年10月1日に単独株式移転により当社の完全子会社となりました株式会社長大の沿革は以下のとおりであります。（参考：2021年9月までの株式会社長大の沿革）

年月	概要
1968年2月	有限会社長大橋設計センターを設立
4月	建設コンサルタント登録
11月	一般構造・橋梁分野の事業開始
11月	株式会社長大橋設計センターへ商号変更
1970年10月	本州四国連絡橋公団より20年に及ぶ大プロジェクトの第1号を受注
1971年10月	環境アセスメント分野の事業開始
1973年6月	測量業者の登録
10月	交通計画分野の事業開始
1975年1月	海外業務受注、情報サービス分野の事業開始
1976年3月	河川治水計画分野の事業開始
1978年5月	下水道分野の事業開始
1980年2月	都市・地域計画分野の事業開始
5月	ソフトウェアパッケージの開発販売分野へ進出
6月	一級建築士事務所の登録
7月	計量証明事業者の登録
1982年2月	道路情報分野の事業開始
1984年11月	株式会社長大へ社名変更
1986年7月	地質調査業者の登録
1991年4月	補償コンサルタントの登録
1993年5月	本社を東京都中央区日本橋蛸殻町へ移転
1994年4月	日本証券業協会に株式を店頭登録
1996年4月	海外でコンストラクション・マネジメント事業を受注
6月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場
1997年8月	東京支社においてISO9001の認証取得（1998年10月全社拡大）
1998年11月	東京支社においてISO14001の認証取得
2000年12月	携帯電話による道路情報の提供開始
2001年1月	海外でPFI事業受注
7月	国内でPFI事業開始
2002年11月	子会社株式会社長大テックを設立
2004年10月	全社においてISO14001の認証取得
2005年4月	NHK地上波デジタル・データ放送による道路情報の提供開始
2006年10月	支社・事業本部制導入、内部統制機構設置
12月	広島支社にて情報セキュリティマネジメントシステムJISQ27001：2006認証取得
2007年1月	子会社株式会社長大構造技術センター（2011年10月合併により消滅）、順風路株式会社を設立
2009年6月	エコプロダクツ事業開始
2010年3月	伊吹山ドライブウェイの運営に参画
4月	株式会社アルコムを吸収合併し、建築事業開始
2011年7月	基礎地盤コンサルタンツ株式会社及びその子会社2社をグループ化
2013年6月	子会社CHODAI KOREA CO., LTD.を設立
2014年10月	子会社CHODAI & KISO-JIBAN VIETNAM CO., LTD.を設立
12月	日本交通技術株式会社より事業の一部を譲受け、鉄道事業開始
2015年6月	子会社PT.WIRATMAN CHODAI INDONESIAを設立
2017年4月	子会社株式会社南部町バイオマスエナジーを設立
7月	子会社Chodai Philippines Corporationを設立
11月	東京証券取引所市場第一部に指定
2018年6月	子会社株式会社長大キャピタル・マネジメントを設立
2021年3月	株式会社エフェクトをグループ化
4月	子会社台湾長大顧問有限公司を設立
7月	子会社C.N.バリューマネジメント株式会社を設立

3【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、当社と連結子会社10社、非連結子会社7社並びに関連会社9社により構成されており、コンサルタント事業、サービスプロバイダ事業及びプロダクツ事業を主要事業としております。

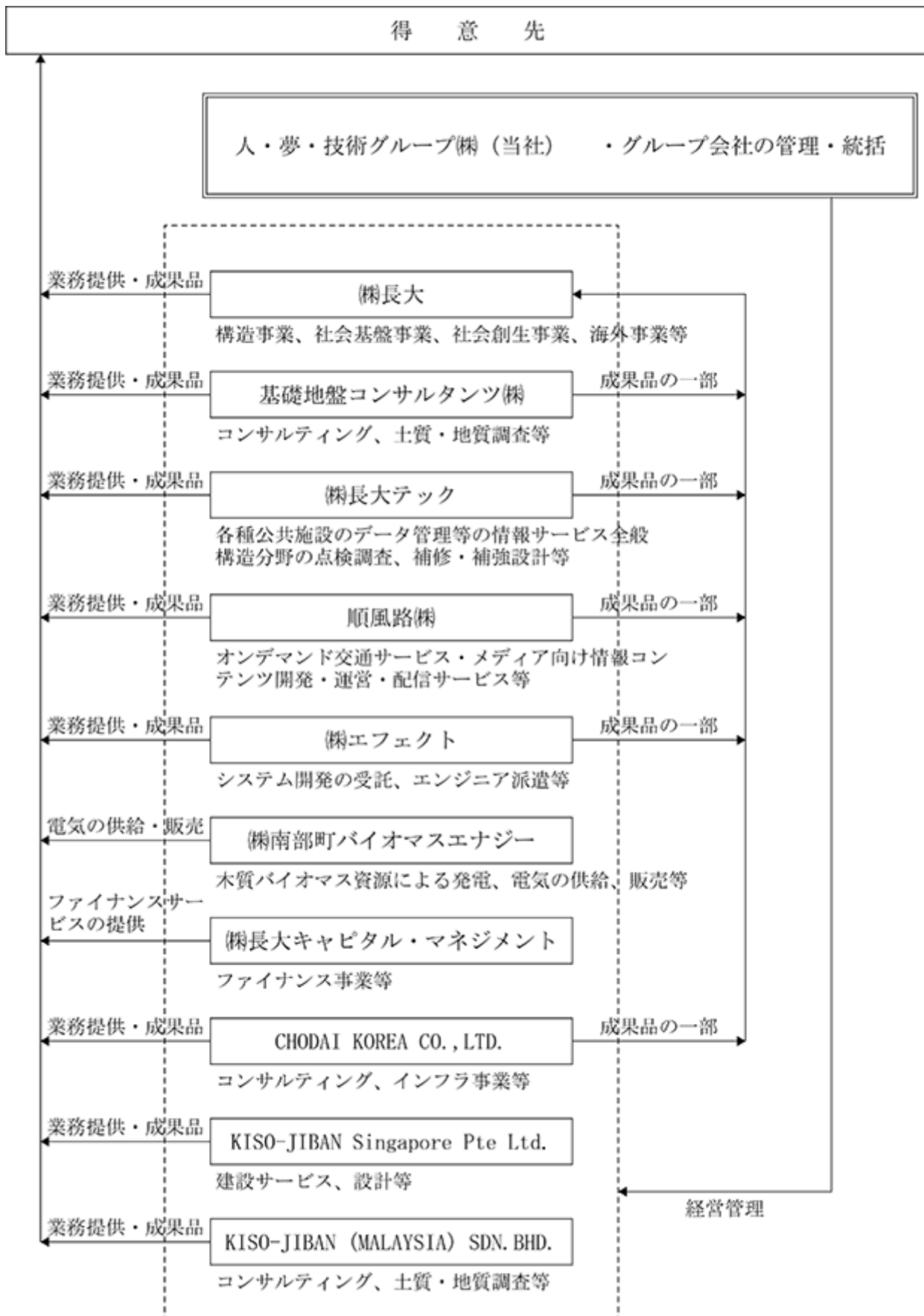
事業内容と連結子会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりであります。

なお、次の3部門は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項（セグメント情報等）」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

区分	主要業務	主要な会社
コンサルタント事業	橋梁・特殊構造物等に関わる調査・計画・設計・施工管理、各種構造解析・実験、CM業務、土木構造物・施設に関わるデザイン、道路・総合交通計画・道路整備計画・路線計画・都市・地域計画に関わる調査・計画・設計・運用管理、各種公共施設のデータ管理等情報サービス全般、IT Sに関わる調査・計画・設計・運用管理、港湾、河川防災に関わる調査・計画・設計・運用管理、情報処理に関わるコンサルティング・システム化計画・設計・ソフトウェア開発・コンテンツ開発・運営・配信サービス、P F Iに関わる事業化調査・アドバイザリー、環境に関わる調査・計画・設計・運用管理、建築に関わるコンサルティング・計画・設計、土質・地質調査、基礎構造および施工法に関する研究・開発、地盤災害に関する防災工事ならびに土木工事の設計施工、鉄道に関わる調査・分析・企画・計画・設計・施工監理、再生可能エネルギーに関する調査・計画・設計・施工監理・E P C・マネジメント・資金調達コンサルティング・O & Mコンサルティング・アセットマネジメント	(株)長大 基礎地盤コンサルタンツ(株) (株)長大テック (株)エフェクト KISO-JIBAN Singapore Pte Ltd. KISO-JIBAN (MALAYSIA) SDN.BHD. CHODAI KOREA CO., LTD.
サービスプロバイダ事業	道路運営、公共施設の運営、PPP、デマンド交通システム、健康サポート、再生可能エネルギー事業、ファイナンス事業	(株)長大 順風路(株) (株)南部町バイオマスエナジー (株)長大キャピタル・マネジメント
プロダクツ事業	エコ商品販売、レンタル、情報システムの販売・ASP	(株)長大

なお、当社は特定上場会社等に該当し、インサイダー取引規制の重要事実の軽微基準のうち、上場会社の規模との対比で定められる数値基準については連結ベースの計数に基づいて判断することとなります。

当社グループの事業系統図は以下のとおりであります。



4【関係会社の状況】

主な関係会社は次のとおりであります。

名称	住所	資本金	主要な事業内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(連結子会社) (株)長大 (注)2 (注)4	東京都中央区	1,000百万円	コンサルタント 事業	100.0	主に構造事業、社会基盤 事業、社会創生事業、海 外事業を展開している。 運転資金の貸付等。 役員の兼任あり。
基礎地盤コンサル タツ(株) (注)2 (注)5	東京都江東区	100百万円	コンサルタン ト事業	100.0	主に土質・地質調査及び 環境公害調査等を展開し ている。 役員の兼任あり。
(株)長大テック	東京都中央区	10百万円	コンサルタン ト事業	100.0	各種公共施設のデータ管 理等の情報サービス全 般、構造分野の点検調 査、補修・補強設計等 を行っている。 事務所賃貸あり。 役員の兼任あり。
順風路(株)	東京都豊島区	10百万円	サービスプロ バイダ事業	75.0	オンデマンド交通サー ビス・メディア向け情報 コンテンツの開発・運営・ 配信サービス等を展開し ている。 役員の兼任あり。
(株)エフェクト (注)7	福岡県 福岡市博多区	10百万円	コンサルタン ト事業	100.0	研究開発において当社グ ループ各社とともに事業 を推進している。 運転資金の貸付等。
(株)南部町バイオマス エネルギー (注)3 (注)6 (注)8	山梨県 南巨摩郡南部町	60百万円	サービスプロ バイダ事業	77.9 (77.9)	木質バイオマス資源によ る発電、電気の供給、販 売を行っている。
(株)長大キャピタル・ マネジメント (注)6	東京都中央区	90百万円	サービスプロ バイダ事業	100.0	(株)長大で行っている PPP/PFI事業において、 事業者に対するファイ ナンス事業を行っている。 運転資金の貸付等。 役員の兼任あり。
KISO-JIBAN Singapore Pte Ltd. (注)3	シンガポール	500 千シンガ ポール・ ドル	コンサルタン ト事業	85.0 (85.0)	建設サービス及び設計を 展開しており、一部の業 務においては、基礎地盤 コンサルタツ(株)の関連 部門と一体となって事業 を推進している。
KISO-JIBAN (MALAYSIA)SDN.BHD. (注)3	マレーシア セランゴール州	200 千リン ギット	コンサルタン ト事業	51.0 (51.0)	主に土質・地質調査及び 環境公害調査を展開して おり、一部の業務におい ては、基礎地盤コンサル タツ(株)の関連部門と一 体となって事業を推進し ている。

名称	住所	資本金	主要な事業内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
CHODAI KOREA CO., LTD. (注)3	韓国ソウル市	100,000 千ウォン	コンサルタント 事業	100.0 (100.0)	海外インフラ事業において株長大の関連部門と一体となって事業を推進している。

(注) 1. 「主要な事業内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。

2. 特定子会社に該当しております。

3. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。

4. 株式会社長大については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く。)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	20,527百万円
	(2) 経常利益	2,780百万円
	(3) 当期純利益	2,046百万円
	(4) 純資産額	7,934百万円
	(5) 総資産額	16,617百万円

5. 基礎地盤コンサルタンツ株式会社については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く。)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	15,678百万円
	(2) 経常利益	1,635百万円
	(3) 当期純利益	1,089百万円
	(4) 純資産額	5,490百万円
	(5) 総資産額	10,360百万円

6. 当連結会計年度において重要性が増したことにより、株式会社南部町バイオマスエネルギー及び株式会社長大キャピタル・マネジメントを連結の範囲に含めております。

7. 債務超過会社であり、債務超過の額は2022年9月末時点で66百万円となっております。

8. 債務超過会社であり、債務超過の額は2022年9月末時点で122百万円となっております。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2022年9月30日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
コンサルタント事業	1,642
サービスプロバイダ事業	49
プロダクツ事業	7
全社(共通)	62
合計	1,760

- (注) 1. 従業員数(契約社員を含む)は就業人員数であります。
 2. 全社(共通)として、記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものです。

(2) 提出会社の状況

2022年9月30日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
51	47.4	14.5	8,829

セグメントの名称	従業員数(人)
全社(共通)	51
合計	51

- (注) 1. 従業員数(契約社員を含む)は就業人員数であり、子会社からの出向者を含めております。
 2. 平均勤続年数については、子会社からの出向者の通算の勤続年数を含めております。
 3. 平均年間給与は基準外賃金及び賞与を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

提出会社には労働組合は結成されておりませんが、労使関係は良好に推移しております。

また、一部連結子会社に労働組合が結成されておりますが、労使関係については円滑な関係にあり、特記すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当社グループにおける経営方針、経営環境および対処すべき課題等は以下のとおりであります。
なお、文中における将来に関する事項については、当連結会計年度末現在において判断したものです。

当連結会計年度においては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が抑制され、経済活動の本格的な再開が期待される一方、ロシア・ウクライナ情勢等の地政学的リスクの顕在化による原材料の価格高騰等の影響により、世界規模の経済への先行き不透明感が強まっております。

建設コンサルタント業界では自然災害リスクに備え、国土強靱化の推進や社会資本老朽化に対する適切な維持管理、長寿命化、更新への急激な対応が求められております。また、情報通信技術（以下「ICT」という。）を活用したインフラサービスの高度化、急速に進む少子高齢化への備えや地域創生への対応、さらには、現在大きな変革期にある国内エネルギーの需要、供給政策への対応など、これまでにないスピードで発展する社会への貢献、コミットが求められております。これらは、いずれも我が国の発展に向けた根幹部分であり、その実現のために建設コンサルタントが果たすべき役割は、ますます大きくなっております。

このような状況の中、公共事業投資額については、近年約8～9兆円の水準で安定的に推移しているほか、2020年12月に15兆円程度の予算規模を目処とした「防災・減災、国土強靱化のための5か年加速化対策」が閣議決定されております。今後のインフラ投資の落ち込みによる影響など不透明な材料はあるものの、現在のところ国内公共事業を取り巻く環境はおおむね堅調に推移しております。

(1) 経営の基本方針

当社グループでは、経営理念である「人が夢を持って暮らせる社会の創造に技術で貢献する。」を踏まえ、「人」「夢」「技術」をモットーに、国内外において人権を尊重し、関係法令、国際的ルールおよびその精神を遵守しつつ、持続可能な社会の創造に貢献することを目指しております。

(2) 経営戦略

当社グループは、株式会社長年の長期経営計画である「長期経営ビジョン2030」（2019年10月～2031年9月）を踏襲しております。さらに、この「長期経営ビジョン2030」の実現に向けての第2フェーズとして、2022年11月に公表しました中期経営計画「持続成長プラン2025（2022年10月～2025年9月）」を策定し、当社グループのさらなる成長に向けた基盤づくりを行う重要なステージと位置づけ、より具体的な目標及び施策をとりまとめております。

「持続成長プラン2025」

数値目標

	売上高（百万円）	営業利益（百万円）	従業員数（人）
連結	47,800	3,200	約2,400

目標達成に向けた施策

「持続成長プラン2025」では、『国土基盤整備・保全本分野のさらなる強化と環境・新エネルギー分野及び地域創生分野の新たな事業分野としての確立。事業を支える多様な人材が働きがいを持てる環境づくりを推進。』を基本方針としております。引き続き要請の多い国土強靱化やインフラ維持管理等のニーズに対応した基幹事業の強化・拡大を図るとともに、新領域における事業開発や海外事業の強化、人材の確保及び育成への投資を重点的に行ってまいります。計画期間中は以下の5つの施策と3つの横断的な取組みに基づき事業を推進してまいります。

(事業軸 国土基盤整備・保全本分野)

主要施策 1. 人・夢・技術グループの基幹を担う国土基盤整備・保全本分野のさらなる強化

事業軸 国土基盤整備・保全本分野において、構造、道路・交通、地盤、保全などの基幹事業における受注の拡大に向けて、基幹事業におけるさらなる技術開発を推進するとともに、グループ会社間の連携により顧客ニーズに応じた技術サービスを提供する。また、近年事業を拡大している河川事業について、さらなる受注拡大を目指す。さらに、技術人材の確保と育成、IT化やDXの推進等による業務実施体制の強化を図る。

(事業軸 環境・新エネルギー分野)

主要施策 2. カーボンニュートラルに関するあらゆる側面からの事業参画

事業軸 環境・新エネルギー分野において、カーボンニュートラルに関するあらゆる側面からの事業参画を図ることで、新たな事業分野としての確立を図る。これまで推進してきた洋上風力発電事業関連の地盤調査のさらなる受注拡大を図るとともに、バイオマス発電事業の事業拡大、自治体や民間へのコンサルティングサービスの拡大を図る。

(事業軸 地域創生分野)

主要施策 3. 「人・夢・技術グループが目指す地域創生」の実現に向けた多様なまちづくりのサービスの提供

事業軸 地域創生分野において、地域創生の基盤となる「人・夢・技術グループが目指す地域創生」の実現に向けて、まちづくりの多様なサービスを提供する。具体的には、PPP/PFIアドバイザーや建築・健康・まちづくりのコンサルティングサービスのほか、サービス購入型や独立採算型の PPP/PFI事業の運営、オンデマンド交通のサービスの高度化等を推進する。また、「人・夢・技術グループが目指す地域創生」のモデルとして、株式会社長大が支援・共同展開する「北海道更別村SUPER VILLAGE構想」において、データ基盤連携に基づくシームレスな行政サービスの提供を実現する。

(海外連携展開領域)

主要施策 4. 新たな海外事業展開のための海外拠点及び営業・技術部門の体制強化

海外連携展開において、シンガポール及びVIP(ベトナム、インドネシア、フィリピン)の海外拠点の体制強化、また、グループ会社間の海外営業・技術部門の連携を図ることで、東南アジアを中心とする海外業務の受注拡大を図る。

(国内事業推進)

主要施策 5. 新たな地域や顧客の開拓と災害時の対応強化

地域担当技術者の配置による地域ニーズの把握やグループ会社間の技術・営業情報の共有により、新たな顧客の開拓を推進する。また、地域ネットワークの形成やグループ会社間の連携により、災害発生時の調査や復興支援に迅速に対応できる体制を構築する。

(横断的な取組み)

横断的な取組み 1. 多様な働き方の提示と採用・育成の強化

人・夢・技術グループの持続的な成長に向けて、多様な人材が「働きがい」を持てる環境をつくるため、長時間労働の改善や多様な働き方を可能にする環境整備を進める。また、グループ会社間の連携による採用の強化を図るとともに、研修プログラムやジョブローテーション制度など、人材育成のための制度を拡充する。

横断的な取組み 2. イノベーションによる新事業・新技術の創出とIT化・DX推進による圧倒的な生産性の向上

新たな事業領域の創出に向けて、スマートシティ、空飛ぶクルマ、量子コンピュータなどの技術開発と事業化を推進する。また、IT化やDXの推進により、業務遂行における圧倒的な生産性向上を図る。

横断的な取組み 3. グループのガバナンス強化とM&A・新事業投資の推進

プライム市場上場グループとして、グループ企業のガバナンスの強化を図るとともに、ステークホルダーへの適切な情報開示を行う。また、「長期経営ビジョン 2030」の実現に向けて、多様な機関との連携やM&Aによるグループ体制の強化を図る。さらに、新事業に対する積極的な投資を行うとともに、事業のモニタリングやリスク管理を徹底する。

以上の方針に基づき事業を着実に推進することで、当社の持つ経営資源を有効に活用するとともに、様々なステークホルダーとの良好な関係を維持・発展させ、当社および当社グループの企業価値ひいては株主共同の利益の向上に資することができると考えております。

(3) 当面の対処すべき課題の内容等

建設コンサルタントを取巻く経営や事業の環境変化は大きく、早期の対応が課題となっております。大きな環境変化とは、ICTの進展とインフラ技術への活用の推進、頻発する大規模災害へのグループとしての対応、再生可能エネルギー分野の拡大、地域創生と増大する民間の役割、多様化する海外事業とそのリスク管理、より一層の働き方改革の推進、持続可能なグローバル社会形成への貢献、新型コロナウイルス感染症拡大に対する対応であります。今後、当社グループは、他社に先んじて上記環境変化に対処してまいります。

ICTの進展とインフラ技術への活用の推進

質の高いインフラの整備とサービスを実現するために最先端のICTの活用が課題となっております。当社グループも、建設コンサルタントとして様々な関連技術の開発・導入に注力しており、オンデマンド交通支援システムによる過疎地へのモビリティ支援事業(コンビニクルの全国自治体展開)や橋梁点検ロボットの開発、特許取得、導入等を実現してまいりました。今後は、i-Constructionの実現に向けた産官学連携、オンデマンド交通支援技術を応用した自動運転の実現に向けた各種実証実験、これらモビリティも含めた将来のまちづくり事業や市場展開などを積極的に進めてまいります。

また、それらの実現に向けては、ICT技術の高度化やイノベーションの強力な推進などが求められますが、新事業開発、技術開発への投資強化、M&Aによる体制強化などの取組みをさらに強化してまいります。

頻発する大規模災害へのグループとしての対応

東日本大震災以降、地震や台風、豪雨等による自然災害が頻発しております。当社グループは、地域で発生する災害に対応するため、災害対応マニュアルを作成し、迅速な災害対応が可能な体制づくりに努めております。2020年の7月豪雨においても、現地の被害状況を迅速に調査・把握し、復旧支援活動を行ってまいりました。今後も自然災害発生に対して、当社グループ企業間の連携のもと、社会貢献の一環として対応を行い、行政支援や被災地支援を実施してまいります。

再生可能エネルギー分野の拡大

地球規模での再生可能エネルギーの導入が求められる中、国内では第6次エネルギー基本計画案が策定され、2050年「カーボンニュートラル」に向けた対応が明言されております。当社グループは、これまで以上に国内外における再生可能エネルギー事業に積極的に参画し、再生可能エネルギー政策の実現に貢献してまいります。既に、海外では、フィリピン国ミンダナオ島における小水力発電事業の供用開始、国内では山梨県南部町におけるバイオマス発電事業、青森県における風力発電事業、地熱エネルギー開発事業、また洋上風力発電における地質調査に積極的に取組んでおります。今後は、より一層再生可能エネルギー事業の取組みを拡大してまいります。

地域創生と増大する民間の役割

インフラの整備・維持管理・運営に民間が大きく関与するPPP/PFI事業は、我が国のインフラ整備・運営手法として期待されており、新たなインフラビジネスとして成長を続けております。その中で、当社グループは、各種公共施設等におけるPFI手法のアドバイザー業務並びに運営業務について業界でもトップクラスの経験と実績を有しています。さらに、前述の再生可能エネルギー事業との複合展開や、地域創生に向けたPPP/PFI事業(グランピング事業等)への取組みを推進してまいります。

多様化する海外事業とそのリスク管理

現在、アジア地域を主な市場とする海外事業は、これまでの橋梁設計、監理事業に鉄道関連事業を加えた二本を基幹事業とし、港湾などの埋立て、地盤改良事業、また小水力発電事業や関連する地域開発事業など、多様な展開を進めております。その一方で、今回の新型コロナウイルス感染症の拡大はもちろん、ロシア・ウクライナ情勢等の地政学的リスクなどにもさらされております。これに対し当社グループにおきましては、安全管理面として、関連情報を迅速に入手し共有するなどグループ子会社等に対する安全対策の強化を図っております。また、事業執行面では、情報の共有や人材の有効活用など、組織を超えてとるべきアクションを迅速に実践する仕組みを構築し、今後の更なるグループガバナンスの強化を図り、着実な海外展開を進めてまいります。

より一層の働き方改革の推進

近年、我が国の産業界全体において、長時間労働の解消やダイバーシティへの対応が課題となっております。当社グループにおきましても、妊娠や子育てに直面している社員、要介護家族を抱える社員、外国人社員、障がいを抱える社員等、多様な社員が働いております。当社グループは、ワークライフバランスの実現とダイバーシティの受入れが企業の成長要件と考えており、福利厚生の充実とともに多様な働き方を選択できる制度を整えてまいりました。

具体的な施策として、テレワーク、時差出勤やサテライトオフィスの活用などの推進を行っております。また、シニア技術者がそれまでに培った経験と技術を長く活かせる仕組みをつくり、実践しております。さらには、子育てをしながら働く社員に対する支援や待機児童の解消に向けた取組みとして、株式会社社長大が代表となり三社共同運営の「かけはし保育園」を設立し運営しております。このように当社グループは、働き方改革を通じ、当社グループの課題解決だけでなく、社会全体への貢献を目指してまいります。

持続可能なグローバル社会形成への貢献

昨今、SDGsに代表される持続可能な社会形成の重要性が増しており、企業にも貢献が求められております。当社グループは、国内事業はもとより海外事業においても、より社会性の高い事業、例えば前述のフィリピン国ミンダナオ島における地域経済開発プロジェクトの経験と実績を活かしながら、多様なフィールドで展開してまいります。

これらを通じ、SDGsの先駆者として、国内外の自然環境と調和した社会基盤整備のための様々なサービス、当社グループ内におけるダイバーシティや脱炭素型経営の推進など、インフラサービスと企業活動の両面で、持続可能なグローバル社会形成への取組みに貢献してまいります。

新型コロナウイルス感染症拡大に対する対応

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が徐々に抑制され、経済活動の本格的な再開が期待されております。当社グループでは、テレワーク、時差出勤やサテライトオフィスを活用した働き方への転換を図るとともに、感染拡大時には、機能移転などを図ることで事業活動の継続を図ることのできる体制を構築しています。

新型コロナウイルス感染症拡大による現段階の業績への影響は軽微であります。新型コロナウイルス感染症の今後の広がり方や収束時期等は不確実性が高い事象であります。感染の最新の状況を踏まえ、取締役会、グループ連携推進会議等における意思決定、業績予想等の策定を行っております。

引き続き、上記の取組みを継続・推進することで、事業活動や収益性の維持を図ってまいります。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項及びそのリスクへの当社グループの対応方針は以下のとおりです。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 官公庁への依存

当社グループの当連結会計年度の売上高のうち、本邦の官公庁（国及び地方公共団体）に対する割合は国土交通省30.1%、その他官公庁34.9%、合計で65.1%を占めております。このため、公共事業投資額縮減や、受注単価の下落等が継続した場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

ただし、公共事業投資額については、近年、8～9兆円の水準で安定的に推移しているほか、15兆円程度の予算規模を目途とした「防災・減災、国土強靱化の5か年加速化対策」が閣議決定されており、今後においても堅調に推移すると見込んでおります。

また、当社グループにおきましては、当該リスクへの対応策として、「持続成長プラン2025(2022年10月～2025年9月)」において民間市場の開拓、海外事業の拡大を方針として事業展開を行っており、国内公共事業に限らない多様な市場からの収益力の強化に取り組んでおります。

(2) 法的規制

当社グループは独占禁止法、下請法、建築基準法、建設業法等、様々な法規制の適用を受けており、仮にこれらの法に抵触するような行為が発生した場合、社会的信用を失墜し、当社グループの業績に重要な影響を与える可能性があります。

当社におきましては、当該リスクへの対応策として、これらの国内外の法的・制度的リスクを管理するために、法の要請に止まらず、内部統制システムを整備し、担当部門である内部統制センターは、取締役会（当連結会計年度19回開催）と、グループ連携推進会議（同12回開催）に陪席し、情報収集を行い、内部監査を行っております。特に官公庁からの受注に多くを依存している株式会社長大では独占禁止法遵守を強化するため、独占禁止法遵守マニュアルを策定し、談合行為が発生しない管理体制を整えております。また、下請法の遵守のため適正な発注プロセスの管理に注力しております。

さらに、従業員に対しては、新入社員研修、キャリア採用研修、階層別研修、拠点別研修等においてコンプライアンス教育を実施、啓蒙活動を行っております。

(3) 成果品に関する契約不適合責任

当社グループの成果品のミスが原因で重大な不具合が生じるなど契約不適合責任が発生した場合や指名停止措置などの行政処分を受けるような事態が生じた場合には、業績に影響する可能性があります。

主要子会社である株式会社長大、基礎地盤コンサルタンツ株式会社におきましては、当該リスクへの対応策として、品質保証システムISO9001を導入し、マネジメントシステムに基づく業務レビューを行っております。また、行政経験者による理事レビューを開催しております。さらに、内部監査の一環として、当連結会計年度は、国内においては全国の34拠点・119部門、海外においては10ヶ国11拠点(オンライン実施含む)を対象に行った実地監査にてチェックすることで、徹底した成果品の品質確保及び向上に力を注いでおります。また、万一、成果品に契約不適合が発生した場合に備えて損害賠償責任保険に加入しております。

(4) 為替変動に関するリスク

当社グループは、海外マーケットへの積極的な進出に伴い、外貨建取引が定期的に発生しております。今後、為替相場の変動によっては、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

当社グループにおきましては、現段階では日本円建の契約が多いため影響は限定的と考えておりますが、今後海外業務の増加によりリスクが増加する場合には、為替予約によるヘッジ等の対応を検討してまいります。

他方、当連結会計年度における当社グループの連結売上高に占める海外比率は6.5%(24.3億円)に留まります。また、かかる海外売上高のうち、外貨建の契約額は一部であるため、現段階で為替変動に関するリスクが当社グループの業績に与える影響は極めて限定的であると判断しております。

(5) 業績の季節的変動

当社グループの売上高は、主要顧客である中央省庁及び地方自治体への納期が年度末に集中することなどから、第2および第4四半期連結会計期間に偏重しております。

当社グループにおきましては、当該リスクへの対応策として、「持続成長プラン2025(2022年10月～2025年9月)」において民間市場の開拓、海外事業の拡大を方針として事業展開を行うとともに、発注者である官公庁に協力を仰ぐ等、業績の平準化に向けた対応を行っております。

(6) 災害による事業活動への影響

自然災害等が発生した場合、その規模によっては事業活動が低下あるいは制約される等、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当社グループにおきましては、事業継続体制の構築、BCP（事業継続計画）を策定するなど防災管理体制を強化しております。また、当社グループは全国に広く拠点を有しており、災害時にも他の拠点が業務遂行を補完し、事業の継続性を確保できる体制を構築しております。

(7) 海外での事業活動

当社グループが海外事業を行う国や拠点事業所を置く国で、経済情勢の変化や、国際紛争・テロ行為等が発生した場合は、事業の停止・中止や事業所の閉鎖・廃止など当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

す。

当社グループにおきましては、当該リスクへの対応策として、外務省ホームページ等からの情報収集、グループ連携推進会議等において月次での情報収集・共有を行い、現地駐在員への情報提供を行うことにより、社員の安全維持と事業継続を行えるよう努めております。新型コロナウイルス感染症への対策においては、適切な情報収集と共有から、迅速な初動対応につなげて、事業の継続と社員の安全確保を図っております。

(8) 情報セキュリティ

サイバー攻撃によるコンピュータウイルス感染や悪意のある第三者からの不正侵入等によって、情報システムの停止が発生した場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当社グループにおきましては、「情報セキュリティ管理規程」に基づくセキュリティ管理をグループ各社へ展開しており、当該リスクへの対応策として、ウイルス対策やハッキング対策等のセキュリティ強化を計画的に図っております。また、社員への教育として、グループ間でのセキュリティに関する情報共有のほか、情報セキュリティハンドブックを作成し、グループ各社の社員一人ひとりへの配布、年7回の情報セキュリティ研修やウイルスメール模擬訓練の実施等を継続的に行い、セキュリティ意識の向上に努めております。

さらに、グループ各社のセキュリティ担当者で構成したITガバナンスワーキングを設け、年6回のワーキングや勉強会の活動も行っております。

この一連の情報セキュリティ対策や対応は、IT戦略推進センターが担当し、PDCAサイクルにより継続的な取り組みを実施しております。

(9) 業務提携・企業買収等のリスク

当社グループは、今後他社との業務提携及び企業買収等を行う可能性があります。何らかの理由により提携・買収が想定した効果を生まない場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。当社グループにおきましては、当該リスクへの対応策として、業務提携及び企業買収等の実行判断に際しては、取締役会、グループ連携推進会議等において効果及びリスクについての評価を行い、意思決定を行っております。

また、企業買収等の場合、買収が完了した後も、「関係会社管理規程」に基づき四半期ごとに取締役会で報告を行い、モニタリングを徹底して状況の変化に応じて迅速な経営判断を行うことのできる体制を構築しています。今後も、グループ連携推進会議や取締役会等を通じたリスクの評価や管理を行うことでリスクの最小化に努めてまいります。

(10) 新規事業の取組みに伴うリスク

当社グループでは経営基盤の安定化を目指して、事業エリア・分野・顧客の拡大を推進しておりますが、新領域事業が既存事業のような安定した収益を創造するまでには一定の時間を要することが予想されます。また、新たな事業への投資に対する回収の遅れが発生、海外事業の場合には当地の政情や為替差損など様々なリスクが存在しており、これらのリスクが表面化した場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

株式会社長大におきましては、当該リスクへの対応策として、「事業評価会議規程」に基づき、経営会議の諮問を受けて、構成メンバーに取締役や行政経験者である理事も名を連ねる事業評価会議を開催して、新規事業の実施可否について評価を行い、これに基づき、取締役会で最終的な機関決定を行っております。さらに、新規事業が開始した後も、所管部門は四半期ごとに進捗状況を経営会議へ報告することになっており、状況・環境変化への迅速な対応を可能とする体制を構築しています。

なお、当連結会計年度は新たに4件の新規事業が実施されており、過去に開始し、事業が継続しているものを含めると16件になりますが、いずれも上記のプロセスに基づき、適切に事業の進捗確認を行うことでリスクの最小化に努めております。

(11) 新型コロナウイルス感染症拡大に伴うリスク

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が徐々に抑制され、経済活動の本格的な再開が期待されておりますが、感染症の拡大による当社グループ従業員、協業者への感染等による事業の中断及び遅延等により、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。また、特に海外での感染再拡大によるロックダウン等の影響が発生した場合には、業務の中断による業務完了の遅延が発生する可能性があります。

当社グループにおきましては、当該リスクへの対応策として、テレワーク、短時間勤務、サテライトオフィスの活用等の感染対策を推進し感染拡大の防止、社員の安全確保及び事業活動の継続に努めております。

現段階の業績への影響におきましては軽微です。また、新型コロナウイルス感染症の今後の広がり方や収束時期等は不確実性が高い事象ではありますが、感染の最新の状況を踏まえ、取締役会、グループ連携推進会議等における意思決定、業績予想等の策定を行っております。

引き続き、上記の取組みを継続・推進することで、事業活動や収益性の維持を図ってまいります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

当社は、2021年10月1日付で単独株式移転により株式会社長大の完全親会社として設立されました。当報告書は設立第1期として提出するものであるため、前連結会計年度との対比は行っておりません。

財政状態及び経営成績の状況

当社グループにおきましては、2019年10月に公表いたしました中期経営計画「持続成長プラン2019」に基づき、新たな取組みを実施してまいりました。

その3年目となる当連結会計年度は、連結売上高は376億4百万円となりました。また、連結営業利益におきましても、33億97百万円となりました。これは道路事業、構造事業、地質調査等の基幹事業の受注増加を図ることができたためです。

新型コロナウイルス感染症の影響におきましては軽微であり、今後、感染拡大が抑制され、経済活動の本格的な再開が期待されておりますが、収束時期等是不確実性が高い事象であることから、感染の最新の状況や収束に関する情報等を踏まえ、取締役会、グループ連携推進会議等における意思決定、業績予想等の策定を行っていくこととしております。

業務としては、基幹事業である構造、道路、交通・ITS、環境などに加え、災害対応事業、インフラ維持管理や老朽化対策事業、PPP/PFIに代表される地域創生事業、またエネルギー関連事業などに積極的に取組んでまいりました。

セグメントごとの経営成績は次のとおりであります。

[コンサルタント事業] 当連結会計年度の受注高は378億15百万円、売上高は364億46百万円となりました。

構造事業については、株式会社長大が主に手掛けており、主軸である橋梁設計の他、維持管理や老朽化対策、耐震補強業務等を実施してまいりました。橋梁点検ロボット（特許取得済）の実用化、高度橋梁監理システム（i-Bridge）の実用化に向けたフィールド実験など、次世代の橋梁管理の技術開発に積極的に取組んでおります。

社会基盤事業については、株式会社長大、株式会社長大テックが主に手掛けており、道路構造物の維持管理、更新に向けた各種点検業務や道路管理データベース構築業務、交通需要予測や事業評価業務などに加え、自動車の移動情報、挙動情報に関するビッグデータ処理による渋滞や事故評価業務などに取組んでまいりました。また、モビリティと駅前再開発の融合であるバスタ事業など、新たな都市機能の強化事業についても積極的に取組んでおります。さらに、ITS・情報/電気通信事業では、福島県双葉郡浪江町において新たなモビリティサービスの実証実験に参画するなど、自社技術の展開による次世代移動支援の実現に向け、グループをあげて取組んでまいりました。

社会創生事業については、株式会社長大が主に手掛けており、基幹である環境事業の他、PPP/PFIや建築計画・設計等のまちづくり事業に積極的に取組み、安定的に売上を伸ばしております。環境・新エネルギー事業では、国内外における再生可能エネルギー事業でのコンサルティングに取組んでまいりました。また、水力、風力、地熱、バイオマスなど再生可能エネルギー発電事業に多く取組んでまいりました。さらに、内閣府の推進するスーパーシティの実現に向けてスーパーシティオープンラボに参加するとともに、現在はデジタル田園都市国家構想において北海道更別村の「北海道更別村SUPER VILLAGE構想」への取組みを推進しております。その他、数年前から本格スタートした防衛関連事業においても、構造物設計、交通、環境分野から建築分野まで幅広く受注するなど、積極的な展開を図っております。

地質・土質事業については、基礎地盤コンサルタンツ株式会社が主に手掛けており、基幹の地質・土質調査関連事業を基軸に、売上高を安定的に推移することができております。「防災・減災、国土強靱化のための5か年加速化対策」を背景に、既存の土木インフラに対する地質調査や地盤解析の分野で多くの案件に取組むとともに、災害からの復興に伴う地質調査・対策工設計などに取組んでまいりました。また、再生可能エネルギー分野において、複数の洋上風力発電事業や地熱発電事業、災害対策に伴う地質調査・診断などに取組んでまいりました。

海外事業については、株式会社長大、基礎地盤コンサルタンツ株式会社が主に手掛けており、橋梁設計、施工監理業務、また地質調査などに積極的に取組んでおります。

[サービスプロバイダ事業] 当連結会計年度の受注高は6億90百万円、売上高は6億68百万円となりました。

国内では、地元企業と連携したPark-PFI事業の運営や自治体と連携したバイオマス発電事業の事業化など、地域創生に資する事業の推進に取組んでまいりました。また、海外では、フィリピン国ミンダナオ島における「カラガ地域総合地域経済開発プロジェクト」について着実に進展しております。既に供用開始しているアシガ川小水力発電所やタギボ川上水供給コンセッション事業についても順調に稼働しております。今後は、フィリピン国内でのインフラ整備事業や、インドネシア国でのエネルギーマネジメント事業など、アジア諸国での展開を推進させてまいります。

[プロダクツ事業] 当連結会計年度の受注高は7億59百万円、売上高4億88百万円となりました。

型枠リースシステムは、従来のコンクリート型枠を使用した際に発生する廃材について、循環型資材への転換を図ることで削減提案する商品であり、SDGsに対応し、継続的に顧客にご使用いただいております。またコンクリート用夜間反射塗料、バイオグリーンシールドなどオリジナル商品を拡充し、ラインアップの充実を図っております。

上記の各事業を支える業務執行体制面では、効率化施策を着実に実行してまいりました。今後はグループをあげて、更なる効率化やAIを駆使したIT化施策を積極的に実行してまいります。

また当社では「コーポレートガバナンス基本方針」を公表しておりますが、この基本方針の下、今後もより一層、透明、公正な意思決定を行い、持続的成長に向けた取組みを着実に実施してまいります。

この結果、当連結会計年度における当社グループ全体の業績といたしましては、受注高は392億65百万円、売上高は376億4百万円となりました。

利益面では、営業利益33億97百万円、経常利益38億91百万円、親会社株主に帰属する当期純利益が23億33百万円となりました。

当連結会計年度末における財政状態は以下のとおりであります。

[資産]

当連結会計年度末の資産合計は334億63百万円となりました。流動資産は233億69百万円となり、固定資産は100億93百万円となりました。

流動資産の主な内訳は、現金及び預金75億21百万円、受取手形、完成業務未収入金及び契約資産118億84百万円、未成業務支出金11億91百万円であります。

固定資産の主な内訳は、土地22億66百万円など有形固定資産48億88百万円、無形固定資産1億97百万円、繰延税金資産16億65百万円など投資その他の資産50億7百万円であります。

[負債]

当連結会計年度末の負債合計は136億23百万円となりました。流動負債は96億59百万円となり、固定負債は39億63百万円となりました。

流動負債の主な内訳は、業務未払金23億56百万円、未成業務受入金26億88百万円であります。

固定負債の主な内訳は、長期借入金8億26百万円、退職給付に係る負債25億58百万円であります。

[純資産]

当連結会計年度末の純資産合計は198億39百万円となりました。

主な内訳は、資本金31億7百万円、資本剰余金52億68百万円、利益剰余金121億55百万円であります。

これらの結果、自己資本比率は59.0%となっております。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物(以下「資金」という。)の残高は74億13百万円となりました。また、当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は、次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果使用した資金は12億34百万円となりました。

これは主に税金等調整前当期純利益の計上36億67百万円、未成業務支出金の減少額51億78百万円があったものの、売上債権の増加額58億41百万円、未成業務受入金の減少額19億99百万円によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は9億41百万円となりました。

これは主に有形固定資産の取得による支出5億58百万円、貸付による支出3億77百万円があったことによるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は7億67百万円となりました。

これは主に短期借入れによる収入35億3百万円があったものの、短期借入れの返済による支出35億3百万円、配当金支払による支出6億68百万円、自己株式の取得による支出4億73百万円があったことによるものであります。

生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

当連結会計年度の生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
コンサルタント事業(百万円)	19,865
サービスプロバイダ事業(百万円)	532
プロダクツ事業(百万円)	665
合計(百万円)	21,063

(注) セグメント間の内部振替後の数値によっております。

b. 受注実績

当連結会計年度の受注状況をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(百万円)	受注残高(百万円)
コンサルタント事業	37,815	21,504
サービスプロバイダ事業	690	1,098
プロダクツ事業	759	1,237
合計	39,265	23,840

c. 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
コンサルタント事業(百万円)	36,446
サービスプロバイダ事業(百万円)	668
プロダクツ事業(百万円)	488
合計(百万円)	37,604

(注) 1. セグメント間の取引については相殺消去しております。

2. 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
	金額(百万円)	割合(%)
国土交通省	11,328	30.1

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づいて作成されています。この連結財務諸表を作成するために、会計方針の選択、資産・負債及び収益・費用の報告金額及び開示に影響を与える見積りを行っております。経営者は、これらの見積りについて過去の経験・実績や現在及び見込まれる経済状況など勘案し、合理的に判断しておりますが、実際の結果は見積りの不確実性があるため、これらの見積りと異なる結果になる場合があります。

(繰延税金資産の回収可能性)

当社グループは、将来の課税所得に関するものを含めた様々な予測・仮定に基づいて繰延税金資産を計上しており、実際の結果がかかる予測・仮定とは異なる可能性があります。また、将来の課税所得に関する予測・課税に基づいて、当社又は子会社が繰延税金資産の一部又は全部の回収ができないと判断した場合、当社グループの繰延税金資産は減額され、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。繰延税金資産の詳細については、「第5 経理の状況 1連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項(税効果会計関係)」をご覧ください。

(受注損失引当金の算定)

当社グループでは、受注契約に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末時点で将来の損失が見込まれ、かつ、当該損失額を合理的に見積もることが可能なものについては、翌連結会計年度以降に発生が見込まれる損失額を計上しております。当該損失額は、将来の起こりうる結果を総合的に勘案して算定しておりますが、受注損失引当金の算定において使用される仮定は、見積りの変化によって影響を受ける可能性があります。当社グループでは、受注損失引当金が適切かどうかを常に確認しており、発生が見込まれる損失額について、必要十分な金額を引当計上していると考えていますが、実際の発生は、見積りと異なることがあり、受注損失引当金の計上金額が大きく修正される可能性があります。

(一定の期間にわたり履行義務を充足し認識する収益)

当社グループは、一定の期間にわたり履行義務が充足される契約については、履行義務の充足に係る進捗度を見積り、一定の期間にわたり収益を認識しております。

詳細については、「第5 経理の状況 1連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項(重要な会計上の見積り)」をご覧ください。

(固定資産の減損処理)

当社グループは、固定資産のうち減損の兆候がある資産について、当該資産から得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回る場合には、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として計上しております。減損の兆候の把握、減損損失の認識及び測定に当たっては慎重に検討しておりますが、将来の利益計画や市場環境の変化により、その見積りの前提とした条件や仮定に変更が生じた場合、減損処理が必要となる可能性があります。

なお、新型コロナウイルス感染症の感染状況や収束時期等を含む仮定に関する情報は、「第5 経理の状況 1連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項(追加情報)」に記載しています。

当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

1) 経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標について、当社グループは2021年11月に公表いたしました「2022年9月期通期連結業績予想および配当予想に関するお知らせ」において、当連結会計年度の業績予想として、売上高357億円、営業利益26億70百万円としておりました。

当連結会計年度の売上高は376億4百万円となり、経営成績目標と比べて19億4百万円の増収となりました。これは主に国内コンサルタント事業のうち特に基幹事業の安定受注に加えて、国土強靱化に向けての災害対策事業や社会資本の老朽化対策事業、またPPP/PFIに代表される地域創生事業、更に再生可能エネルギー関連事業を推進したことによるものです。

売上原価は、261億73百万円となりました。この結果、売上総利益は114億30百万円となり、また、売上総利益率は30.4%となりました。

販売費及び一般管理費は、80億32百万円となり、売上高に対する比率では21.4%となりました。

これにより、営業利益は33億97百万円となり、売上高営業利益率は9.0%となりました。

営業外損益は、4億94百万円となりました。これは主に受取保険金1億95百万円に加え、為替差益2億31百万円が発生したことによるものです。

この結果、経常利益は38億91百万円となり、売上高経常利益率は10.3%となりました。

特別損失は、2億24百万円となりました。これは主に減損損失2億10百万円が発生したことによるものです。

これにより、税金等調整前当期純利益は36億67百万円となりました。

法人税等合計は、13億24百万円となりました。これは主に法人税・住民税及び事業税を14億35百万円計上したことによるものです。

これにより、当期純利益は23億42百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は23億33百万円となりました。

以上より、当連結会計年度は順調な経営成績が得られたと判断しております。

2) 資本の財源及び資金の流動性

当社グループの運転資金の主な需要は、業務に関わる原価(固定費、変動費)、販売費、一般管理費等です。事業の発展に向けての投資資金需要は、設備投資や研究開発投資に加え、事業案件等への事業投資によるものであります。

短期的運転資金は自己資金並びに金融機関からの短期借入金を、また事業投資等に関しては主に自己資金を基本としております。

当社グループは、上記のように資金の流動性を高めると共に、それら資本財源の安定的確保をより一層高めるよう努めてまいります。

なお、当連結会計年度末における有利子負債の残高は、13億35百万円となっております。

3) 経営方針・経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当連結会計年度は、中期経営計画「持続成長プラン2019」の3年目となります。目標とする経営指標として連結における売上高並びに営業利益を掲げました。これらの目標に対する当連結会計年度の実績は下表のとおり結果となりました。

(単位：百万円)

	連結	
	中期経営目標	実績
売上高	35,700	37,604
営業利益	3,000	3,397

連結売上高は目標に対し5.3%の増加となりました。また、連結営業利益におきましても、目標に対し13.3%の増加となりました。

2022年11月に公表いたしました中期経営計画「持続成長プラン2025」におきましては、目標とする経営指標として連結における売上高、営業利益に加え、それらを実現するために必要不可欠となる従業員数を掲げております。

4 【経営上の重要な契約等】

(取得による企業結合)

当社は、2022年8月25日開催の取締役会において、株式会社ピーシーレールウェイコンサルタントの株式譲渡契約を締結することを決議し、2022年10月4日付で全株式を取得し、連結子会社といたしました。

詳細は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(重要な後発事象)」に記載のとおりであります。

5 【研究開発活動】

建設コンサルタント業界においては、先端的業務を受注遂行する過程で新しい技術、ノウハウを蓄積していくことが重要であります。すなわち、受注業務の中に研究開発的な要素が含まれています。当社グループにおきましても、多様化、高度化する顧客ニーズに的確に対応するため、先端的な業務の受注に積極的に取り組んでおります。

また、このような新しい技術やノウハウを得るための独自の研究開発も推進しております。

当連結会計年度における研究開発実施のための費用として356百万円支出いたしました。各セグメント別の研究開発費はコンサルタント事業325百万円、サービスプロバイダ事業31百万円であります。

主な研究開発活動として、インフラ設備点検の効率向上や安全性確保のためのロボット等ハードの研究、新事業開発に向けた市場調査および設計・分析における最先端技術を活用したシステムの研究等を実施しました。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度において実施いたしました当社グループの設備投資は759百万円となります。その主なものは、子会社において、総合研究所の土地を購入したことによるものであります。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2022年9月30日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
			建物及び 構築物 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース資産 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
本社 (東京都中央区)	全社統括業務	管理施設	257	1,354 (255.76)	-	2	1,614	31

(注) 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品であります。

(2) 国内子会社

2022年9月30日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
				建物及び 構築物 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース資産 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
(株)長大	総合研究所 (茨城県つくば市)	コンサルタント 事業	研究施設 及び 営業施設等	292	240 (2,321.17)	7	3	543	71
(株)長大	本社経営センター (東京都中央区)	統括業務	管理施設 及び 営業施設等	-	- (-)	24	2	27	44
(株)長大	本社技術センター (東京都中央区)	コンサルタント 事業、 サービスプロバ イダ事業、 プロダクツ事業	営業施設等	33	- (-)	15	10	59	232
(株)長大	上野オフィス (東京都台東区)	コンサルタント 事業	営業施設等	13	- (-)	3	2	19	91
(株)長大	大阪支社 (大阪市西区)	コンサルタント 事業	営業施設等	19	- (-)	-	0	20	183
(株)長大	高松支社 (香川県高松市)	コンサルタント 事業	営業施設等	20	30 (446.41)	-	0	50	17
(株)長大	福岡支社 (福岡市中央区)	コンサルタント 事業	営業施設等	76	37 (171.76)	-	0	114	55
基礎地盤コ ンサルタン ツ(株)	ジオ・ラボセンター (千葉市稲毛区)	コンサルタント 事業	研究施設 及び 営業施設等	278	44 (2,440.26)	-	71	393	23
基礎地盤コ ンサルタン ツ(株)	関西試験室 (大阪府八尾市)	コンサルタント 事業	研究施設 及び 営業施設等	14	106 (973.00)	-	22	143	14
(株)南部町バ イオマスエ ナジー	本社 (山梨県南巨摩郡)	サービスプロバ イダ事業	発電施設等	246	- (-)	344	164	754	-

(注) 帳簿価額のうち「その他」は、機械装置及び運搬具ならびに工具、器具及び備品であります。

(3) 在外子会社

主要な設備はありません。

3【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末現在においては、重要な設備の新設、除却等の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	37,000,000
計	37,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2022年9月30日)	提出日現在発行数(株) (2022年12月26日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	9,416,000	9,416,000	東京証券取引所 プライム市場	単元株式数100株
計	9,416,000	9,416,000		

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高(株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2021年10月1日(注)	9,416,000	9,416,000	3,107	3,107	4,864	4,864

(注) 発行済株式総数並びに資本金及び資本準備金の増加は、2021年10月1日に単独株式移転により当社が設立されたことによるものです。

(5)【所有者別状況】

2022年9月30日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式 の状況 (株)
	政府及び地方 公共団体	金融機関	金融商品取引 業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	20	21	30	73	1	2,387	2,532	
所有株式数 (単元)	-	27,751	1,030	4,155	13,147	1	47,996	94,080	8,000
所有株式数の 割合(%)	-	29.50	1.09	4.42	13.97	0.00	51.02	100.00	

- (注) 1. 自己株式130,518株は、「個人その他」に1,305単元及び「単元未満株式」に18株を含めて記載しております。
2. 「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」が所有する当社株式2,016単元及び「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が所有する当社株式2,792単元は「金融機関」に含めて記載しております。
3. 「その他の法人」欄の議決権の数には、証券保管振替機構名義の株式に係る議決権3単元が含まれております。

(6)【大株主の状況】

2022年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	1,018	10.97
人・夢・技術グループ社員持株会	東京都中央区日本橋蛸殻町1-20-4	1,009	10.87
HSBC PRIVATE BANK (SUISSE) SA GENEVA - SEGRE G HK IND1 CLT A SSET (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	9-17 QUAI DES BERG UES 1201 GENEVA SW ITZERLAND (東京都中央区日本橋3-11-1)	403	4.34
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海1-8-12	332	3.58
株式会社日本カストディ銀行(信託E口)	東京都中央区晴海1-8-12	279	3.01
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2-7-1	237	2.56
丸田 稔	長野県上伊那郡	233	2.52
日本生命保険相互会社 (常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内1-6-6 日本生命証券管理部内 (東京都港区浜松町2-11-3)	212	2.29
野村信託銀行株式会社(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)	東京都千代田区大手町2-2-2	201	2.17
有限会社ピーシー	栃木県宇都宮市元今泉3-18-13	200	2.15
BNP PARIBAS SECURITIES SERVICE S LUXEMBOURG/JASDEC/FIM/LUXEMBOURG FUNDS/UCITS ASSETS (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	33 RUE DE GASPERICH, L-5826 HOWALD-HESPERANGE, LUXEMBOURG (東京都中央区日本橋3-11-1)	200	2.15
計	-	4,328	46.61

(注) 2022年10月11日付の臨時報告書(主要株主である筆頭株主の異動)にてお知らせしたとおり、日本マスタートラスト信託銀行株式会社が当事業年度末では主要株主になっております。

(7)【議決権の状況】

【発行済株式】

2022年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 611,300	4,808	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 8,796,700	87,967	-
単元未満株式	普通株式 8,000	-	一単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	9,416,000	-	-
総株主の議決権	-	92,775	-

(注)1.「完全議決権株式(自己株式等)」の欄には「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」が所有する株式201,600株及び「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が所有する株式279,200株を含めて表示しております。

2.「完全議決権株式(その他)」の欄には、証券保管振替機構名義の株式300株が含まれております。

【自己株式等】

2022年9月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数 (株)	他人名義所有 株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
人・夢・技術グループ株式会社	東京都中央区日本橋 蛸殻町1-20-4	130,500	480,800	611,300	6.49
計		130,500	480,800	611,300	6.49

(注)1.他人名義で所有している理由

上記の他人名義で所有している自己株式のうち、201,600株は「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」の信託財産として、野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口、東京都千代田区大手町2-2-2)が所有しております。

また、279,200株は「株式給付信託(J-ESOP)」の信託財産として、(株)日本カストディ銀行(信託E口、東京都中央区晴海1-8-12)が所有しております。

2.自己名義所有株式は、当社の完全子会社である株式会社長大が保有していた当社株式を現物配当により2021年12月23日付で取得したものです。

(8)【役員・従業員株式所有制度の内容】

(信託型従業員持株インセンティブ・プラン)

従業員株式所有制度の概要

当社グループは、当社グループ社員(以下「社員」という。)に対して中長期的な企業価値向上のインセンティブを付与すると同時に、福利厚生増進策として、持株会の拡充を通じて社員の株式取得及び保有を促進することにより社員の財産形成を支援することを目的として「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」(以下「本プラン」という。)を導入しています。

本プランは、「人・夢・技術グループ社員持株会」(以下「持株会」という。)に加入するすべての社員を対象とするインセンティブ・プランです。本プランでは、当社が信託銀行に「人・夢・技術グループ社員持株会専用信託」(以下「従持信託」という。)を設定し、従持信託は、その設定後3年間にわたり持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を予め取得いたしました。その後は、従持信託から持株会に対して継続的に当社株式の売却が行われるとともに、信託終了時点で従持信託内に株式売却益相当額が累積した場合には、当該株式売却益相当額が残余財産として受益者適格要件を満たす者に分配されます。なお、当社は、従持信託が当社株式を取得するための借入に対し保証することになるため、当社株価の下落により従持信託内に株式売却損相当額が累積し、信託終了時点において従持信託内に当該株式売却損相当の借入金残債がある場合は、保証契約に基づき、当社が当該残債を弁済することになります。

従業員持株会に取得させる予定の株式の総数

201,600株

当該従業員株式所有制度による受益権その他の権利を受けることができる者の範囲

受益者適格要件を充足する当社グループ持株会会員

(従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引)

当社は、株式会社長大において2019年8月に社員に対して自社の株式を給付するインセンティブ・プラン「株式給付信託(J-ESOP)」(以下「ESOP信託」という。)を継承しております。

ESOP信託は、当社の株価や業績と当社の社員の処遇の連動性をより高め、経済的な効果を株主の皆様と共有することにより、株価及び業績向上への社員の意欲や士気を高めることを目的としております。

ESOP信託制度の概要

ESOP信託は、一定の要件を満たした当社社員に対し、当社の株式を給付する仕組みです。

当社は、「株式給付規程」に基づき、社員に対して個人の貢献度等に応じたポイントを付与し、一定の条件により受給権を取得した者について、ESOP信託より当該付与ポイントに相当する当社株式を、退職後に給付します。社員に対し給付する株式については、ESOP信託が当社より拠出した金銭を原資に将来分も含め取得しており、信託財産として分別管理いたします。

従業員に給付する予定の株式の総数

279,200株

ESOP信託による受益権その他の権利を受けることができる者の範囲

「株式給付規程」に定める所定の手続きを行い、受給権を取得した者

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第7号及び会社法第155条第13号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

区分	株式数(株)	価格の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	137	291,272
当期間における取得自己株式	-	-

(注)当期間における取得自己株式には、2022年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

会社法第155条第13号に該当する普通株式の取得(現物配当)

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	130,381	279,406,483
当期間における取得自己株式	-	-

(注)連結子会社からの現物配当によるものであります。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他(単元未満株式の買増請求)	-	-	-	-
その他(第三者割当による自己株式の処分)	-	-	100,000	268,100,000
保有自己株式数	130,518	-	30,518	-

- (注) 1. 有価証券報告書提出日現在の保有株式数には、2022年12月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含まれておりません。
2. 上記の処理自己株式数には、人・夢・技術グループ社員持株会への売渡し等による29,500株(当事業年度21,900株、当期間7,600株)を含めておりません。また、保有自己株式数には「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」が保有する株式数(当事業年度201,600株、当期間194,000株)を含めておりません。
3. 上記の処理自己株式数には、株式給付信託制度による「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」からの交付による800株(当事業年度800株、当期間0株)を含めておりません。また、保有自己株式数には「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が保有する株式数(当事業年度279,200株、当期間279,200株)を含めておりません。
4. 当期間における「その他(単元未満株式の買増請求)」には、2022年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買増請求による株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、収益力向上により財務体質を強化し強固な経営基盤を確立するとともに、株主に対する利益の還元を経営上重要な施策の一つと位置付け、1株当たり配当額40円と配当性向25%に基づく配当額の高い方を目安として、「長期経営ビジョン2030」の最終年となる2030年までの間、より安定的な配当を行うことを基本方針としております。この方針に基づき、利益配当額を決定するとともに、事業展開に備えた投資、研究開発のための内部留保を決定しております。

当社における剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会でありませ

す。上記の考え方にに基づき、当期の期末配当金につきましては、1株当たり66円といたします。また、取締役会の決議により、会社法第454条第5項に規定する中間配当を行うことができる旨を定款に定めておりますが、決算期末において年1回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりです。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2022年12月23日 定時株主総会決議	612	66

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社グループは、「人が夢を持って暮らせる社会の創造に技術で貢献する。」という経営理念のもと、豊かな自然を生かしながら「人」が「夢」を持って安心・安全に暮らすことのできる生活基盤を創造し支えるため、「技術」の研鑽に励んでいます。当社グループは、安心・安全に暮らせる社会の創造への貢献が社会的使命であるという認識のもと、ステークホルダーの皆さまの期待と信頼に応えるよう努力し、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を目指します。

そこで当社は、当社グループにおける経営理念を追求し、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を実現するため、企業統治体制として監査等委員会設置会社を採用し、経営への監視体制を強化し、経営における果敢な意思決定の透明・公正かつ迅速性を確保することを、コーポレート・ガバナンスの基本的な考え方とします。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、監査等委員が取締役として、会社の重要な事項について取締役会で議決権を行使できることや、業務執行取締役の業務執行について結果を検証し、株主総会で意見を述べるができること等、監査等委員の法律上の機能を活用することにより、コーポレート・ガバナンスの一層の強化を図り、経営の健全性と効率性を高め、公正な経営を実現するため、監査等委員会設置会社としております。

〔取締役、取締役会、特別審査委員会〕

経営環境の変化に迅速、的確に対応するため、取締役（監査等委員であるものを除く）を9名以内、監査等委員である取締役（以下「監査等委員」という。）は5名以内とし、任期を1年に定めております（監査等委員の任期は2年）。

現在の取締役は5名体制で、取締役会は経営上の重要事項に関する意思決定を合理的かつ効率的に行うことを基本方針とし、毎月1回開催しております。

また、特別審査委員会は、取締役の指名・報酬等に関する手続きの公正性・透明性・客観性を強化し、コーポレート・ガバナンスの充実を図るため、取締役会の諮問機関として設置しております。特別審査委員会は、原則年3回開催する予定となっております。

〔監査等委員会〕

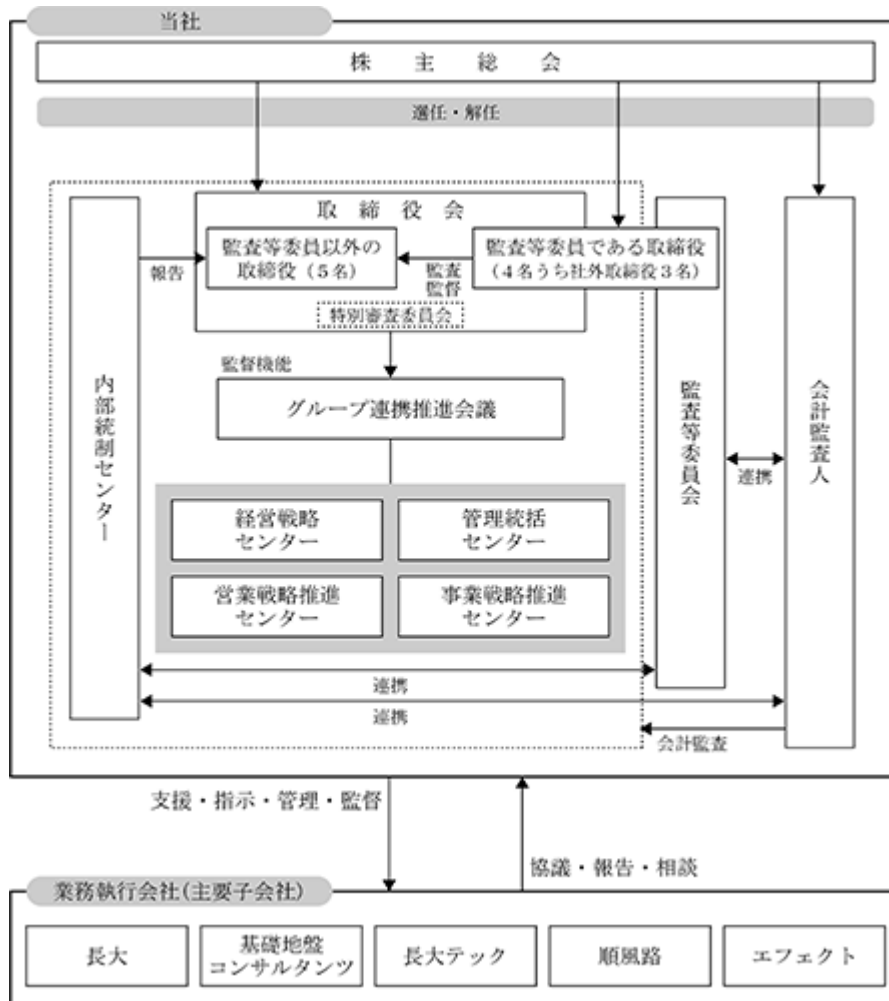
監査等委員4名は、社外監査等委員が3名、社内出身の常勤監査等委員が1名で構成されており、取締役会での意思決定の過程、取締役の職務執行状況、その他グループ経営に係わる全般の職務執行状況について監査を実施しております。また、必要に応じて、取締役及び各部門長に対して報告を求め、職務執行状況について情報を収集いたします。なお、会計監査の適正性を確保するため、当社の会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人から監査の報告を受けているほか、監査等委員、内部監査担当者及び会計監査人は、定期的にミーティングを開催することによって情報交換を行い、連携を密にすることによって的確な監査体制の維持にも注力いたします。

〔グループ連携推進会議〕

取締役会で決定した基本方針に基づくグループ経営運営・管理に関する重要事項を協議決定し報告する機関として、取締役及び当社に設置する5つのセンターの長、その他代表取締役社長の指名する者を参加者として月1回開催され、取締役会からの授權範囲内で行う業務執行における重要事項及び重要な業務の方針・方向を決定し、その執行を審議、確認しています。

会社の機関・内部統制の関係図

当社のコーポレート・ガバナンス体制の模式図は以下のとおりであります。



また、取締役会、グループ連携推進会議、監査等委員会、特別審査委員会の構成員は次のとおりであります。
は取締役会、グループ連携推進会議、監査等委員会、特別審査委員会における議長を示しております。

役職名	氏名	取締役会	グループ連携推進会議	監査等委員会	特別審査委員会
代表取締役社長	永治 泰司				
取締役副社長	野本 昌弘				
取締役副社長	柳浦 良行				
専務取締役	井戸 昭典				
常務取締役	塩釜 浩之				
取締役 (監査等委員)	西村 秀和				
社外取締役 (監査等委員)	田邊 章				
社外取締役 (監査等委員)	二宮 麻里子				
社外取締役 (監査等委員)	酒井 之子				
内部統制センター センター長	柴田 尚規				
経営戦略センター センター長	加藤 聡				
管理統括センター センター長	橋本 真一				
営業戦略推進センター センター長	上保 繫幸				
事業戦略推進センター センター長	菊地 英一				

企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システムの整備の状況

内部統制システムとして、「内部統制センター」を設置しております。内部統制センターには内部監査部門と内部統制監理部門を設置し、内部監査部は月次監査、実地監査、特別監査を主として担当し、内部統制監理部はJ-SOX監査、ISO（品質、環境、ISMS、アセットマネジメント）監査のグループ統括を主として担当しております。また、内部統制委員会の設置により、監視体制の強化を図っております。

b. リスク管理体制の整備の状況

当社は「リスク管理規程」を整備し、リスク管理は「内部統制センター」が担当し、リスク情報の収集、「リスク管理規程」及びマニュアルの整備を行い、リスク管理全般を統括することとしております。また、「内部統制センター」は、コンプライアンスホットラインの窓口として、情報の収集、対応の早期化を図り適正なリスク管理を目指しております。

c. 子会社の業務の適正性を確保するための体制整備の状況

当社は、子会社の業務の適正性を確保するために、子会社に取締役及び監査役を派遣し、取締役は当社グループの経営方針を踏まえて意思決定を行うとともに、子会社の取締役の職務執行を監視・監督し、監査役は子会社の業務執行状況を監査しております。

グループ全体で経営理念、中期経営計画等を共有するとともに、各子会社の業務執行状況については、「関係会社管理規程」に基づき、業績状況を中心に定期的に報告させ、経営上重要な事項を決定する場合は、事前の協議または報告が行われる体制を整備しています。また定期的な情報交換を通じて、子会社の業務の適正性を確認しております。

補償契約

当社は、当社の取締役との間で、会社法第430条の2第1項第1号の費用および同項第2号の損失を法令の定める範囲内で補償することを目的とする補償契約を締結しております。

当社は、当該補償契約によって役員等の職務の執行の適正性が損なわれないようにするため、当該補償契約において主に以下の事項を定めております。

- ・通常要する費用の額を超える部分の費用等は補償しない旨
- ・第三者に生じた損害賠償責任を負う場合の損失のうち、任務懈怠責任に係る部分または職務を行うにつき悪意または重大な過失があったことにより責任を負う場合の費用等は補償しない旨

役員等賠償責任保険契約

当社は、保険会社との間で、当社及び子会社、孫会社の役員を被保険者として、被保険者に対して損害賠償請求がなされたことにより被保険者が被る損害等（法律上の損害賠償、争訟費用等）を填補することを目的とする保険契約を2022年10月1日に締結しております。

当該保険契約によって役員等の職務の執行の適正性が損なわれないようにするため、当該保険契約において主に以下の事項を定めております。

- ・保険期間中における保険金の総支払限度額
- ・私的な利益または便宜の供与を違法に得たことや犯罪行為に起因する損害等については、保険金が支払われない旨

なお、被保険者に含まれる当社の取締役に対する当該保険契約の保険料は、当社が全額負担しております。

取締役の定数

当社の取締役（監査等委員であるものを除く）は9名以内、監査等委員は5名以内とする旨を定款に定めております。

社外取締役との人的関係、資金的関係又は取引関係その他の利害関係
該当事項はありません。

取締役会で決議することができる株主総会決議事項

a. 自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項に基づき、市場取引又は公開買付けの方法により、自己の株式を取得することを取締役会の決議によって定めることができる旨を定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とすることを目的とするものであります。

b. 中間配当

当社は、会社法第454条第5項に基づき、毎年3月31日の最終の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、取締役会の決議により中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。これは、株主への機動的な利益還元を可能とすることを目的とするものであります。

責任限定契約の内容の概要

当社と非業務執行取締役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。

当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、会社法第425条第1項各号に定める金額の合計としております。

株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

会社の支配に関する基本方針

a. 基本方針の内容

当社は、金融商品取引所に株式を上場している者として、市場における当社株式等の自由な取引を尊重し、特定の者による当社株式等の大規模買付行為であっても、当社グループの企業価値ひいては株主共同の利益の確保・向上に資するものである限り、これを一概に否定するものではありません。また、最終的には株式等の大規模買付提案に応じるかどうかは株主の皆様のご決定に委ねられるべきだと考えております。但し、株式等の大規模買付提案の中には、たとえばステークホルダーとの良好な関係を保ち続けることができない可能性があるなど、当社グループの企業価値ひいては株主共同の利益を損なうおそれのあるものや、当社グループの価値を十分に反映しているとは言えないもの、あるいは株主の皆様が最終的な決定をされるために必要な情報が十分に提供されないものもありえます。

そのような提案に対して、大規模買付行為等により、当社グループの企業価値の源泉が中長期的に見て毀損されるおそれがあり、当社グループの企業価値向上又は株主共同の利益の最大化が妨げられるおそれが存する場合には、大規模買付者を例外的に当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として適当でないと判断します。

b. 取組みの内容

イ. 基本方針の実現に資する特別な取組み

当社の前身である株式会社長大は、事業環境が大きく変化する中、2019年、「長期経営ビジョン2030」を掲げました。このビジョンは、新たな建設コンサルタント像の実現を通じて、「人が夢を持って暮らせる社会の創造」を目指すものです。そして、ますます加速する市場環境の変化に柔軟に対応しながら、当社グループのビジョンに向けて自ら変革する組織として成長するために、2021年10月、持株会社である人・夢・技術グループを設立しました。

さらに、2030年をマイルストーンとした「長期経営ビジョン2030」の実現に向けて、成長の基盤づくりと位置づけた第1フェーズ(2020年9月期~2022年9月期)を経て、第2フェーズ(2023年9月期~2025年9月期)の「持続成長プラン2025」を策定し、今後3年間のより具体的な目標及び施策をとりまとめております。この「持続成長プラン2025」は、「長期経営ビジョン2030」の実現に向けた「長期経営ビジョン2030」へ向けたステップで、当社グループの確かな成長へ繋げるため、事業領域の確立と拡大、また、戦略的な人材投資の推進を図るとともに、より多くの企業の当社グループへの参加やグループ各社相互の連携・補完により、グループ力の強化に取組みます。計画期間中は以下の基本方針、5つ主要施策と3つの横断的な取組みを推進します。

5つの主要施策

事業軸 国土基盤 整備・ 保全分野	主要施策 1	人・夢・技術グループの基幹を担う国土基盤整備・保全分野のさらなる強化
事業軸 環境・新工 エネルギー 分野	主要施策 2	カーボンニュートラルに関するあらゆる側面からの事業参画
事業軸 地域創生 分野	主要施策 3	「人・夢・技術グループが目指す地域創生」の実現に向けた多様なまちづくりのサービスの提供
海外連携 展開領域	主要施策 4	新たな海外事業展開のための海外拠点及び営業・技術部門の体制強化
国内事業 推進	主要施策 5	新たな地域や顧客の開拓と災害時の対応強化

3つの横断的な取組み

横断的 取組み 1	多様な働き方の提示と採用・育成の強化
横断的 取組み 2	イノベーションによる新事業・新技術の創出とIT化・DX推進による圧倒的な生産性の向上
横断的 取組み 3	グループのガバナンス強化とM&A・新事業投資の推進

×

以上の方針に基づき事業を着実に推進することで、当社の持つ経営資源を有効に活用するとともに、様々なステークホルダーとの良好な関係を維持・発展させ、当社および当社グループの企業価値ひいては株主共同の利益の向上に資することができると考えております。

ロ. 不適切な者によって支配されることを防止する取組み

当社は、基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務および事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組み（会社法施行規則第118条第3号ロ）の一つとして、「株式等の大規模買付行為に関する対応策」（以下「本プラン」という。）を導入しており、2021年12月22日開催の臨時株主総会でその継続導入が承認されております。

当社は、株主の皆様から経営責任を負託された者の責務として、大規模買付者に対して事前に大規模買付行為等に関する必要な情報の提供及び考慮・交渉のための期間の確保を求めることによって株主の皆様のために、必要な時間や情報の確保、株式等の大規模買付提案者との交渉などを行うことを必要があると考えております。

本プランは、当社株式等の大規模買付行為を行おうとする者が遵守すべきルールを策定するとともに、一定の場合には当社が対抗措置をとることによって大規模買付行為を行おうとする者に損害が発生する可能性があることを明らかにし、これらを適切に開示することにより、当社の企業価値ひいては株主共同の利益に資さない当社株式等の大規模買付行為を行おうとする者に対して、警告を行うものです。

c. 取締役会の判断及びその判断に係る理由

イ. 前記b. イ. の取組みは、当社の企業価値を継続的に向上させるための具体的方策として策定されたものであり、前記a. の基本方針に沿うものであって、株主共同の利益を損なうものではなく、当社役員の地位の維持を目的とするものではないと判断しております。

ロ. 前記b. ロ. の取組みについては、大規模買付行為に関する情報提供を求めるとともに、大規模買付行為が当社の企業価値を毀損する場合に対抗措置を発動することを定めるものであり、前記a. の基本方針に沿ったものであります。また、株主意思を尊重するため、株主総会の承認を得ており、さらに、取締役会によって恣意的な判断がなされることを防止するために独立委員会を設置しております。取締役会は独立委員会の勧告を最大限に尊重したうえで、対抗措置の発動を決議することとしております。その判断の概要については、適時に株主の皆様へ情報開示することとしているため、その運営は透明性をもって行われます。

したがって、当社取締役会としては、株主共同の利益を損なうものではなく、当社役員の地位の維持を目的とするものではないと判断しております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性7名 女性2名 (役員のうち女性の比率22.2%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役社長	永治 泰司	1952年2月8日生	1980年4月 ㈱長大橋設計センター(現㈱長大)入社 2006年12月 同社取締役上席執行役員事業推進本部副本部長及び国際事業部長 2008年10月 同社取締役上席執行役員事業推進本部長 2009年12月 同社代表取締役社長最高執行役員 2020年4月 同社代表取締役社長最高執行役員管理本部長 2020年12月 同社代表取締役社長最高執行役員 2021年10月 当社代表取締役社長(現任) 2021年12月 ㈱長大代表取締役会長会長執行役員(現任)	(注)2	116
取締役副社長	野本 昌弘	1959年11月17日生	1983年4月 ㈱長大橋設計センター(現㈱長大)入社 2010年12月 同社取締役上席執行役員構造事業本部長 2014年12月 同社取締役常務執行役員構造事業本部長 2016年12月 同社取締役常務執行役員海外事業本部長 2018年12月 同社取締役専務執行役員海外事業本部長 2021年10月 当社取締役副社長(現任) 2021年12月 ㈱長大代表取締役社長最高執行役員(現任)	(注)2	29
取締役副社長	柳浦 良行	1956年3月5日生	1986年4月 基礎地盤コンサルタンツ㈱入社 2008年6月 同社取締役執行役員関西支社長 2011年6月 同社取締役執行役員事業本部兼関西支社長 2012年6月 同社取締役常務執行役員事業本部長 2014年6月 同社取締役専務執行役員事業本部長兼技術本部長 2019年10月 同社代表取締役社長社長執行役員(現任) 2021年10月 当社取締役副社長(現任)	(注)2	5
専務取締役 コーポレート・ ガバナンス担当	井戸 昭典	1957年7月4日生	1982年4月 ㈱長大橋設計センター(現㈱長大)入社 2010年12月 同社取締役上席執行役員事業推進本部長 2014年12月 同社取締役常務執行役員事業推進本部長 2018年12月 同社取締役専務執行役員事業推進本部長 2020年12月 同社取締役専務執行役員管理本部長(現任) 2021年12月 当社専務取締役コーポレート・ガバナンス担当(現任)	(注)2	30
常務取締役 経営企画担当	塩釜 浩之	1963年3月13日生	1990年9月 ㈱長大入社 2010年10月 同社執行役員東日本スマートコミュニティ事業部長 2013年10月 同社執行役員社会環境事業部長 2014年10月 同社執行役員社会事業本部副本部長 2016年10月 同社執行役員管理本部副本部長 2016年12月 同社取締役上席執行役員経営企画本部長 2020年12月 同社取締役常務執行役員経営企画本部長 2021年10月 同社取締役常務執行役員経営企画担当(現任) 2021年10月 当社常務取締役経営企画担当(現任)	(注)2	20
取締役 (監査等委員)	西村 秀和	1957年8月21日生	1982年4月 ㈱長大橋設計センター(現㈱長大)入社 2008年4月 同社仙台支社長 2009年10月 同社内部統制室長 2015年12月 同社監査役(現任) 2021年10月 当社取締役監査等委員(現任)	(注)3	8

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 (監査等委員)	田邊 章	1949年1月21日生	1972年4月 ㈱三井銀行(現㈱三井住友銀行)入社 1996年5月 ㈱さくら銀行資金証券(現㈱三井住友銀行)企画部副部長 1997年1月 ㈱さくら証券取締役引受第一部長 1998年6月 ㈱さくら証券常務取締役 2001年4月 大和証券SMBC㈱(現大和証券㈱)執行役員 2005年4月 大和証券SMBC㈱(現大和証券㈱)常務執行役員 2006年4月 三井リース事業㈱(現JA三井リース㈱)入社 2006年6月 三井リース事業㈱(現JA三井リース㈱)取締役常務執行役員 2010年12月 ㈱長大取締役 2021年10月 当社取締役監査等委員(現任)	(注)3	-
取締役 (監査等委員)	二宮 麻里子	1967年10月27日生	2001年12月 弁護士登録(東京弁護士会) 2001年12月 隼国際法律事務所(現隼あすか法律事務所)入所 2002年10月 東京あおば法律事務所(現今村記念法律事務所)入所 2010年10月 つばさ法律事務所(現BACeLL法律会計事務所)入所(現任) 2015年1月 ㈱長大監査役 2019年6月 森川産業㈱取締役(現任) 2021年10月 当社取締役監査等委員(現任) 2021年12月 扶桑電通㈱取締役監査等委員(現任)	(注)3	-
取締役 (監査等委員)	酒井 之子	1963年5月8日生	2002年10月 日本アイ・ピー・エム㈱人事部キャリア開発関連部署部長 2013年8月 コニカミノルタジャパン㈱人材教育担当部署部長 2019年3月 博士(経営管理)取得(中央大学) 2019年4月 桃山学院大学ビジネスデザイン学部ビジネスデザイン学科特任准教授(現任) 2021年12月 当社取締役監査等委員(現任)	(注)4	-
計					211

- (注) 1. 田邊章氏、二宮麻里子氏及び酒井之子氏は、社外取締役であります。
2. 任期は2022年12月23日開催の定時株主総会の終結の時から2023年9月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
3. 任期は当社の設立日である2021年10月1日から2023年9月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
4. 任期は2021年12月22日開催の臨時株主総会の終結の時から2023年9月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
5. 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠の監査等委員である取締役1名を選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
岡田 直子	1978年6月7日生	2005年3月 修士(経営学)取得(立教大学) 2007年4月 ㈱ECナビ(現CARTA HOLDINGS)経営本部長 2009年1月 同社広報室長 2009年7月 ㈱ネットワークコミュニケーション代表取締役(現任) 2011年6月 一般社団法人オープンソースライセンス研究所理事(現任) 2014年3月 エプリー(同)エグゼクティブ事業部プロデューサー(現任) 2020年3月 ローランド ディー・ジー・㈱社外取締役(現任) 2020年7月 一般社団法人日本リスコムコミュニケーション協会副代表理事(現任) 2021年9月 ㈱レトリバ社外取締役(現任) 2022年6月 日特建設㈱社外取締役(現任)	(注)5	-

社外役員の状況

当社の社外取締役は3名であります。

社外取締役の田邊章氏は、金融分野における豊富な経験と幅広い見識を当社の経営全般に反映していただけるものと判断しております。

社外取締役の二宮麻里子氏は、弁護士の資格を有し、専門性と企業法務に関する大局的かつ高度な知見を、当社の監査体制に反映していただけるものと判断しております。

また、社外取締役の酒井之子氏は、博士（経営管理）として経営管理分野における豊富な経験と幅広い見識を有しており、当社の監査体制に大局的かつ高度な知見を反映していただけるものと判断しております。

なお、社外取締役3名とも当社との間で特別な利害関係はございません。

社外取締役の選任にあたり、独立性に関する基準又は方針は定めておりませんが、選任に当たっては、一般株主と利益相反が生じるおそれがないものとすることを選任基準のひとつと考えております。

社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

当社の内部統制センターは、社外取締役を含む監査等委員会とは定期及び必要に応じて情報の交換や話し合いが持てる体制にあります。また代表取締役は内部統制部門を統括し内部統制整備の実施計画・評価範囲・評価結果等について社外取締役を含む取締役会に対し、必要に応じて報告を行っております。

社外取締役を含む監査等委員会は会計監査人との間で監査計画に関する協議を行うとともに、会計監査人は、監査等委員会に対し定期的に監査結果に関する報告を行っております。

社外取締役を含む監査等委員会と会計監査人は、必要に応じて問題点の共有を図るための意見交換を実施するとともに、相互に連携しながら監査を行っております。

(3)【監査の状況】

監査等委員の監査の状況

当社の当事業年度末における監査等委員会は、監査等委員4名（うち社外監査等委員3名）から構成されておりました。

監査等委員は、事業年度ごとに設定される監査方針及び監査計画に基づいて実施されており、取締役会のほか重要な会議に出席し意見を述べるとともに、業務監査、会計監査等を実施しております。また、毎月監査等委員会を開催し、監査活動結果等に関する討議を行っております。当事業年度は13回開催いたしました。個々の監査等委員の出席状況については、次のとおりであります。

氏名	西村 秀和	田邊 章	二宮 麻里子	酒井 之子
開催回数	13回	13回	13回	9回
出席回数	13回	13回	13回	9回

(注) なお、酒井之子氏は、2021年12月22日開催の第1回臨時株主総会において選任された新任監査等委員であるため、就任後の出席回数を記載しております。

監査等委員会における主な検討事項として、監査計画、監査の方法、監査業務の分担等の設定、取締役の職務執行の妥当性、内部統制システムの構築・運用の状況、会計監査人の監査の方法及び結果の相当性等を実施しております。また、子会社の監査役を通じて監査の有効性を高めるとともに、当社監査等委員全員ならびに子会社監査役からなる（拡大）監査等委員会を開催し、情報共有と意見交換を行う等、グループ監査体制の整備に取り組んでおります。

常勤監査等委員の活動として、その他の重要度の高い会議に出席し必要に応じて意見を述べるとともに、監査の環境の整備及び社内情報の収集に積極的に努め、かつ、内部統制センターと連携し業務監査を行っております。

内部監査の状況

社長直轄組織である内部統制センターは、当社グループの国内・海外拠点において毎年監査を実施し、当社グループの内部統制システム、すなわち、経営方針等の共有化、各種情報伝達、リスク評価、財務報告の適正性および信頼性を確保するための体制、それらに基づく業務活動の有効性評価を行い、必要な場合には現場への業務改善の指導を行っております。また、業務監査、コンプライアンス監査、システム監査の機能も有し、監査機能の拡充を図っております。監査結果に関しましては、経営層に対する報告会を定期的実施するとともに、当社監査等委員および国内子会社監査役に対しても同様の報告会を実施しております。また、内部統制センターと会計監査人との間においても、定期的もしくは随時、情報交換が行われる体制とし、効率的・効果的な監査になるよう連携しております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

EY新日本有限責任監査法人

b. 継続監査期間

32年間

(注) 上記継続監査期間は単独株式移転により完全子会社となった株式会社長大の継続監査期間を含んで記載しております。

c. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 中原 義勝

指定有限責任社員 業務執行社員 佐藤 秀明

d. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士12名、その他11名となります。

e. 監査法人の選定方針と理由

当社は、監査法人の概要、監査の実施体制、監査報酬の見積額等に関する資料を入手するとともに、質問・面談等を行った上で、監査公認会計士等を選定しております。EY新日本有限責任監査法人は世界的に展開しているEYグループの一員であり、海外の会計および監査への知見が豊富であることから、海外事業を推進している当社グループにとって有効であると判断いたしました。

また、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定められる項目に該当すると認められる場合には、監査等委員全員の同意に基づき、監査等委員会が会計監査人を解任いたします。また、上記の場合のほか、会計監査人の適格性及び独立性を害する事由等の発生により、適正な監査の遂行が困難であると認められた場合、監査等委員会は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

f. 監査等委員及び監査等委員会による監査法人の評価

監査等委員会は、会計監査人が独立の立場を保持し、かつ適正な監査を実施しているかを監視および検証するとともに、会計監査人の監査方法、監査結果および会計監査人の職務の遂行に関する事項等の報告聴取により収集した情報に基づき、当社監査等委員会が策定した評価基準に照らして評価し、EY新日本有限責任監査法人が会計監査人として適切、妥当であると判断しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	33	-
連結子会社	26	-
計	59	-

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬(a.を除く)

区分	当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	-	-
連結子会社	-	8
計	-	8

当連結会計年度における連結子会社が監査公認会計士等と同一のネットワーク(EY税理士法人及びEYストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社)に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、税務アドバイザリー業務及び再生可能エネルギー領域における周辺情報収集支援業務等であります。

c. その他の重要な報酬の内容

(当連結会計年度)

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士に対する監査報酬の決定方針としましては、EY新日本有限責任監査法人の作成した監査計画及び予定日程に基づいた報酬の見積りの妥当性を社内担当部門において検証し担当取締役が決裁しております。また、会社法第399条に基づき監査等委員会の同意を得た上で決定しております。

e. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査等委員会は、監査計画の内容、従前の監査実績、報酬見積りの算出根拠等を確認し、検討した結果、会計監査人の報酬等の額は妥当であると判断し、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針に係る事項

a. 取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針に関する事項

イ. 当社は、当社の企業価値の持続的な向上を図るインセンティブを与えるとともに、報酬の決定方法について客観性と透明性を確保することを目的に、取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針（以下「決定方針」という。）を定めております。その概要は、次のとおりであります。

- ・ 取締役（社外取締役除く）の報酬（年俸）は、固定報酬と業績連動報酬で構成し、これを12等分し月額報酬として支給しております。
- ・ 固定報酬は、基本報酬と取締役手当からなり、取締役の職責と役職位に基づき、基本報酬額は従業員の給与水準も踏まえて決定し、取締役手当は基本報酬額に一定割合を乗じて算出しております。
- ・ 業績連動報酬は、当社は複数の子会社を支配する持株会社であり、営業外投資活動についても責任を有することから、連結経常利益を指標としており、当該連結会計年度における連結経常利益の予算値に対する達成率に応じて業績連動支給率を算出し、固定報酬の相当額に業績連動支給率を乗じることで算出しております。なお、当期の連結経常利益は、予算値2,707百万円に対し実績値3,891百万円で、その達成率は143%でございます。
- ・ 固定報酬と業績連動報酬の構成割合は、報酬体系が取締役に対する適切なインセンティブとして機能できるよう設定しております。
- ・ 社外取締役の報酬は、その職責を考慮し、基本的に固定報酬（年俸）のみとし、12等分し月額報酬として支給しております。ただし、業績好調時（従業員に決算賞与を支給する場合）には、報酬の2%を業績連動報酬一時金として支給しております。

ロ. 当該決定方針の決定方法については、報酬等支給基準を定め、当該基準に従い、取締役会が決定いたします。報酬等支給基準は、取締役会の任意諮問委員会である特別審査委員会での審議を経て、取締役会で決定いたします。なお、監査等委員の報酬につきましては、経営に対する独立性、客観性を重視する観点から、監査等委員の協議によって決定することとしております。

b. 取締役および監査等委員の報酬等についての株主総会の決議に関する事項

- イ. 取締役の報酬限度額（使用人分給与は含まない）は、2022年12月23日開催の第1回定時株主総会において年額250百万円以内と決議されております。当該定時株主総会終結時点の取締役の員数は5名です。
- ロ. 監査等委員の報酬限度額は、2022年12月23日開催の第1回定時株主総会において年額30百万円以内と決議されております。当該定時株主総会終結時点の監査等委員の員数は4名、うち社外取締役3名です。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	業績連動報酬 一時金	
取締役 (監査等委員及び 社外取締役を除く。)	121	75	27	17	5
取締役 (監査等委員。 社外取締役を除く。)	9	9	-	0	1
社外取締役	9	9	-	0	3

役員ごとの連結報酬等の総額等
連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人分給与のうち、重要なもの
該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式について、次の基準及び考え方により区分しております。

純投資目的である投資株式とは、専ら株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする株式投資であります。純投資目的以外の目的である株式投資とは、上記以外の株式投資であり、主として取引先との良好な関係の維持、強化を図るため、継続して保有することを目的とする株式投資であります。

現時点で保有目的が純投資目的の投資株式は保有しておりません。

人・夢・技術グループ株式会社における株式の保有状況

提出会社及び連結子会社のうち、最大保有会社である当社については、以下のとおりであります。

a. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

イ. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社グループは、事業運営上必要とされる銘柄のみ政策保有株式として保有するものとし、それ以外の銘柄については特段の事情がない限り縮減する方針としております。当社グループは純投資目的以外の目的である投資株式について取締役会において、毎年、個別の投資先企業の業績や財務体質等を総合的に評価し、当社グループの持続的な成長に資するか否かを検証しております。なお、当社グループの事業戦略上の重要性ならびに取引先との事業上の関係性も総合的に勘案し、その保有意義を個別に判断しております。

ロ. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	3	216
非上場株式以外の株式	5	300

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	3	219	株式会社長大からの現物配当
非上場株式以外の株式	5	121	株式会社長大からの現物配当

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	-	-
非上場株式以外の株式	-	-

八．特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度		保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)			
	貸借対照表計上額 (百万円)			
(株)建設技術研究所	52,200	当該会社とは事業や学会活動において協働して おります。これらの活動は両社の成長につなが ると同時に、インフラ整備技術の向上を通じて 社会貢献に資するものと考えており、同社との 良好な関係の維持、強化を図るため継続して保 有しております。	有	
	148			
(株)オリエンタル コンサルタンツ ホールディングス	21,000	当該会社とは事業や学会活動において協働して おります。これらの活動は両社の成長につなが ると同時に、インフラ整備技術の向上を通じて 社会貢献に資するものと考えており、同社との 良好な関係の維持、強化を図るため継続して保 有しております。	有	
	52			
(株)めぶきフィナ ンシャルグルー プ	187,200	当該グループとは資金借入取引等の銀行取引を 行っており、これらの取引および同社の事業運 営の透明性、健全性を確認することを目的に、 継続して保有しております。	有	
	52			
(株)三菱UFJ フィナンシャ ル・グループ	39,680	当該グループとは資金借入取引等の銀行取引を 行っており、これらの取引および同社の事業運 営の透明性、健全性を確認することを目的に、 継続して保有しております。	有	
	25			
(株)みずほフィナ ンシャルグルー プ	13,700	当該グループとは資金借入取引等の銀行取引を 行っており、これらの取引および同社の事業運 営の透明性、健全性を確認することを目的に、 継続して保有しております。	有	
	21			

(注) なお、上記の銘柄について、各社との守秘義務上、定量的な保有効果の記載は困難であります。上記aの方法により保有の合理性を検証しております。

みなし保有株式

該当事項はありません。

b．保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

c．当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

d．当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

株式会社長大における株式の保有状況

a. 保有目的が純投資目的以外目的である投資株式

当社及び連結子会社のうち、投資株式の貸借対照表計上額（投資株式計上額）が最大保有会社の次に大きい会社である株式会社長大については、以下のとおりであります。

イ. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社グループは、事業運営上必要とされる銘柄のみ政策保有株式として保有するものとし、それ以外の銘柄については特段の事情がない限り縮減する方針としております。当社グループは純投資目的以外の目的である投資株式について取締役会において、毎年、個別の投資先企業の業績や財務体質等を総合的に評価し、当社グループの持続的な成長に資するか否かを検証しております。なお、当社グループの事業戦略上の重要性ならびに取引先との事業上の関係性も総合的に勘案し、その保有意義を個別に判断しております。

ロ. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	13	221
非上場株式以外の株式	-	-

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	1	0	新規投資
非上場株式以外の株式	-	-	-

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	3	219
非上場株式以外の株式	5	121

ハ. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

該当事項はありません。

みなし保有株式

該当事項はありません。

b. 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

c. 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

d. 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。
- (3) 当社は2021年10月1日に設立され、当有価証券報告書は設立第1期として提出するものであるため、前連結会計年度及び前事業年度との対比は行っておりません。

なお、当連結会計年度の連結財務諸表は、単独株式移転により完全子会社となった株式会社長大の連結財務諸表を引き継いで作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2021年10月1日から2022年9月30日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2021年10月1日から2022年9月30日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人による監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等に適切に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準や、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価基準等の情報収集に努めております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

当連結会計年度
(2022年9月30日)

資産の部	
流動資産	
現金及び預金	7,521
受取手形、完成業務未収入金及び契約資産	1 11,884
商品	3
未成業務支出金	1,191
原材料及び貯蔵品	993
その他	1,834
貸倒引当金	59
流動資産合計	23,369
固定資産	
有形固定資産	
建物及び構築物	3,199
減価償却累計額	1,626
建物及び構築物(純額)	1,573
機械装置及び運搬具	958
減価償却累計額	504
機械装置及び運搬具(純額)	453
土地	2,266
リース資産	552
減価償却累計額	117
リース資産(純額)	435
建設仮勘定	9
その他	808
減価償却累計額	658
その他(純額)	150
有形固定資産合計	4,888
無形固定資産	
その他	197
無形固定資産合計	197
投資その他の資産	
投資有価証券	2 1,521
長期貸付金	477
繰延税金資産	1,665
その他	1,343
貸倒引当金	0
投資その他の資産合計	5,007
固定資産合計	10,093
資産合計	33,463

(単位：百万円)

当連結会計年度
(2022年9月30日)

負債の部	
流動負債	
業務未払金	2,356
1年内返済予定の長期借入金	50
リース債務	41
未払法人税等	777
未払費用	1,601
未成業務受入金	2,688
賞与引当金	1,190
役員賞与引当金	26
受注損失引当金	90
その他	835
流動負債合計	9,659
固定負債	
長期借入金	3 826
リース債務	417
繰延税金負債	32
株式給付引当金	57
退職給付に係る負債	2,558
資産除去債務	27
その他	43
固定負債合計	3,963
負債合計	13,623
純資産の部	
株主資本	
資本金	3,107
資本剰余金	5,268
利益剰余金	12,155
自己株式	922
株主資本合計	19,609
その他の包括利益累計額	
その他有価証券評価差額金	134
為替換算調整勘定	26
退職給付に係る調整累計額	27
その他の包括利益累計額合計	133
非支配株主持分	96
純資産合計	19,839
負債純資産合計	33,463

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
売上高	1	37,604
売上原価	4, 5	26,173
売上総利益		11,430
販売費及び一般管理費	2, 3	8,032
営業利益		3,397
営業外収益		
受取利息		0
受取配当金		12
受取保険金		195
受取家賃		13
受取補償金		28
補助金収入		12
為替差益		231
雑収入		96
営業外収益合計		591
営業外費用		
支払利息		37
損害賠償損失		46
雑損失		13
営業外費用合計		97
経常利益		3,891
特別損失		
減損損失	6	210
固定資産除売却損	7	2
投資有価証券評価損		11
特別損失合計		224
税金等調整前当期純利益		3,667
法人税、住民税及び事業税		1,435
法人税等調整額		110
法人税等合計		1,324
当期純利益		2,342
非支配株主に帰属する当期純利益		9
親会社株主に帰属する当期純利益		2,333

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

当連結会計年度
(自 2021年10月1日
至 2022年9月30日)

当期純利益	2,342
その他の包括利益	
其他有価証券評価差額金	29
為替換算調整勘定	18
退職給付に係る調整額	25
その他の包括利益合計	1 22
包括利益	2,365
(内訳)	
親会社株主に係る包括利益	2,347
非支配株主に係る包括利益	17

【連結株主資本等変動計算書】

当連結会計年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,107	5,031	10,080	257	17,961
会計方針の変更による累積的影響額			480		480
会計方針の変更を反映した当期首残高	3,107	5,031	10,561	257	18,442
当期変動額					
剰余金の配当			668		668
親会社株主に帰属する当期純利益			2,333		2,333
自己株式の取得				473	473
自己株式の処分				46	46
連結範囲の変動		2	70		68
株式移転による増減		238		238	-
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動		3			3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	237	1,594	664	1,166
当期末残高	3,107	5,268	12,155	922	19,609

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	105	15	2	119	82	18,163
会計方針の変更による累積的影響額						480
会計方針の変更を反映した当期首残高	105	15	2	119	82	18,644
当期変動額						
剰余金の配当				-		668
親会社株主に帰属する当期純利益				-		2,333
自己株式の取得				-		473
自己株式の処分				-		46
連結範囲の変動				-		68
株式移転による増減				-		-
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動				-		3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	29	10	25	14	13	28
当期変動額合計	29	10	25	14	13	1,195
当期末残高	134	26	27	133	96	19,839

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

当連結会計年度
(自 2021年10月1日
至 2022年9月30日)

営業活動によるキャッシュ・フロー	
税金等調整前当期純利益	3,667
減価償却費	401
減損損失	210
のれん償却額	34
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	170
貸倒引当金の増減額(は減少)	80
賞与引当金の増減額(は減少)	91
役員賞与引当金の増減額(は減少)	2
株式給付引当金の増減額(は減少)	16
受注損失引当金の増減額(は減少)	126
損害補償損失引当金の増減額(は減少)	259
受取利息及び受取配当金	13
支払利息	37
投資有価証券評価損益(は益)	11
その他の損益(は益)	94
売上債権の増減額(は増加)	5,841
未成業務支出金の増減額(は増加)	5,178
貯蔵品の増減額(は増加)	936
その他の資産の増減額(は増加)	813
業務未払金の増減額(は減少)	569
未成業務受入金の増減額(は減少)	1,999
未払消費税等の増減額(は減少)	463
未払費用の増減額(は減少)	157
その他の負債の増減額(は減少)	546
小計	467
利息及び配当金の受取額	9
利息の支払額	36
法人税等の支払額	1,675
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,234

(単位：百万円)

当連結会計年度
 (自 2021年10月1日
 至 2022年9月30日)

投資活動によるキャッシュ・フロー	
有形固定資産の取得による支出	558
投資有価証券の取得による支出	9
貸付けによる支出	377
貸付金の回収による収入	135
その他の支出	202
その他の収入	71
投資活動によるキャッシュ・フロー	941
財務活動によるキャッシュ・フロー	
短期借入れによる収入	3,503
短期借入金の返済による支出	3,503
長期借入れによる収入	474
長期借入金の返済による支出	76
配当金の支払額	668
非支配株主への配当金の支払額	2
自己株式の取得による支出	473
自己株式の処分による収入	46
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	10
その他の支出	56
財務活動によるキャッシュ・フロー	767
現金及び現金同等物に係る換算差額	99
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	2,844
現金及び現金同等物の期首残高	10,151
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	105
現金及び現金同等物の期末残高	1 7,413

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 . 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 10社

連結子会社の名称

株式会社長大
基礎地盤コンサルタンツ株式会社
株式会社長大テック
順風路株式会社
株式会社エフェクト
株式会社南部町バイオマスエネルギー
株式会社長大キャピタル・マネジメント
KISO-JIBAN Singapore Pte Ltd.
KISO-JIBAN (MALAYSIA) SDN.BHD.
CHODAI KOREA CO., LTD.

株式会社南部町バイオマスエネルギー及び株式会社長大キャピタル・マネジメントは重要性が増したため、当連結会計年度より、連結の範囲に含めております。

(2) 非連結子会社の数 7社

非連結子会社の名称

C.N.バリューマネジメント株式会社
洞峰パークマネジメント株式会社
CHODAI & KISO-JIBAN VIETNAM CO., LTD.
PT.WIRATMAN CHODAI INDONESIA
Chodai Philippines Corporation
台湾長大顧問有限公司
CHODAI MADAGASCAR S.A.R.L.U

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等はいずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結範囲には含めておりません。

2 . 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社及び関連会社数

持分法を適用している非連結子会社及び関連会社はありません。

(2) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社の名称

非連結子会社の名称

C.N.バリューマネジメント株式会社
洞峰パークマネジメント株式会社
CHODAI & KISO-JIBAN VIETNAM CO., LTD.
PT.WIRATMAN CHODAI INDONESIA
Chodai Philippines Corporation
台湾長大顧問有限公司
CHODAI MADAGASCAR S.A.R.L.U

関連会社の名称

日本インフラストラクチャーマネージメント株式会社
PT.AMCO HYDRO INDONESIA
株式会社別府鉄輪パークマネジメント
他 6 社

(持分法を適用しない理由)

非連結子会社 7 社及び関連会社 9 社がありますが、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3 . 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、在外子会社であるKISO-JIBAN Singapore Pte Ltd.、KISO-JIBAN (MALAYSIA) SDN.BHD.及びCHODAI KOREA CO., LTD.の決算日は6月30日であります。

連結財務諸表の作成に当たっては、KISO-JIBAN Singapore Pte Ltd.、KISO-JIBAN (MALAYSIA) SDN.BHD.及びCHODAI KOREA CO., LTD.については6月30日現在で実施した決算に基づく財務諸表を使用しております。

ただし、7月1日から連結決算日9月30日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

上記以外の連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と同一であります。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。)

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書等を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法により算定しております。

棚卸資産

未成業務支出金

個別法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定しております。)

原材料及び貯蔵品

先入先出法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定しております。)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

主として定率法(ただし、2005年10月1日以降に取得した建物(建物付属設備を除く)及び2016年4月1日以降に取得した建物付属設備及び構築物については、定額法)を採用しております。在外子会社については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 2年～50年

機械装置及び運搬具 2年～14年

無形固定資産

ソフトウェア

社内における利用可能期間(3～5年)に基づく定額法を採用しております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額の当連結会計年度負担額を計上しております。

役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

受注損失引当金

受注業務の損失発生に備えるため、当連結会計年度末の未引渡業務のうち、損失発生の可能性が高く、かつ、その金額を合理的に見積ることが可能な業務について、損失見込額を計上しております。

株式給付引当金

「株式給付規程」に基づく従業員の当社株式の給付に備えるため、当連結会計年度末における株式給付債務の見込額に基づき株式給付引当金を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。また、一部の子会社は退職給付信託を設定しております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を発生の日翌連結会計年度から費用処理しております。

小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループの顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点は以下のとおりであります。なお、当社グループの取引に関する支払条件は、通常、短期のうちに支払期日が到来し、契約に重要な金融要素は含まれておりません。

コンサルタント事業及びサービスプロバイダ事業

コンサルタント事業及びサービスプロバイダ事業においては橋梁の設計・老朽化対策、道路構造物の維持管理、再生可能エネルギー事業でのコンサルティング、地質・土質調査等を行っており、これらに関して当社グループが提供する業務を履行義務として識別しております。当該契約については、一定期間にわたり履行義務が充足されると判断し、履行義務の充足に係る進捗度に基づき収益を認識しております。履行義務の充足に係る進捗率の見積りの方法は、発生原価に基づくインプット法によっております。

プロダクツ事業

プロダクツ事業においては、主にエコ商品の販売等を行っております。エコ商品の販売等においては商品を顧客に引き渡した時点で収益を認識しております。

(6) 重要な外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社等の資産及び負債は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めて計上しております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

控除対象外消費税等の会計処理

控除対象外消費税及び地方消費税は、当連結会計年度の費用として処理しております。

のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、投資効果を発現する期間を見積り、5年で均等償却しております。

(重要な会計上の見積り)

(受注損失引当金)

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表上に計上した金額

受注損失引当金 90百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

受注契約に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末手持業務のうち、損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積ることができる業務について損失見込額を計上しております。損失見込額は業務収益総額から業務原価総額を差し引いた金額から既に計上された損失額を控除して算出しております。

主要な仮定

損失見込額は、業務原価総額の見積りに大きく依存しており、業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は変動することがあるため、業務の進捗状況、過去の業務実績等を踏まえて、これらを適時・適切に見積もっております。

翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は、不確実性が高く、業務内容の変更や追加業務の発生等により見直しが必要となった場合、翌連結会計年度の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(一定の期間にわたり履行義務を充足し認識する収益)

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表上に計上した金額

一定の期間にわたり履行義務を充足し収益を認識する方法により計上した売上高 37,033百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

一定の期間にわたり履行義務が充足される契約については、履行義務の充足に係る進捗度を見積り、一定の期間にわたり収益を認識しております。

主要な仮定

一定の期間にわたり履行義務が充足に係る収益認識については、業務原価総額の見積りに大きく依存しており、業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は変動することがあるため、業務の進捗状況、過去の業務実績等を踏まえて、これらを適時・適切に見積もっております。

翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は、不確実性が高く、業務内容の変更や追加業務の発生等により見直しが必要となった場合、翌連結会計年度の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(会計方針の変更)

当連結会計年度は当社の第1期となりますが、以下の項目は株式会社長大で採用していた会計処理方法から変

更しているため、会計方針の変更等として記載しております。

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することといたしました。

これにより、従来、進捗部分について成果の確実性が認められる業務については工事進行基準を、その他の業務については完成基準を採用していましたが、一定の期間にわたり履行義務が充足される契約については、履行義務の充足に係る進捗率を見積り、一定の期間にわたり収益を認識し、一時点で履行義務が充足される契約については、履行義務を充足した時点で収益を認識しております。

なお、履行義務の充足に係る進捗率の見積りの方法は、発生原価に基づくインプット法によっております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。また、収益認識会計基準第86項また書き(1)に定める方法を適用し、当連結会計年度の期首より前までに行われた契約変更について、すべての契約変更を反映した後の契約条件に基づき、会計処理を行い、その累積的影響額を当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減しております。

1株当たり情報に与える影響は当該箇所に記載しております。

この結果、当連結会計年度の売上高は53億7百万円、売上原価は39億66百万円それぞれ増加し、営業利益、経常利益及び税金等調整前当期純利益はそれぞれ13億40百万円増加しております。また、利益剰余金の当期首残高は4億80百万円増加しております。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、連結財務諸表への影響はありません。

また、(金融商品関係)の注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うこととしました。

(未適用の会計基準等)

・「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日 企業会計基準委員会)

(1)概要

投資信託の時価の算定および注記に関する取扱い並びに貸借対照表に持分相当額を純額で計上する組合等への出資の時価の注記に関する取扱いが定められました。

(2)適用予定日

2023年9月期の期首から適用します。

(3)当該会計基準等の適用による影響

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」の適用による連結財務諸表に与える影響は評価中であります。

(追加情報)

(信託型従業員持株インセンティブ・プラン)

当社は、2022年2月に「信託型従業員持株インセンティブ・プラン(E-Ship)」(以下「本プラン」という。)を導入しております。

(1)取引の概要

本プランは、「人・夢・技術グループ社員持株会」(以下「持株会」という。)に加入するすべての社員を対象とするインセンティブ・プランです。本プランでは、当社が信託銀行に「人・夢・技術グループ社員持株会専用信託」(以下「従持信託」という。)を設定し、従持信託は、その設定後3年間にわたり持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を予め取得しております。その後は、従持信託から持株会に対して継続的に当社株式の売却が行われるとともに、信託終了時点で従持信託内に株式売却益相当額が累積した場合には、当該株式売却益相当額が残余財産として受益者適格要件を満たす者に分配されます。なお、当社は、従持信託が当社株式を取得するための借入に対し保証することになるため、当社株価の下落により従持信託内に株式売却損相当額が累積し、信託終了時点において従持信託内に当該株式売却損相当の借入金残債がある場合は、当社が当該残債を弁済することになります。

(2)信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額は、当連結会計年度426百万円であります。

当連結会計年度における、期末株式数は201,600株であり、期中平均株式数は99,753株であります。期末株式数および期中平均株式数は、1株当たり情報の算出上、控除する自己株式に含めております。

(3) 総額法の適用により計上された借入金の帳簿価額
 当連結会計年度423百万円であります。

(従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引)

当社は、株式会社長大において2019年8月に導入致しました社員に対して自社の株式を給付するインセンティブ・プラン「株式給付信託(J-ESOP)」(以下「ESOP信託」という。)を承継しております。

ESOP信託は、当社の株価や業績と社員の処遇の連動性をより高め、経済的な効果を株主の皆様と共有することにより、株価及び業績向上への社員の意欲や士気を高めることを目的としております。

(1) 取引の概要

ESOP信託は、一定の要件を満たした社員に対し、当社の株式を給付する仕組みです。

当社は、「株式給付規程」に基づき、社員に対して個人の貢献度等に応じたポイントを付与し、一定の条件により受給権を取得した者について、ESOP信託より当該付与ポイントに相当する当社株式を、退職後に給付いたします。社員に対し給付する株式については、ESOP信託が当社より拠出した金銭を原資に将来分も含め取得しており、信託財産として分別管理いたします。上記株式給付に係る当連結会計年度の負担見込額については、株式給付引当金として計上しております。

(2) 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により純資産の部に自己株式として計上しております。当連結会計年度における、当該自己株式の帳簿価額は215百万円であります。

当連結会計年度における、期末株式数は279,200株であり、期中平均株式数は279,676株であります。期末株式数および期中平均株式数は、1株当たり情報の算出上、控除する自己株式に含めております。

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う会計上の見積りについて)

新型コロナウイルス感染症の今後の広がり方や収束時期等は不確実性が高い事象であり、変異株の動向等、先行きは依然として不透明な状況が続くと認識しております。

当連結会計年度の当社グループの事業活動及び業績に与える影響は総じて軽微でしたが、海外事業においては、受注や業務の遅延等により業績に影響が発生している状況であり、翌連結会計年度末まで影響が一定程度継続するとの仮定に基づき、繰延税金資産の回収可能性の判断や固定資産の減損の判定などの会計上の見積りを行っております。

当社グループの事業活動及び業績に与える影響は軽微であると判断しておりますが、当該仮定は不確実性が高いため、収束が遅延し、影響が長期化した場合には、将来において財政状態及び経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(連結貸借対照表関係)

1 受取手形、完成業務未収入金及び契約資産のうち、顧客との契約から生じた債権及び契約資産の金額はそれぞれ以下のとおりであります。

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
受取手形	48百万円
完成業務未収入金	3,512
契約資産	8,323

2 非連結子会社及び関連会社に対するものは次のとおりであります。

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
投資有価証券(株式)	288百万円

3 財務制限条項

長期借入金のうち当社子会社と株式会社三菱UFJ銀行との2019年3月28日締結の実行可能期間付タームローン契約において財務制限条項が付されております。
その財務制限条項の内容は以下のとおりであります。

借入人は本契約に基づく貸付人に対する全ての債務の履行が完了するまで、以下に定める内容を財務制限条項として、遵守維持するものとする。

- (1) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の貸借対照表において、純資産の部の合計額を、2018年9月決算期の年度決算期の末日における純資産の部の合計額又は前年度決算期の末日における純資産の部の合計額のいずれか大きい方の75%以上に維持すること。
- (2) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の損益計算書において、経常損益の金額を0円以上に維持すること。

また、この契約に基づく当連結会計年度末の借入未実行残高は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
契約総額	400 百万円
借入実行残高	363
差引額	37

4 偶発債務

次の関係会社の金融機関等からの借入金に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
株式会社別府鉄輪パークマネジメント	21百万円
PT.AMCO HYDRO INDONESIA	227

(連結損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(収益認識関係) 1 顧客との契約から生じる収益を分解した情報」に記載しております。

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
給料手当	2,798百万円
賞与	939
株式給付引当金繰入額	5
退職給付費用	164
貸倒引当金繰入額	3

3 研究開発費の総額

販売費及び一般管理費に含まれる研究開発費

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
	356百万円

4 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額(は戻入額)

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
	66百万円

5 期末棚卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次の棚卸資産評価損（は戻入額）が売上原価に含まれております。

当連結会計年度 （自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）	1百万円
---	------

6 減損損失

当連結会計年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産について減損損失を計上しました。

場所	用途	種類	減損損失の金額
福岡県福岡市	-	のれん	121百万円
福岡県福岡市	-	顧客関連資産	18百万円
福岡県福岡市	事業用資産	固定資産（ソフトウェア等）	70百万円

当社グループは、原則として、管理会計上の区分を考慮し、資産のグルーピングを行っております。

これらの資産グループのうち、株式会社エフェクトを連結子会社とした際に計上したのれん及び顧客関連資産並びに同社における固定資産（ソフトウェア等）について、関連する案件の受注が遅れており、利益計画を見直した結果、当初想定していた投資額の回収が見込めないと判断したため、その全額につき減損損失を計上しております。

なお、当資産グループの回収可能価額は使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローに基づく使用価値がマイナスのため、回収可能価額をゼロとして算定しております。

7 固定資産除売却損の内容は次のとおりであります。

	当連結会計年度 （自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）
建物及び構築物	2百万円
その他	0
計	2

（連結包括利益計算書関係）

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	当連結会計年度 （自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）
その他有価証券評価差額金：	
当期発生額	29百万円
組替調整額	-
税効果調整前	29
税効果額	0
その他有価証券評価差額金	29
為替換算調整勘定：	
当期発生額	18
退職給付に係る調整額：	
当期発生額	61
組替調整額	24
税効果調整前	36
税効果額	11
退職給付に係る調整額	25
その他の包括利益合計	22

(連結株主資本等変動計算書関係)

当連結会計年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数 (株)	当連結会計年度 増加株式数 (株)	当連結会計年度 減少株式数 (株)	当連結会計年度末 株式数 (株)
発行済株式				
普通株式	9,416,000	-	-	9,416,000
合計	9,416,000	-	-	9,416,000
自己株式				
普通株式				
当社が保有する自己株式 (注)	130,381	137	-	130,518
従持信託が保有する自己株式 (注)	-	223,500	21,900	201,600
株式給付信託が保有する自己 株式(注)	280,000	-	800	279,200
合計	410,381	223,637	22,700	611,318

(注) 普通株式の自己株式の増加は、単元未満株式の買取による増加137株、「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」による当社株式取得による増加223,500株であります。減少については、「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」から人・夢・技術グループ社員持株会への当社株式譲渡等による減少21,900株、株式給付信託制度による「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」からの交付による減少800株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

当社は、2021年10月1日付で、単独株式移転により、株式会社長大の完全親会社として設立されました。配当金の支払額は、株式会社長大の定時株主総会で決議された金額であります。

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年12月21日 定時株主総会	普通株式	668	72	2021年9月30日	2021年12月22日

(注) 2021年12月21日定時株主総会の決議による配当金の総額には、信託E口が保有する株式会社長大の株式に対する配当金20百万円が含まれております。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年12月23日 定時株主総会	普通株式	612	利益剰余金	66	2022年9月30日	2022年12月26日

(注) 2022年12月23日定時株主総会の決議による配当金の総額には、「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」が保有する当社の株式に対する配当金13百万円及び「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が保有する当社の株式に対する配当金18百万円が含まれております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
現金及び預金勘定	7,521百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	108
現金及び現金同等物	7,413

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

主としてファイルサーバー、事業用什器及び木質バイオマス発電設備であります。

リース資産の減価償却の方法

「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) 4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

該当事項はありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、設備投資計画に照らして、必要な資金(主に銀行借入)を調達しております。一時的な余資は主に流動性の高い金融資産で運用し、また、短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び完成業務未収入金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、海外で事業を行うにあたり生じる外貨建の営業債権は、為替の変動リスクに晒されております。

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である業務未払金は、そのほとんどが1年以内の支払期日であります。

借入金には主に運転資金及び、新規事業に係る資金調達を目的としたものであり、返済日は最長で決算日後9ヶ月であります。このうち一部は、金利の変動リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社グループは、営業債権である受取手形及び完成業務未収入金について、当社グループの「営業企画担当部門管理規程」に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行う体制としております。

市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

当社グループは、外貨建の営業債権債務について、通貨別月別に為替変動による影響額を把握しており、必要に応じて為替予約等によるヘッジを行っております。また、投資有価証券については、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、定期的に時価や発行取引先企業の財務状況を把握し、市場や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社グループは、各社が随時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手元流動性の維持等により流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要素を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価格が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等は含まれておりません(*2参照)。

当連結会計年度(2022年9月30日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 投資有価証券	300	300	-
資産計	300	300	-
(1) 長期借入金(*3)	876	877	0
負債計	876	877	0
デリバティブ取引	-	-	-

(*1) 「現金及び預金」、「受取手形及び完成業務未収入金」、「業務未払金」及び「未払費用」については、現金であること、及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

(* 2) 市場価格のない株式等は、「(1)投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	当連結会計年度 (2022年 9月30日)
非上場株式等	1,221

(* 3) 1年以内に返済予定の長期借入金については、長期借入金に含めております。

(注 1) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
当連結会計年度 (2022年 9月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	7,521	-	-	-
受取手形及び完成業務未収入金	3,561	-	-	-
有価証券 その他有価証券のうち満期があるもの	-	-	-	-
合計	11,082	-	-	-

(注 2) 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
当連結会計年度 (2022年 9月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
長期借入金	50	469	42	37	32	244
リース債務	41	56	30	330	-	-
合計	91	526	72	367	32	244

(注) 長期借入金のうち、423百万円は「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」に係るものであり、返済期日の定めがないため、期末の借入金残高を信託期間の終了時に一括して返済するものと想定して記載しております。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

当連結会計年度 (2022年 9月30日)

区分	時価 (百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券 その他有価証券 上場株式	300	-	-	300
資産計	300	-	-	300

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品
当連結会計年度(2022年9月30日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期借入金	-	877	-	877
負債計	-	877	-	877

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

長期借入金

長期借入金の時価は、元利金の合計額と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1. その他有価証券

当連結会計年度(2022年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	247	63	184
	小計	247	63	184
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	52	57	5
	小計	52	57	5
合計		300	121	179

(注) 非上場株式等(連結貸借対照表計上額933百万円)については市場価格がないことから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 連結会計年度中に売却したその他有価証券

当連結会計年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

該当事項はありません。

3. 減損処理を行った有価証券

当連結会計年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

投資有価証券(非上場の投資有価証券)について11百万円の減損処理を行っております。

なお、非上場株式の減損処理にあたりましては、当該株式の発行会社の財政状態の悪化により実質価額が著しく下落した場合には、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。

退職一時金制度（非積立型制度ですが、退職給付信託を設定した結果、積立型制度となっているものがあります。）では、退職給付として、給与と勤務期間に基づいた一時金を支給します。

一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、当期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

当社及び一部の連結子会社は、複数事業主制度の企業年金制度（建設コンサルタンツ企業年金基金）に加入しております。自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができない制度であるため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。

2. 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
退職給付債務の期首残高	3,042百万円
勤務費用	183
利息費用	26
数理計算上の差異の発生額	8
退職給付の支払額	105
退職給付債務の期末残高	3,137

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
年金資産の期首残高	751百万円
期待運用収益	33
数理計算上の差異の発生額	69
事業主からの拠出額	-
退職給付の支払額	63
年金資産の期末残高	651

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
積立型制度の退職給付債務	2,266百万円
年金資産	651
	1,615
非積立型制度の退職給付債務	870
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,486
退職給付に係る負債	2,486
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,486

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
勤務費用	183百万円
利息費用	26
期待運用収益	33
数理計算上の差異の費用処理額	24
過去勤務費用の費用処理額	-
確定給付制度に係る退職給付費用	201

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
過去勤務費用	- 百万円
数理計算上の差異	36
合計	36

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

当連結会計年度 (2022年9月30日)	
未認識過去勤務費用	38百万円
未認識数理計算上の差異	78
合計	39

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

当連結会計年度 (2022年9月30日)	
債券	- %
株式	-
その他	100.0
合計	100.0

- (注) 1. その他の主な内訳は、投資信託受益証券であります。
2. 年金資産はすべて退職一時金制度に対して設定した退職給付信託であります。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

当連結会計年度 (2022年9月30日)	
割引率	0.80～0.90%
長期期待運用収益率	0.00%
予想昇給率	2.00%

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
退職給付に係る負債の期首残高	71百万円
退職給付費用	10
退職給付の支払額	10
制度への拠出額	-
退職給付に係る負債の期末残高	71

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

当連結会計年度 (2022年9月30日)	
積立型制度の退職給付債務	- 百万円
年金資産	-
非積立型制度の退職給付債務	71
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	71
退職給付に係る負債	71
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	71

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 当連結会計年度10百万円

4. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、当連結会計年度218百万円であります。

5. 複数事業主制度

確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の企業年金制度への要拠出額は、当連結会計年度177百万円
であります。

(1) 複数事業主制度の直近の積立状況

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
年金資産の額	93,421百万円
年金財政計算上の数理債務の額と 最低責任準備金の額との合計額	71,564
差引額	21,856
	(2022年3月31日時点)

(2) 複数事業主制度の掛金に占める当社グループの割合

当連結会計年度 4.7% (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(3) 補足説明

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高(当連結会計年度 1,502百万円)及び繰越剰余金(当連結会計年度23,359百万円)であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は期間5年の元利均等償却であり、当社グループは連結財務諸表上、当該償却に充てられる特別掛金(当連結会計年度14百万円)を費用処理しております。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
(繰延税金資産)	
賞与引当金	394 百万円
未払費用	124
貸倒引当金	16
受注損失引当金	28
退職給付に係る負債	1,022
株式給付引当金	17
投資有価証券評価損	47
税務上の繰越欠損金(注)	115
その他	142
繰延税金資産小計	1,909
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)	115
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	112
評価性引当額小計	228
繰延税金資産合計	1,681
(繰延税金負債)	
有価証券時価評価	42
その他	5
繰延税金負債合計	48
繰延税金資産(負債)の純額	1,633

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度(2022年9月30日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金 (1)	-	-	-	-	-	115	115
評価性引当額	-	-	-	-	-	115	115
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	(2) -

(1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額です。

(2) 税務上の繰越欠損金について、全額回収不可能と判断しています。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	当連結会計年度 (2022年9月30日)
法定実効税率	30.6%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6
評価性引当額の増減	3.9
住民税均等割	2.0
人材確保等促進税制による税額控除	2.8
外国税額等	0.2
子会社税率差異	1.5
その他	0.4
税効果会計適用後の法人税等の負担率	36.1

(企業結合等関係)

共通支配下の取引等

(単独株式移転による持株会社の設立)

1. 取引の概要

2020年11月24日開催の株式会社長大取締役会及び2020年12月18日開催の同社第53回定時株主総会において、単独株式移転により持株会社(完全親会社)である「人・夢・技術グループ株式会社」の設立ならびに持株会社体制へ移行することを決議し、2021年10月1日に設立いたしました。

(1) 結合当事企業の名称及び事業の内容

名称 株式会社長大
事業の内容 建設コンサルタント事業

(2) 企業結合日

2021年10月1日

(3) 企業結合の法的形式

単独株式移転による持株会社設立

(4) 結合後企業の名称

人・夢・技術グループ株式会社

(5) 企業結合の目的

株式会社長大は、グループガバナンスを一層強化しつつ、新規事業やM&Aを通じた事業軸を拡大していくなど、新たなグループ経営形態への進化が必要であると判断いたしました。

新たに設立された持株会社である人・夢・技術グループ株式会社は、グループガバナンスの強化という設立趣旨に鑑み、監査等委員会設置会社として設立し、取締役会による監督機能及び監査等委員会による監査機能の更なる強化などコーポレート・ガバナンス体制の一層の強化・充実を図ってまいります。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 2019年1月16日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基適用指針第10号 2019年1月16日)に基づき、「共通支配下の取引」として会計処理しています。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

(1) 当該資産除去債務の概要

主に当社グループ会社の発電装置の撤去及び処分費用であります。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から20年と見積り、割引率は0.435%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
期首残高	- 百万円
連結範囲の変更に伴う増加額	27百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	- 百万円
時の経過による調整額	0百万円
期末残高	27百万円

(賃貸等不動産関係)

当連結会計年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいことから、注記を省略しております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

当連結会計年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

(単位:百万円)

		報告セグメント			合計
		コンサルタント事業	サービスプロバイダ 事業	プロダクツ事業	
日本	国土交通省	11,328	-	-	11,328
	その他官公庁	13,064	70	0	13,134
	その他民間	9,818	395	487	10,701
海外		2,235	201	1	2,438
顧客との契約から生じる収益		36,446	666	488	37,602
その他の収益		-	2	-	2
外部顧客への売上高		36,446	668	488	37,604

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「第5 経理の状況 1連結財務諸表等(1)連結財務諸表 注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)4.会計方針に関する事項(5)重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりです。

また、履行義務への配分額の算定については、約束した財又はサービスを顧客に移転するのと交換に権利を得ると見込んでいる対価の金額を描写する金額で取引価格をそれぞれの履行義務へ配分しております。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 顧客との契約から生じた債権、契約資産の残高等

(単位:百万円)

	当連結会計年度	
	期首残高	期末残高
顧客との契約から生じた債権	6,029	3,561
契約資産	3,628	8,323
契約負債	3,202	2,688

契約資産は、工事の進捗に応じて認識する収益の対価に関する権利のうち、未請求のものであり、対価に対する権利が請求可能になった時点で顧客との契約から生じた債権に振り替えております。

契約負債は、顧客からの前受金であり、工事の進捗に応じ収益を認識するにつれて取り崩しております。

なお、連結貸借対照表上、契約負債は「未成業務受入金」に含めております。

また、当連結会計年度において認識された収益のうち、当期首時点で契約負債に含まれていた金額は2,020百万円であり、当連結会計年度の契約資産及び契約負債の残高の重要な変動はありません。過去の期間に充足した履行義務から当連結会計年度に認識した収益については、683百万円であります。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当連結会計年度末において残存履行義務に配分した取引価格の総額は、24,749百万円であります。当該残存履行義務は、概ね2年以内に収益として認識すると見込んでおります。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、取締役会が、業績を評価するために使用する構成単位である事業本部、部門、子会社を基礎としたサービス内容により区分しております。

すなわち、「コンサルタント事業」、「サービスプロバイダ事業」及び「プロダクツ事業」の3つを報告セグメントとしております。各セグメントの主要業務は以下のとおりとしております。

区分	主要業務
コンサルタント事業	橋梁・特殊構造物等に関わる調査・計画・設計・施工管理、各種構造解析・実験、CM業務、土木構造物・施設に関わるデザイン、道路・総合交通計画・道路整備計画・路線計画・都市・地域計画に関わる調査・計画・設計・運用管理、各種公共施設のデータ管理等情報サービス全般、IT Sに関わる調査・計画・設計・運用管理、港湾、河川防災に関わる調査・計画・設計・運用管理、情報処理に関わるコンサルティング・システム化計画・設計・ソフトウェア開発・コンテンツ開発・運営・配信サービス、PFIに関わる事業化調査・アドバイザリー、環境に関わる調査・計画・設計・運用管理、建築に関わるコンサルティング・計画・設計、土質・地質調査、基礎構造および施工法に関する研究・開発、地盤災害に関する防災工事ならびに土木工事の設計施工、鉄道に関わる調査・分析・企画・計画・設計・施工監理、再生可能エネルギーに関する調査・計画・設計・施工監理・EPC・マネジメント・資金調達コンサルティング・O&Mコンサルティング・アセットマネジメント
サービスプロバイダ事業	道路運営、公共施設の運営、PPP、デマンド交通システム、健康サポート、再生可能エネルギー事業、ファイナンス事業
プロダクツ事業	エコ商品販売、レンタル、情報システムの販売・ASP

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「第5 経理の状況 1連結財務諸表等(1)連結財務諸表注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)」における記載と概ね同一であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

なお、資産及び負債については、報告セグメントに配分しておりません。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

当連結会計年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

(単位:百万円)

	報告セグメント				調整額 (注1)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	コンサル タント事業	サービ スプロ バイダ 事業	プロダク ツ事 業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	36,446	668	488	37,604	-	37,604
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	83	-	83	83	-
計	36,446	752	488	37,687	83	37,604
セグメント利益	11,333	35	70	11,439	9	11,430

(注) 1. セグメント利益の調整額 9百万円には、棚卸資産の調整額 9百万円が含まれております。

2. セグメント利益は、連結財務諸表の売上総利益と調整を行っております。

3. 資産は報告セグメントに配分していないため記載しておりません。

【関連情報】

当連結会計年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

1．製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の90%を超えるため、記載を省略しております。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3．主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関係するセグメント名
国土交通省	11,328	コンサルタント事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当連結会計年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

(単位：百万円)

	報告セグメント				調整額	連結財務諸表 計上額
	コンサル タント事業	サービス プロバイダ 事業	プロダク ツ事業	計		
減損損失	70	-	-	70	-	70

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当連結会計年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

のれんについては、報告セグメントに配分しておりません。

また、報告セグメントに配分されていないのれんの償却額は34百万円であります。

なお、当連結会計年度において当該のれんを全額減損処理したため、未償却残高はございません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

当連結会計年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

当連結会計年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）
記載すべき重要な取引はありません。

（1株当たり情報）

項目	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
1株当たり純資産額(円)	2,242.31
1株当たり当期純利益金額(円)	261.95

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当連結会計年度末 (2022年9月30日)
純資産の部の合計額(百万円)	19,839
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	96
(うち非支配株主持分(百万円))	(96)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	19,742
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(株)	8,804,682

3. 1株当たり純資産の算定に用いられた期末の普通株式数については、「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」が所有する自己株式(当連結会計年度201,600株)および「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が所有する自己株式が所有する自己株式(当連結会計年度279,200株)を控除し算定しております。

4. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当連結会計年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
親会社株主に帰属する当期純利益金額(百万円)	2,333
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益金額(百万円)	2,333
期中平均株式数(株)	8,906,124

5. 期中平均株式数については、「野村信託銀行(株)(人・夢・技術グループ社員持株会専用信託口)」が所有する自己株式(当連結会計年度99,753株)および「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が所有する自己株式が所有する自己株式(当連結会計年度279,676株)を控除し算定しております。

6. 「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(会計方針の変更)」に記載のとおり、「収益認識に関する会計基準」等を適用しております。この結果、当連結会計年度の1株当たり純資産額は144.31円、1株当たり当期純利益は140.18円それぞれ増加しております。

(重要な後発事象)

(取得による企業結合)

当社は2022年8月25日開催の取締役会において、株式会社ピーシーレールウェイコンサルタント(以下「PCRW」という。)の株式譲渡契約を締結することを決議し、2022年10月4日付で全株式を取得し、連結子会社といたしました。

(1) 企業結合の概要

被取得企業の概要

被取得企業の名称 株式会社ピーシーレールウェイコンサルタント

事業の内容 建設コンサルタント事業

企業結合を行った主な理由

PCRWは、栃木県に本社を構え創業30年超を誇る建設コンサルタントです。ゼネコンやメーカー出身の幹部技術者を多く抱え、調査・計画にとどまらず、詳細設計を強みとしております。国内では道路橋や鉄道橋を中心に、グローバル市場でも鉄道橋などの設計に従事した実績を有するなど、実務に長けた希少価値の高い中堅規模の建設コンサルタントです。

これまででは、PC構造物の設計を強みとしながら、鋼構造物のほか、道路、河川、上下水道、そして鉄道分野と多岐にわたる事業を展開してはきましたが、近年では、海外展開を視野に、インフラ需要旺盛なアジア圏の留学生を積極的に採用し、グローバルな舞台で活躍できる人材を育成しております。現在も確固たる教育・指導体制を持ち、若手技術者を育てながら、成長を続けており、今後も高い成長が期待される建設コンサルタントです。

以上の背景から、当社はPCRWとの間で、双方の人材、技術、顧客基盤等の様々な経営資源を相互に活用し、事業領域及び顧客基盤の拡大、生産性の向上等の分野で互いの課題に取組み、事業を成長させていく認識で一致し、同社の株式を取得し連結子会社化することを決定しました。

企業結合日

2022年10月4日

企業結合の法的形式

現金及び第三者割当による自己株式を対価とする株式取得

企業結合後の企業の名称

変更はありません。

取得する議決権比率

100%

取得企業を決定するに至った根拠

当社が現金及び第三者割当による自己株式を対価とする株式取得により、被取得企業の議決権の100%を取得したことによるものです。

(2) 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価 現金 1,934百万円

自己株式 268百万円

取得原価 2,202百万円

(3) 主要な取得関連費用の内容及び金額

現時点では確定していません。

(4) 発生するのれんの金額、発生原因、償却の方法及び償却期間

現時点では確定していません。

(5) 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

現時点では確定していません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定の長期借入金	50	50	0.7	-
1年以内に返済予定のリース債務	36	41	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	453	826	0.5	2023年～2030年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	74	417	-	2023年～2026年
合計	614	1,335	-	-

- (注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。
2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。
3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	469	226	226	226
リース債務	56	30	330	-

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債および純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期 連結累計期間 自2021年10月1日 至2021年12月31日	第2四半期 連結累計期間 自2021年10月1日 至2022年3月31日	第3四半期 連結累計期間 自2021年10月1日 至2022年6月30日	第1期 連結会計年度 自2021年10月1日 至2022年9月30日
売上高(百万円)	7,383	20,234	27,696	37,604
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(百万円)	481	3,893	3,917	3,667
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益金額(百万 円)	274	2,591	2,568	2,333
1株当たり四半期(当期)純 利益金額(円)	30.51	288.19	287.39	261.95

(会計期間)	第1四半期 連結会計期間 自2021年10月1日 至2021年12月31日	第2四半期 連結会計期間 自2022年1月1日 至2022年3月31日	第3四半期 連結会計期間 自2022年4月1日 至2022年6月30日	第4四半期 連結会計期間 自2022年7月1日 至2022年9月30日
1株当たり四半期純利益金額 又は1株当たり四半期純損失 金額() (円)	30.51	257.94	2.53	26.78

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

当事業年度
(2022年9月30日)

資産の部	
流動資産	
現金及び預金	2,193
売掛金	228
未収還付法人税等	499
その他	259
貸倒引当金	40
流動資産合計	3,141
固定資産	
有形固定資産	
建物	267
減価償却累計額	9
建物(純額)	257
構築物	0
構築物(純額)	0
工具、器具及び備品	2
減価償却累計額	0
工具、器具及び備品(純額)	2
土地	1,354
有形固定資産合計	1,614
無形固定資産	
ソフトウェア	53
その他	30
無形固定資産合計	84
投資その他の資産	
投資有価証券	953
関係会社株式	8,055
関係会社長期貸付金	697
その他	0
投資その他の資産合計	9,706
固定資産合計	11,406
資産合計	14,547

(単位：百万円)

当事業年度
(2022年9月30日)

負債の部	
流動負債	
買掛金	37
未払金	141
未払法人税等	72
役員賞与引当金	19
その他	67
流動負債合計	338
固定負債	
長期借入金	423
関係会社事業損失引当金	26
繰延税金負債	42
その他	41
固定負債合計	534
負債合計	873
純資産の部	
株主資本	
資本金	3,107
資本剰余金	
資本準備金	4,864
その他資本剰余金	5,712
資本剰余金合計	10,577
利益剰余金	
その他利益剰余金	
繰越利益剰余金	775
利益剰余金合計	775
自己株式	922
株主資本合計	13,537
評価・換算差額等	
その他有価証券評価差額金	136
評価・換算差額等合計	136
純資産合計	13,674
負債純資産合計	14,547

【損益計算書】

(単位：百万円)

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
営業収益	2,152
営業費用	1,298
営業利益	1,165
営業外収益	
受取利息	0
受取配当金	5
受取保証料	5
雑収入	1
営業外収益合計	13
営業外費用	
匿名組合投資損失	18
貸倒引当金繰入額	40
関係会社事業損失引当金繰入額	26
雑損失	0
営業外費用合計	84
経常利益	1,095
特別損失	
投資有価証券評価損	2
関係会社株式評価損	269
現物配当に伴う交換損失	45
特別損失合計	317
税引前当期純利益	777
法人税、住民税及び事業税	2
法人税等合計	2
当期純利益	775

【株主資本等変動計算書】

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

（単位：百万円）

	株主資本					
	資本金	資本剰余金			利益剰余金	
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	-	-	-	-	-	-
当期変動額						
株式移転による増減	3,107	4,864	5,712	10,577		-
現物配当				-		-
当期純利益				-	775	775
自己株式の取得				-		-
自己株式の処分				-		-
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）				-		-
当期変動額合計	3,107	4,864	5,712	10,577	775	775
当期末残高	3,107	4,864	5,712	10,577	775	775

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評 価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	-	-	-	-	-
当期変動額					
株式移転による増減	216	13,468		-	13,468
現物配当	279	279		-	279
当期純利益		775		-	775
自己株式の取得	473	473		-	473
自己株式の処分	46	46		-	46
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）		-	136	136	136
当期変動額合計	922	13,537	136	136	13,674
当期末残高	922	13,537	136	136	13,674

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

- (1) 子会社株式及び関連会社株式
移動平均法による原価法によっております。
- (2) その他有価証券
市場価格のない株式等以外のもの
時価法
(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。)
市場価格のない株式等
主として移動平均法による原価法
なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書等を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法により算定しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

- (1) 有形固定資産(リース資産を除く)
主として定額法を採用しております。
なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。
建物(付属設備を除く) 9年~43年
工具、器具及び備品 4年~20年
- (2) 無形固定資産(リース資産を除く)
ソフトウェア
社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。
その他
定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

- (1) 貸倒引当金
債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。
- (2) 役員賞与引当金
役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。
- (3) 関係会社事業損失引当金
関係会社の事業の損失に備えるために、関係会社に対する投資額を超えて当社が負担することとなる損失見込額を計上しております。

4. 収益及び費用の計上基準

当社の収益は、子会社からの経営管理手数料並びに子会社及び関連会社からの受取配当金であります。
経営管理手数料については、子会社への指導・助言等を行うことを履行義務として識別し、当該履行義務は時の経過につれて充足されるため、一定の期間にわたる履行義務を充足した時点で収益を認識しております。
受取配当金については、配当金の効力発生日をもって認識しております。

5. その他財務諸表作成のための基礎となる事項

控除対象外消費税等の会計処理
控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理しております。

(追加情報)

(信託型従業員持株インセンティブ・プラン)

当社は、2022年2月に当社グループ社員(以下「社員」という。)に対して中長期的な企業価値向上のインセンティブを付与すると同時に、福利厚生増進策として、持株会の拡充を通じて社員の株式取得及び保有を促進することにより社員の財産形成を支援することを目的として「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」を導入しております。

なお、詳細につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(追加情報)」に記載のとおりです。

(従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引)

当社は、株式会社長大において2019年8月に導入致しました社員に対して自社の株式を給付するインセンティブ・プラン「株式給付信託(J-ESOP)」(以下「ESOP信託」という。)を承継しております。

ESOP信託は、当社の株価や業績と社員の処遇の連動性をより高め、経済的な効果を株主の皆様と共有することにより、株価及び業績向上への社員の意欲や士気を高めることを目的としております。

(1) 取引の概要

ESOP信託は、一定の要件を満たした社員に対し、当社の株式を給付する仕組みです。

当社は、「株式給付規程」に基づき、社員に対して個人の貢献度等に応じたポイントを付与し、一定の条件により受給権を取得した者について、ESOP信託より当該付与ポイントに相当する当社株式を、退職後に給付いたします。社員に対し給付する株式については、ESOP信託が当社より拠出した金銭を原資に将来分も含め取得しており、信託財産として分別管理いたします。上記株式給付に係る負担見込額については、各グループ会社において株式給付引当金として計上しております。

(2) 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を信託における帳簿価額（付随費用の金額を除く。）により純資産の部に自己株式として計上しております。当事業年度における、当該自己株式の帳簿価額は215百万円であります。

当事業年度における、期末株式数は279,200株であり、期中平均株式数は279,676株であります。期末株式数および期中平均株式数は、1株当たり情報の算出上、控除する自己株式に含めております。

(損益計算書関係)

1 営業費用のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

なお、全額が一般管理費に属するものであります。

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
役員報酬	137百万円
減価償却費	32
グループ関連費用	446

2 各科目に含まれている関係会社との取引に係る金額は次のとおりであります。

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
関係会社に対する営業収益	
経営指導料	694百万円
配当収入	1,300
その他営業収益	158
関係会社に対する営業費用	
グループ関連費用	446
関係会社に対する営業外費用	
貸倒引当金繰入額	40
関係会社事業損失引当金繰入額	26

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	当事業年度 (2022年9月30日)
子会社株式	8,051
関連会社株式	4
合計	8,055

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	当事業年度 (2022年9月30日)
(繰延税金資産)	
賞与引当金	6 百万円
貸倒引当金	12
関係会社株式評価損	101
投資有価証券評価損	38
繰越欠損金	14
その他	43
繰延税金資産小計	217
評価性引当額	217
繰延税金資産合計	-
(繰延税金負債)	
繰延税金負債合計	42
繰延税金負債の純額	42

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	当事業年度 (2022年9月30日)
法定実効税率	30.6 %
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.1
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	51.4
評価性引当額の増減	20.7
その他	0.4
税効果会計適用後の法人税等の負担率	0.4

(企業結合等関係)

「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(企業結合等関係)」をご参照ください。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「第5 経理の状況 2 財務諸表等 (1) 財務諸表 注記事項(重要な会計方針) 4. 収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

(重要な後発事象)

「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(重要な後発事象)」をご参照ください。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	-	267	-	267	9	9	257
構築物	-	0	-	0	-	-	0
工具、器具及び備品	-	2	0	2	0	0	2
土地	-	1,354	-	1,354	-	-	1,354
有形固定資産計	-	1,624	0	1,624	9	9	1,614
無形固定資産							
ソフトウェア	-	77	-	77	23	23	53
その他	-	30	-	30	-	-	30
無形固定資産計	-	107	-	107	23	23	84

(注) 当期増加額のうち主なものは以下のとおりであります。

 建物 現物配当による増加(本社) 263 百万円

 土地 現物配当による増加(本社) 1,354 百万円

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	-	40	-	-	40
役員賞与引当金	-	19	-	-	19
関係会社事業損失引当金	-	26	-	-	26

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため記載を省略しております。

(3)【その他】

株式移転により当社完全子会社となった株式会社長大の最近2事業年度に係る財務諸表は、次のとおりであります。

(株式会社長大)

連結財務諸表

連結貸借対照表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
資産の部	
流動資産	
現金及び預金	10,256
受取手形及び完成業務未収入金	6,029
未成業務支出金	2 6,368
原材料及び貯蔵品	57
その他	443
貸倒引当金	47
流動資産合計	23,108
固定資産	
有形固定資産	
建物及び構築物	3,409
減価償却累計額	2,114
建物及び構築物(純額)	1,295
機械装置及び運搬具	681
減価償却累計額	431
機械装置及び運搬具(純額)	249
土地	2,026
リース資産	164
減価償却累計額	64
リース資産(純額)	100
その他	723
減価償却累計額	616
その他(純額)	106
有形固定資産合計	3,777
無形固定資産	
のれん	156
その他	319
無形固定資産合計	475
投資その他の資産	
投資有価証券	1 1,144
長期貸付金	759
破産更生債権等	91
差入保証金	592
保険積立金	651
繰延税金資産	1,757
その他	501
貸倒引当金	91
投資その他の資産合計	5,407
固定資産合計	9,660
資産合計	32,769

(単位：百万円)

前連結会計年度
 (2021年9月30日)

負債の部	
流動負債	
業務未払金	1,787
1年内返済予定の長期借入金	50
リース債務	36
未払法人税等	1,000
未払消費税等	533
未払費用	1,444
未成業務受入金	4,687
賞与引当金	1,097
役員賞与引当金	23
受注損失引当金	2 216
損害補償損失引当金	259
その他	389
流動負債合計	11,526
固定負債	
長期借入金	3 453
リース債務	74
繰延税金負債	3
株式給付引当金	41
退職給付に係る負債	2,362
その他	143
固定負債合計	3,078
負債合計	14,605
純資産の部	
株主資本	
資本金	3,107
資本剰余金	5,031
利益剰余金	10,080
自己株式	257
株主資本合計	17,961
その他の包括利益累計額	
その他の有価証券評価差額金	105
為替換算調整勘定	15
退職給付に係る調整累計額	2
その他の包括利益累計額合計	119
非支配株主持分	82
純資産合計	18,163
負債純資産合計	32,769

連結損益計算書及び連結包括利益計算書
連結損益計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	
売上高		34,541
売上原価	3, 4	23,435
売上総利益		11,105
販売費及び一般管理費	1, 2	7,267
営業利益		3,838
営業外収益		
受取利息		5
受取配当金		9
受取保険金		31
受取家賃		14
補助金収入		94
為替差益		62
雑収入		42
営業外収益合計		260
営業外費用		
支払利息		23
和解金		9
事故関連費用		28
雑損失		12
営業外費用合計		73
経常利益		4,024
特別損失		
固定資産除売却損	5	2
投資有価証券評価損		55
損害補償損失引当金繰入額		259
特別損失合計		317
税金等調整前当期純利益		3,707
法人税、住民税及び事業税		1,535
法人税等調整額		235
法人税等合計		1,300
当期純利益		2,406
非支配株主に帰属する当期純利益		0
親会社株主に帰属する当期純利益		2,406

連結包括利益計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
当期純利益	2,406
その他の包括利益	
その他有価証券評価差額金	49
為替換算調整勘定	12
退職給付に係る調整額	5
その他の包括利益合計	1 68
包括利益	2,475
(内訳)	
親会社株主に係る包括利益	2,472
非支配株主に係る包括利益	3

連結株主資本等変動計算書

前連結会計年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,107	5,012	8,211	320	16,011
当期変動額					
剰余金の配当			537		537
親会社株主に帰属する当期純利益			2,406		2,406
自己株式の取得				0	0
自己株式の処分		18		63	82
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	18	1,868	63	1,950
当期末残高	3,107	5,031	10,080	257	17,961

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	55	4	7	52	81	16,145
当期変動額						
剰余金の配当				-		537
親会社株主に帰属する当期純利益				-		2,406
自己株式の取得				-		0
自己株式の処分				-		82
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	49	10	5	66	1	67
当期変動額合計	49	10	5	66	1	2,018
当期末残高	105	15	2	119	82	18,163

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

前連結会計年度
 (自 2020年10月1日
 至 2021年9月30日)

営業活動によるキャッシュ・フロー

税金等調整前当期純利益	3,707
減価償却費	337
のれん償却額	17
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	156
貸倒引当金の増減額(は減少)	108
賞与引当金の増減額(は減少)	74
役員賞与引当金の増減額(は減少)	0
株式給付引当金の増減額(は減少)	41
受注損失引当金の増減額(は減少)	1
損害補償損失引当金の増減額(は減少)	259
受取利息及び受取配当金	14
支払利息	23
投資有価証券評価損益(は益)	55
その他の損益(は益)	58
受取手形及び完成業務未収入金の増減額(は増加)	1,127
未成業務支出金の増減額(は増加)	33
貯蔵品の増減額(は増加)	37
その他の資産の増減額(は増加)	175
業務未払金の増減額(は減少)	157
未成業務受入金の増減額(は減少)	860
未払消費税等の増減額(は減少)	350
未払費用の増減額(は減少)	211
その他の負債の増減額(は減少)	164
小計	5,077
利息及び配当金の受取額	14
利息の支払額	23
法人税等の支払額	1,239
法人税等の還付額	2
営業活動によるキャッシュ・フロー	3,832

(単位：百万円)

前連結会計年度
(自 2020年10月1日
至 2021年9月30日)

投資活動によるキャッシュ・フロー	
定期預金の預入による支出	0
定期預金の払戻による収入	10
有形固定資産の取得による支出	187
投資有価証券の取得による支出	504
貸付けによる支出	939
差入保証金の差入による支出	48
差入保証金の回収による収入	27
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	169
その他の支出	106
その他の収入	329
投資活動によるキャッシュ・フロー	1,589
財務活動によるキャッシュ・フロー	
短期借入れによる収入	3,305
短期借入金の返済による支出	3,305
長期借入れによる収入	221
長期借入金の返済による支出	103
配当金支払による支出	537
自己株式の取得による支出	0
自己株式の処分による収入	59
その他の支出	42
財務活動によるキャッシュ・フロー	403
現金及び現金同等物に係る換算差額	34
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	1,873
現金及び現金同等物の期首残高	8,277
現金及び現金同等物の期末残高	1 10,151

注記事項

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 7社

連結子会社の名称

基礎地盤コンサルタンツ株式会社

株式会社長大テック

順風路株式会社

株式会社エフェクト

KISO-JIBAN Singapore Pte Ltd.

KISO-JIBAN (MALAYSIA) SDN.BHD.

CHODAI KOREA CO., LTD.

前連結会計年度において新たに株式を取得したことにより、株式会社エフェクトを連結の範囲に含めております。

(2) 非連結子会社の数 7社

非連結子会社の名称

CHODAI & KISO-JIBAN VIETNAM CO., LTD.

PT.WIRATMAN CHODAI INDONESIA

株式会社南部町バイオマスエナジー

Chodai Philippines Corporation

株式会社長大キャピタル・マネジメント

台湾長大顧問有限公司

C.N.バリューマネジメント株式会社

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等はいずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結範囲には含めておりません。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社及び関連会社数

持分法を適用している非連結子会社及び関連会社はありません。

(2) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社の名称

非連結子会社の名称

CHODAI & KISO-JIBAN VIETNAM CO., LTD.

PT.WIRATMAN CHODAI INDONESIA

株式会社南部町バイオマスエナジー

Chodai Philippines Corporation

株式会社長大キャピタル・マネジメント

台湾長大顧問有限公司

C.N.バリューマネジメント株式会社

関連会社の名称

日本インフラストラクチャーマネジメント株式会社

PT.AMCO HYDRO INDONESIA

株式会社別府鉄輪パークマネジメント

他5社

(持分法を適用しない理由)

非連結子会社7社及び関連会社8社がありますが、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、在外子会社であるKISO-JIBAN Singapore Pte Ltd.、KISO-JIBAN (MALAYSIA) SDN.BHD.及びCHODAI KOREA CO., LTD.の決算日は6月30日であります。

連結財務諸表の作成に当たっては、KISO-JIBAN Singapore Pte Ltd.、KISO-JIBAN (MALAYSIA) SDN.BHD.及びCHODAI KOREA CO., LTD.については6月30日現在で実施した決算に基づく財務諸表を使用しております。

ただし、7月1日から連結決算日9月30日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

上記以外の連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と同一であります。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

連結決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）によっております。

時価のないもの

移動平均法による原価法によっております。

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書等を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

たな卸資産

未成業務支出金

個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）によっております。

原材料及び貯蔵品

先入先出法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

主として定率法（ただし、2005年10月1日以降に取得した建物（建物付属設備を除く）及び2016年4月1日以降に取得した建物付属設備及び構築物については、定額法）を採用しております。在外子会社については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 3年～50年

機械装置及び運搬具 2年～14年

無形固定資産

ソフトウェア

社内における利用可能期間（3～5年）に基づく定額法を採用しております。

のれん

5年間の定額法により償却を行っております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額の前連結会計年度負担額を計上しております。

役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

受注損失引当金

受注業務の損失発生に備えるため、前連結会計年度末の未引渡業務のうち、損失発生の可能性が高く、かつ、その金額を合理的に見積ることが可能な業務について、損失見込額を計上しております。

株式給付引当金

株式給付規程に基づく従業員の当社株式の給付に備えるため、前連結会計年度末における株式給付債務の見込額に基づき株式給付引当金を計上しております。

損害補償損失引当金

将来の損害補償損失に備えるため、前連結会計年度末において発生の可能性が高く、かつ、損失の金額を合理的に見積ることが可能なものについて、その損失見込額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を前連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。また、当社は退職給付信託を設定しております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を発生翌連結会計年度から費用処理しております。

小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

売上高及び売上原価の計上基準

連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる業務
工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。
その他の業務
完成基準を適用しております。

(6) 重要な外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社等の資産及び負債は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めて計上しております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、前連結会計年度の費用として処理しております。

(重要な会計上の見積り)

(受注損失引当金)

- (1) 前連結会計年度の連結財務諸表上に計上した金額
受注損失引当金 216百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

受注契約に係る将来の損失に備えるため、前連結会計年度末手持業務のうち、損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積ることができる業務について損失見込額を計上しております。損失見込額は業務収益総額から業務原価総額を差し引いて算出しております。

主要な仮定

損失見込額は、業務原価総額の見積りに大きく依存しており、業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は変動することがあるため、業務の進捗状況、過去の業務実績等を踏まえて、これらを適時・適切に見積もっています。

翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は、不確実性が高く、業務内容の変更や追加業務の発生等により見直しが必要となった場合、翌連結会計年度の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(工事進行基準による収益認識)

- (1) 前連結会計年度の連結財務諸表上に計上した金額
工事進行基準による売上高 2,367百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

一定の要件を満たす特定の請負業務において、前連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる業務については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。完成業務高の算出は、業務原価総額を基礎とし期末までの実施発生原価額に応じた業務の進捗度に、業務収益総額を乗じて完成業務高を算出しております。

主要な仮定

工事進行基準は、業務原価総額の見積りに大きく依存しており、業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は変動することがあるため、業務の進捗状況、過去の業務実績等を踏まえて、これらを適時・適切に見積もっています。

翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は、不確実性が高く、業務内容の変更や追加業務の発生等により見直しが必要となった場合、翌連結会計年度の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(会計方針の変更)

該当事項はありません。

(会計上の見積りの変更)
該当事項はありません。

(追加情報)

(信託型従業員持株インセンティブ・プラン)

当社は、2018年4月に「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」(以下、「本プラン」といいます。)
を導入しております。なお、本取引は2021年7月をもって終了しております。

(1)取引の概要

本プランは、「長大グループ社員持株会」(以下「持株会」といいます。)
に加入するすべての社員を対象とするインセンティブ・プランです。本プランでは、当社が信託銀行に「長大グループ社員持株会専用信託」
(以下、「従持信託」といいます。)
を設定し、従持信託は、その設定後5年間にわたり持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を予め取得しております。その後は、従持信託から持株会に対して継続的に当社株式の売却が行われるとともに、信託終了時点で従持信託内に株式売却益相当額が累積した場合には、当該株式売却益相当額が残余財産として受益者適格要件を満たす者に分配されます。なお、当社は、従持信託が当社株式を取得するための借入に対し保証を行っており、当社株価の下落により従持信託内に株式売却損相当額が累積し、信託終了時点において従持信託内に当該株式売却損相当の借入金残債がある場合は、保証契約に基づき、当社が当該残債を弁済することとなります。

(2)信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)
により純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額は、前連結会計年度においては該当事項はありません。

期末株式数は、前連結会計年度0株であり、期中平均株式数は、前連結会計年度29,107株であります。期末株式数および期中平均株式数は、1株当たり情報の算出上、控除する自己株式に含めております。

(3)総額法の適用により計上された借入金の帳簿価額

前連結会計年度においては該当事項はありません。

(従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引)

当社は、2019年8月に社員に対して自社の株式を給付するインセンティブ・プラン「株式給付信託(J-ESOP)」(以下、「ESOP信託」といいます。)
を導入いたしました。

ESOP信託は、当社の株価や業績と当社の社員の処遇の連動性をより高め、経済的な効果を株主の皆様と共有することにより、株価及び業績向上への社員の意欲や士気を高めることを目的としております。

(1)取引の概要

ESOP信託は、一定の要件を満たした当社社員に対し、当社の株式を給付する仕組みです。

当社は、「株式給付規程」に基づき、社員に対して個人の貢献度等に応じたポイントを付与し、一定の条件により受給権を取得した者について、ESOP信託より当該付与ポイントに相当する当社株式を、退職後に給付します。社員に対し給付する株式については、ESOP信託が当社より拠出した金銭を原資に将来分も含め取得しており、信託財産として分別管理します。

(2)信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)
により純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額は、前連結会計年度216百万円であります。

期末株式数は前連結会計年度280,000株であり、期中平均株式数は前連結会計年度280,000株であります。期末株式数および期中平均株式数は、1株当たり情報の算出上、控除する自己株式に含めております。

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う会計上の見積りについて)

新型コロナウイルス感染症の今後の広がり方や収束時期等是不確実性が高い事象であり、変異株の動向等、先行きは依然として不透明な状況が続くと認識しております。

前連結会計年度の当社グループの事業活動及び業績に与える影響は総じて軽微でしたが、海外事業においては、受注や業務の遅延等により業績に影響が発生している状況であり、当連結会計年度においても影響が一定程度継続するとの仮定に基づき、繰延税金資産の回収可能性の判断や固定資産の減損の判定などの会計上の見積りを行っております。

当社グループの事業活動及び業績に与える影響は軽微であると判断しておりますが、当該仮定は不確実性が高いため、収束が遅延し、影響が長期化した場合には、将来において財政状態及び経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社及び関連会社に対するものは次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
投資有価証券(株式)	424百万円

2 受注損失引当金

損失が見込まれる工事契約に係るたな卸資産と受注損失引当金は、相殺せずに両建てで表示しております。損失が見込まれる工事契約に係るたな卸資産のうち、受注損失引当金に対応する額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
未成業務支出金	95百万円

3 財務制限条項

長期借入金のうち当社及び連結子会社の株式会社三菱UFJ銀行との2019年3月28日締結の実行可能期間付タームローン契約において財務制限条項が付されております。

その財務制限条項の内容は以下のとおりであります。

借入人は本契約に基づく貸付人に対する全ての債務の履行が完了するまで、以下に定める内容を財務制限条項として、遵守維持するものとする。

- (1) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の貸借対照表において、純資産の部の合計額を、2018年9月決算期の年度決算期の末日における純資産の部の合計額又は前年度決算期の末日における純資産の部の合計額のいずれか大きい方の75%以上に維持すること。
- (2) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の損益計算書において、経常損益の金額を0円以上に維持すること。

また、この契約に基づく当連結会計年度末の借入未実行残高は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
契約総額	400 百万円
借入実行総額	396
借入未実行残高	4

4 偶発債務

次の関係会社の金融機関等からの借入金に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
株式会社別府鉄輪パークマネジメント	25百万円

(連結損益計算書関係)

1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
給料手当	2,591百万円
賞与	845
株式給付引当金繰入額	13
退職給付費用	174
貸倒引当金繰入額	108

2 研究開発費の総額

販売費及び一般管理費に含まれる研究開発費

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
	281百万円

3 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額 (は戻入額)

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
	16百万円

4 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次のたな卸資産評価損 (は戻入額) が売上原価に含まれております。

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
	38百万円

5 固定資産除売却損の内容は次のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	
建物及び構築物	0百万円
機械装置及び運搬具	1
その他	0
計	2

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	
その他有価証券評価差額金：	
当期発生額	64百万円
組替調整額	-
税効果調整前	64
税効果額	14
その他有価証券評価差額金	49
為替換算調整勘定：	
当期発生額	12
退職給付に係る調整額：	
当期発生額	18
組替調整額	26
税効果調整前	8
税効果額	2
退職給付に係る調整額	5
その他の包括利益合計	68

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数 (株)	当連結会計年度 増加株式数 (株)	当連結会計年度 減少株式数 (株)	当連結会計年度末 株式数 (株)
発行済株式				
普通株式	9,416,000	-	-	9,416,000
合計	9,416,000	-	-	9,416,000
自己株式				
普通株式				
当社が保有する自己株式	143,405	76	13,100	130,381
従持信託が保有する自己株式 (注)	78,000	-	78,000	-
株式給付信託が保有する自己 株式	280,000	-	-	280,000
合計	501,405	76	91,100	410,381

(注) 1. 自己株式の数の増加については、単元未満株式の買取りによる増加76株であります。

2. 自己株式の数の減少については、第三者割当による自己株式の処分13,100株および「野村信託銀行(株)(長大グループ社員持株会専用信託口)」から長大グループ社員持株会への当社株式譲渡等による減少78,000株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2020年12月18日 定時株主総会	普通株式	537	58	2020年9月30日	2020年12月21日

(注) 2020年12月18日定時株主総会の決議による配当金の総額には、信託E口が保有する当社株式に対する配当金16百万円及び長大グループ社員持株会信託口が保有する当社株式に対する配当金4百万円が含まれております。

(2) 基準日が前連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年12月21日 定時株主総会	普通株式	668	利益剰余金	72	2021年9月30日	2021年12月22日

(注) 2021年12月21日定時株主総会の決議による配当金の総額には、信託E口が保有する当社株式に対する配当金20百万円が含まれております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
現金及び預金勘定	10,256百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	105
現金及び現金同等物	10,151

2 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

株式の取得により新たに株式会社エフェクトを連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得価格と取得のための支出(純額)との関係は次のとおりであります。

流動資産	75百万円
固定資産	166
のれん	173
流動負債	51
固定負債	134
新規連結子会社株式の取得価額	230
自己株式	23
新規連結子会社の現金及び現金同等物	37
差引: 連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	169

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

主として、コンサルタント事業における事務機器(工具、器具及び備品)であります。

リース資産の減価償却の方法

「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) 4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

該当事項はありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、設備投資計画に照らして、必要な資金（主に銀行借入）を調達しております。一時的な余資は主に流動性の高い金融資産で運用し、また、短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び完成業務未収入金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、海外で事業を行うにあたり生じる外貨建の営業債権は、為替の変動リスクに晒されております。

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である業務未払金は、そのほとんどが1年以内の支払期日であります。

借入金は主に運転資金及び、新規事業に係る資金調達を目的としたものであり、返済日は最長で決算日後8年10ヶ月であります。このうち一部は、金利の変動リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社グループは、営業債権である受取手形及び完成業務未収入金について、当社グループの「営業企画担当部門管理規程」に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行う体制としております。

市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社グループは、外貨建の営業債権債務について、通貨別月別に為替変動による影響額を把握しており、必要に応じて為替予約等によるヘッジを行っております。また、投資有価証券については、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、定期的に時価や発行取引先企業の財務状況を把握し、市場や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社グループは、各社が随時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手元流動性の維持等により流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価格のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価格が含まれております。当該価格の算定においては変動要素を織り込んでいるため、異なる前提条件等によった場合、当該価格が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2参照）。

前連結会計年度（2021年9月30日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	10,256	10,256	-
(2) 受取手形及び完成業務未収入金 貸倒引当金(*1)	6,029 17		
	6,012	6,012	-
(3) 投資有価証券	293	293	-
資産計	16,562	16,562	-
(1) 業務未払金	1,787	1,787	-
(2) 未払費用	1,444	1,444	-
(3) 長期借入金(*2)	503	503	0
負債計	3,734	3,734	0
デリバティブ取引	-	-	-

(*1) 受取手形及び完成業務未収入金に個別評価を実施している貸倒引当金を控除しております。

(*2) 1年以内に返済予定の長期借入金については、長期借入金に含めております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに投資有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び完成業務未収入金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、「(1) 連結財務諸表 注記事項(有価証券関係)」をご参照下さい。

負 債

(1) 業務未払金、(2) 未払費用

短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 長期借入金

時価は、元利金の合計額を、同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

該当事項はありません。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2021年9月30日)
非上場株式等	851

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2021年9月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	10,256	-	-	-
受取手形及び完成業務未収入金	6,029	-	-	-
有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの	-	-	-	-
合計	16,286	-	-	-

4. 有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2021年9月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
長期借入金	50	50	46	42	37	277
リース債務	36	34	33	6	0	-
合計	86	84	79	48	38	277

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2021年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	247	63	184
	小計	247	63	184
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	46	57	11
	小計	46	57	11
合計		293	121	172

(注)非上場株式(連結貸借対照表計上額426百万円)、投資事業有限責任組合への出資(連結貸借対照表計上額0百万円)については、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「**其他有価証券**」には含めておりません。

2. 連結会計年度中に売却した**其他有価証券**

前連結会計年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

該当事項はありません。

3. 減損処理を行った**有価証券**

前連結会計年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

投資有価証券(非上場の投資有価証券)について55百万円の減損処理を行っております。

なお、非上場株式の減損処理にあたりましては、当該株式の発行会社の財政状態の悪化により実質価額が著しく下落した場合には、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。

退職一時金制度(非積立型制度ですが、退職給付信託を設定した結果、積立型制度となっているものがあります。)では、退職給付として、給与と勤務期間に基づいた一時金を支給します。

一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、当期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

当社及び一部の連結子会社は、複数事業主制度の企業年金制度(建設コンサルタンツ企業年金基金)に加入しております。自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができない制度であるため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。

2. 確定給付制度(簡便法を適用した制度を除く)

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
退職給付債務の期首残高	3,025百万円
勤務費用	181
利息費用	26
数理計算上の差異の発生額	64
退職給付の支払額	255
退職給付債務の期末残高	3,042

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
年金資産の期首残高	889百万円
期待運用収益	-
数理計算上の差異の発生額	46
事業主からの拠出額	-
退職給付の支払額	183
年金資産の期末残高	751

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
積立型制度の退職給付債務	2,173百万円
年金資産	751
	1,422
非積立型制度の退職給付債務	868
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,290
退職給付に係る負債	2,290
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,290

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
勤務費用	181百万円
利息費用	26
期待運用収益	-
数理計算上の差異の費用処理額	26
過去勤務費用の費用処理額	-
確定給付制度に係る退職給付費用	234

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
過去勤務費用	-百万円
数理計算上の差異	8
合計	8

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
未認識過去勤務費用	38百万円
未認識数理計算上の差異	41
合計	2

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
債券	- %
株式	-
その他	100.0
合計	100.0

- (注) 1. その他の主な内訳は、投資信託受益証券であります。
 2. 年金資産はすべて退職一時金制度に対して設定した退職給付信託であります。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
割引率	0.80~0.90%
長期期待運用収益率	0.00%
予想昇給率	1.90%

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
退職給付に係る負債の期首残高	76百万円
退職給付費用	8
退職給付の支払額	13
制度への拠出額	-
退職給付に係る負債の期末残高	71

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
積立型制度の退職給付債務	- 百万円
年金資産	-
非積立型制度の退職給付債務	71
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	71
退職給付に係る負債	71
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	71

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度 8百万円

4. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度208百万円であります。

5. 複数事業主制度

確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の厚生年金基金制度への要拠出額は、前連結会計年度184百万円であります。

(1) 複数事業主制度の直近の積立状況

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
年金資産の額	92,388百万円
年金財政計算上の数理債務の額と 最低責任準備金の額との合計額	70,975
差引額	21,412

(2021年3月31日時点)

(2) 複数事業主制度の掛金に占める当社グループの割合

前連結会計年度 4.7% (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(3) 補足説明

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高(前連結会計年度 1,487百万円)及び繰越剰余金(前連結会計年度22,899百万円)であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は元利均等償却で、償却期間は前連結会計年度が5年であります。当社グループは連結財務諸表上、当該償却に充てられる特別掛金(前連結会計年度87百万円)を費用処理しております。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
(繰延税金資産)	
賞与引当金	380百万円
未払費用	83
貸倒引当金	41
たな卸資産評価損	27
受注損失引当金	69
退職給付に係る負債	990
株式給付引当金	12
投資有価証券評価損	61
税務上の繰越欠損金(注)	25
その他	209
繰延税金資産小計	1,903
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)	22
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	70
評価性引当額小計	92
繰延税金資産合計	1,810
(繰延税金負債)	
有価証券時価評価	42
その他	12
繰延税金負債合計	56
繰延税金資産(負債)の純額	1,754

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額
前連結会計年度(2021年9月30日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金 (1)	-	2	-	-	-	22	25
評価性引当額	-	-	-	-	-	22	22
繰延税金資産	-	2	-	-	-	-	(2) 2

(1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額です。

(2) 税務上の繰越欠損金25百万円について、繰延税金資産2百万円を計上しております。税務上の繰越欠損金については、将来の課税所得の見込み等により、回収可能と判断した部分については評価性引当金を認識していません。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2021年9月30日)
法定実効税率	30.6%
(調整)	
連結会社間の内部取引消去	0.3
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6
評価性引当額の増減	0.6
住民税均等割	2.1
所得拡大促進税制による税額控除	0.0
外国税額等	0.3
子会社税率差異	1.9
その他	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	35.1

(企業結合等関係)

取得による企業結合

(1) 企業結合の概要

被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 株式会社エフェクト

事業の内容 システム受託開発、エンジニア派遣、自社システムの開発販売

企業結合を行った主な理由

株式会社エフェクトは、組み込みソフトウェアや今後市場拡大が見込まれるAI/IoT 活用システムの自社開発を行う福岡県の実力あるIT企業です。株式会社エフェクトは、高い技術力を有する豊富な人的資源を有しており、その特徴は先端的なITを有するのみならず、技術の適用領域は道路交通安全の安全性向上や農業の生産性向上など地域課題解決に資するものです。このような株式会社エフェクトの事業の方向性は、当社が目指す安心・安全で快適に暮らせるまちづくりに相通じるものがあり、技術面のみならず企業理念も含む強固な連携が図れるものと考えています。

今回の株式取得により、株式会社エフェクトが有する先端的なITと当社グループの経営資源やノウハウの共有により、各種研究開発を加速させ新たな事業領域の創出や既存事業の拡大、中長期的な企業価値の向上、さらには、当社グループが掲げる「長期経営ビジョン2030」に向けた持続的な成長に大きく寄与するものと考えています。

企業結合日

2021年3月3日(株式取得日)

2021年3月31日(みなし取得日)

企業結合の法的形式

現金及び第三者割当による自己株式を対価とする株式取得

結合後企業の名称

変更はありません。

取得した議決権比率

100%

取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が現金及び第三者割当による自己株式を対価として株式を取得したことによるものであります。

(2) 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

2021年4月1日から2021年9月30日

(3) 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	207百万円
	自己株式	23百万円

取得原価 230百万円

(4) 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザーに対する報酬・手数料等 34百万円

(5) 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

発生したのれん金額

173百万円

第2四半期連結累計期間において暫定的な会計処理を行っていましたが、前連結会計年度末において取得原価の配分が完了し、のれん金額は確定しております。

発生原因

取得原価が取得した資産及び引き受けた負債に配分された純額を上回ったため、その差額をのれんとして計上しております。

償却方法及び償却期間

5年間にわたる均等償却

(6) 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産 75百万円

資産 166百万円

資産合計 241百万円

流動負債 51百万円

固定負債 134百万円

負債合計 185百万円

(7) 企業結合が連結会計年度開始の日に完了したと仮定した場合の前連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額およびその算定方法

前連結会計年度における概算額の算定が困難であるため、記載しておりません。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいことから、注記を省略しております。

(セグメント情報等)

セグメント情報

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、取締役会が、業績を評価するために使用する構成単位である事業本部、部門、子会社を基礎としたサービス内容により区分しております。

すなわち、「コンサルタント事業」、「サービスプロバイダ事業」及び「プロダクツ事業」の3つを報告セグメントとしております。各セグメントの主要業務は以下のとおりとしております。

区分	主要業務
コンサルタント事業	橋梁・特殊構造物等に関する調査・計画・設計・施工管理、各種構造解析・実験、CM業務、土木構造物・施設に関するデザイン、道路・総合交通計画・道路整備計画・路線計画・都市・地域計画に関する調査・計画・設計・運用管理、各種公共施設のデータ管理等情報サービス全般、ITSに関する調査・計画・設計・運用管理、港湾、河川防災に関する調査・計画・設計・運用管理、情報処理に関するコンサルティング・システム化計画・設計・ソフトウェア開発・コンテンツ開発・運営・配信サービス、PFIに関する事業化調査・アドバイザー、環境に関する調査・計画・設計・運用管理、建築に関するコンサルティング・計画・設計、土質・地質調査、基礎構造および施工法に関する研究・開発、地盤災害に関する防災工事ならびに土木工事の設計施工、鉄道に関する調査・分析・企画・計画・設計・施工監理、再生可能エネルギーに関する調査・計画・設計・施工監理・EPC・マネジメント・資金調達コンサルティング・O&Mコンサルティング・アセットマネジメント
サービスプロバイダ事業	道路運営、公共施設の運営、PPP、デマンド交通システム、健康サポート
プロダクツ事業	エコ商品販売、レンタル、情報システムの販売・ASP

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「第5 経理の状況 1連結財務諸表等(1)連結財務諸表注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)」における記載と概ね同一であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

なお、資産及び負債については、報告セグメントに配分しておりません。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				調整額 (注1)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	コンサル タント事業	サービ スプロ バイダ 事業	プロダク ツ事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	33,614	492	434	34,541	-	34,541
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	107	-	107	107	-
計	33,614	599	434	34,648	107	34,541
セグメント利益	10,979	77	55	11,112	6	11,105

- (注) 1. セグメント利益の調整額 6百万円には、たな卸資産の調整額 6百万円が含まれております。
2. セグメント利益は、連結財務諸表の売上総利益と調整を行っております。
3. 資産は報告セグメントに配分していないため記載しておりません。

関連情報

前連結会計年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の90%を超えるため、記載を省略して
おります。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	東南アジア	その他アジア	中東・アフリカ	その他	合計
32,575	1,521	193	13	236	34,541

- (注) 1. 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。
2. 国又は地域の分類は、地理的近接度によっております。
3. 日本以外の分類に属する主な国又は地域
東南アジア：ベトナム、パプアニューギニア、フィリピン、インドネシア等
その他アジア：インド等
中東・アフリカ：モザンビーク等
その他：上記以外

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載
を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：百万円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関係するセグメント名
国土交通省	11,056	コンサルタント事業

報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報

前連結会計年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

該当事項はありません。

報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報

前連結会計年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

のれんについては、報告セグメントに配分しておりません。

なお、報告セグメントに配分されていないのれんの償却額は17百万円、未償却残高は156百万円であります。

報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報

前連結会計年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

該当事項はありません。

関連当事者情報

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金 又は 出資金 (百万円)	事業 内容	議決権等 の所有 (被所有) 割合	関連 当事者 との 関係	取引の 内容	取引 金額 (百万円)	科目	期末 残高 (百万円)
非連結 子会社	株式会社 南部町 バイオマス エナジー	東京都 中央区	46	電気の 販売	所有 直接 77.93%	出資 資金の 貸付	資金 の貸付	263	短期 貸付金	26
							資金の 回収	46	長期 貸付金	366
							利息の 受取	1		
	株式会社 長大 キャピタル・ マネジメント	東京都 中央区	90	特別 目的 会社 への 投融資	所有 直接 100.00%	出資 資金の 貸付	資金の 貸付	673	短期 貸付金	163
							資金の 回収	246	長期 貸付金	344
							利息の 受取	3		

(注) 1. 取引金額及び期末残高には消費税等が含まれておりません。

2. 取引条件及び取引条件の決定方針等

資金の貸付については、市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。

(1株当たり情報)

項目	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
1株当たり純資産額(円)	2,007.74
1株当たり当期純利益金額(円)	268.29

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり純資産の算定に用いられた株式数については、「野村信託銀行(株)(長大グループ社員持株会専用信託口)」が所有する自己株式(前連結会計年度0株)および「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が所有する自己株式(前連結会計年度280,000株)を控除し算定しております。

3. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
親会社株主に帰属する当期純利益金額 (百万円)	2,406
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期 純利益金額(百万円)	2,406
期中平均株式数(株)	8,968,465

(注) 期中平均株式数については、「野村信託銀行(株)(長大グループ社員持株会専用信託口)」が所有する自己株式(前連結会計年度29,107株)および「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」が所有する自己株式(前連結会計年度280,000株)を控除し算定しております。

(重要な後発事象)

(単独株式移転による持株会社体制への移行)

当社は、2020年11月24日開催の取締役会において、2021年10月1日を効力発生日として、当社単独による株式移転(以下「本株式移転」といいます。)により持株会社(完全親会社)である「人・夢・技術グループ株式会社」(以下「持株会社」といいます。)の設立ならびに持株会社体制への移行を、2020年12月18日開催の当社第53回定時株主総会に付議することを決議し、同株主総会において承認されました。

当該持株会社は2021年10月1日に設立されており、当社はその完全子会社となりました。

1. 単独株式移転による持株会社体制への移行の目的

当社グループは、グループガバナンスを一層強化しつつ、新規事業やM&Aを通じた事業軸を拡大していくなど、新

たなグループ経営形態への進化が必要であると判断いたしました。

新たに設立する持株会社は、グループガバナンスの強化という設立趣旨に鑑み、監査等委員会設置会社として設立し、取締役会による監督機能及び監査等委員会による監査機能の更なる強化などコーポレート・ガバナンス体制の一層の強化・充実を図ってまいります。

なお、本株式移転により、当社は持株会社の完全子会社になるため、当社株式は上場廃止となりますが、当社の株主の皆様は新たに交付される持株会社の株式につきましては、東京証券取引所市場第一部にテクニカル上場申請を行い、本株式移転効力発生日である2021年10月1日をもって東京証券取引所市場第一部に上場いたしました。

2. 株式移転の方式及び内容

(1) 株式移転の方式

当社を株式移転完全子会社、持株会社を株式移転設立完全親会社とする単独株式移転です。

(2) 株式移転に係る割当ての内容(株式移転比率)

会社名	人・夢・技術グループ株式会社 (完全親会社)	株式会社長大 (完全子会社)
株式移転比率	1	1

株式移転に係る割当ての内容

株式移転の効力発生日の前日における最終の株主名簿に記載又は記録された当社の普通株式を保有する株主の皆様に対し、その保有する当社普通株式1株につき設立する持株会社の普通株式1株を割当交付いたしました。

単元株式数及び単元未満株式の取扱いについて

持株会社は単元株制度を採用し、1単元の株式数を100株といたします。なお、単元未満株式の持株会社の株式の割当てを受ける当社の株主につきましては、かかる割り当てられた株式を東京証券取引所その他の金融商品取引所において売却することはできませんが、そのような単元未満株式を保有することとなる株主は、会社法第192条第1項の規定に基づき、持株会社に対し、自己の保有する単元未満株式を買取することを請求することが可能です。また、会社法第194条第1項及び持株会社の定款に定める規定に基づき、持株会社に対し、自己の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求することも可能です。

株式移転比率の算定根拠

本株式移転におきましては、当社単独による株式移転によって完全親会社である持株会社1社を設立するものであり、株式移転直前の当社の株主構成と持株会社の株主構成に変化がないことから、当社の株主の皆様は不利益を与えないことを第一義として、株主の皆様は保有する当社普通株式1株に対して、持株会社の普通株式1株を割当交付することといたしました。

第三者機関による算定結果、算定方法及び算定根拠

上記の理由により、第三者機関による株式移転比率の算定は行っておりません。

株式移転により交付する新株式数

普通株式 9,416,000株

本株式移転の効力発生日において当社が保有する自己株式に対しては、株式移転比率に応じて持株会社の普通株式が割当交付されております。

3. 株式移転の時期

定時株主総会基準日	2020年9月30日
株式移転計画承認取締役会	2020年11月24日
株式移転計画承認定時株主総会	2020年12月18日
上場廃止日	2021年9月29日
持株会社設立登記日(効力発生日)	2021年10月1日
持株会社上場日	2021年10月1日

4. 会計処理の概要

本株式移転は、企業会計上の「共通支配下の取引」に該当するため、損益への影響はありません。

5. 本株式移転の後の株式移転設立完全親会社となる会社の概要

名称	人・夢・技術グループ株式会社 (英文名: People, Dreams & Technologies Group Co., Ltd.)
所在地	東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目20番4号
代表者及び役員 の役職・氏名	代表取締役社長 永治 泰司 取締役副社長 野本 昌弘 取締役副社長 柳浦 良行 専務取締役 井戸 昭典 (コーポレート・ガバナンス担当) 常務取締役 塩釜 浩之 (経営企画担当) 取締役 西村 秀和 (監査等委員) 社外取締役 田邊 章 (監査等委員) 社外取締役 二宮 麻里子 (監査等委員) 社外取締役 酒井 之子 (監査等委員)
事業内容	傘下グループ会社の経営管理及びそれに付帯する業務

資本金	31億750万円
設立年月日	2021年10月1日
発行済株式数	9,416,000株
決算期	9月30日

(資本金及び資本準備金の減少)

当社は、2021年11月12日開催の取締役会において、資本金及び資本準備金の減少を、2021年12月21日開催の第54回定時株主総会に付議することを決議し、同株主総会において承認されました。

1. 資本金及び資本準備金の減少の目的

持株会社体制への移行とあわせて、資本構成を改善することにより、当社グループにおける効率的な資本政策の実現を目的としております。

2. 資本金及び資本準備金の減少の要領

会社法第447条第1項の規定に基づき、発行済株式総数を変更することなく、払い戻しを行わない無償減資となります。

(1) 減少する資本金の額

資本金の額3,107,500,000円を2,107,500,000円減少して資本金を1,000,000,000円とし、減少する資本金の額の全額を、その他資本剰余金に振り替えました。

(2) 減少する資本準備金の額

資本準備金の額4,864,370,000円を4,614,370,000円減少して資本準備金を250,000,000円とし、減少する資本準備金の額の全額を、その他資本剰余金に振り替えました。

3. 資本金及び資本準備金の減少の日程

取締役会決議日	2021年11月12日
債権者異議申述公告日	2021年11月15日
債権者異議申述最終期日	2021年12月15日
第54回定時株主総会決議日	2021年12月21日
効力発生日	2021年12月21日

(剰余金の処分)

当社は、2021年12月7日開催の臨時取締役会において、2021年12月23日付にて親会社である人・夢・技術グループ株式会社に金銭配当すること、並びに、2021年12月22日付けにて当社が保有する一部の土地建物等及び2021年12月23日付けにて当社が保有する一部の子会社株式等を親会社である人・夢・技術グループ株式会社に現物配当することについて、2021年12月22日開催の臨時株主総会に付議することを決議し、同株主総会において承認され、剰余金の処分を実施いたしました。

1. 剰余金の処分の目的

当社は、2021年10月1日付で株式移転により持株会社体制に移行し、人・夢・技術グループ株式会社の完全子会社となりました。そこで、新たなグループ内組織編成の構築、グループとしての事業戦略上の資産構成の改善、経営成績に応じた株主に対する継続的かつ安定的な利益還元のために、剰余金の処分を行いました。

2. 金銭配当に関する事項

(1) 配当財産の種類及びその総額

金銭 総額金2,562百万円

(2) 配当財産の割当てに関する事項

人・夢・技術グループ株式会社が当社の完全親会社であるため、当該配当財産（金銭）の全てを同社に割当
 交付いたしました。

(3) 剰余金の配当が効力を生ずる日

2021年12月23日

3. 現物配当に関する事項

(1) 配当財産の種類及び帳簿価額の総額

配当財産の種類	帳簿価額（注）
建物及び土地	1,619百万円
無形固定資産	68百万円
親会社株式（普通株式）	41百万円
子会社株式5銘柄（普通株式）	1,096百万円
関連会社株式1銘柄（普通株式）	4百万円
投資有価証券8銘柄（普通株式）	512百万円
出資金1銘柄	434百万円

（注）建物及び土地、無形固定資産は2021年11月末時点、それ以外は2021年9月末時点の帳簿価額を記載
 しております。

(2) 株主に対する配当財産の割当てに関する事項

人・夢・技術グループ株式会社が当社の完全親会社であるため、当該配当財産（所有不動産・所有株式等）
 の全てを同社に割当交付いたしました。

(3) 剰余金の配当がその効力を生ずる日

建物及び土地 2021年12月22日
 建物及び土地以外 2021年12月23日

4. 日程

当社株主総会決議 2021年12月22日
 効力発生日 建物及び土地 2021年12月22日
 建物及び土地以外 2021年12月23日

5. 実施する会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」（企業会計基準第21号 平成31年1月16日）及び「企業結合会計基準及び事業
 分離等会計基準に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第10号 平成31年1月16日）に基づき、「共通支配
 下の取引等」として会計処理をする予定です。

連結附属明細表

社債明細表

該当事項はありません。

借入金等明細表

区分	前期首残高 (百万円)	前期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定の長期借入金	52	50	0.7	-
1年以内に返済予定のリース債務	12	36	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	182	453	0.5	2022年～2029年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	6	74	-	2022年～2025年
合計	254	614	-	-

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	50	46	42	37
リース債務	34	33	6	0

資産除去債務明細表

該当事項はありません。

財務諸表

貸借対照表

(単位：百万円)

前事業年度
(2021年9月30日)

資産の部

流動資産

現金及び預金	5,062
受取手形	3
完成業務未収入金	4,480
未成業務支出金	2,675
前渡金	11
前払費用	100
その他	258
貸倒引当金	34
流動資産合計	12,558

固定資産

有形固定資産

建物	2,639
減価償却累計額	1,791
建物(純額)	848
構築物	138
減価償却累計額	128
構築物(純額)	9
工具、器具及び備品	235
減価償却累計額	200
工具、器具及び備品(純額)	34
土地	1,861
リース資産	130
減価償却累計額	37
リース資産(純額)	92
その他	2
有形固定資産合計	2,849

無形固定資産

ソフトウェア	98
電話加入権	24
その他	21
無形固定資産合計	145

(単位：百万円)

前事業年度
 (2021年9月30日)

投資その他の資産	
投資有価証券	711
関係会社株式	1,439
出資金	486
長期貸付金	45
関係会社長期貸付金	710
破産更生債権等	91
長期前払費用	1
繰延税金資産	951
差入保証金	404
保険積立金	599
その他	2
貸倒引当金	91
投資その他の資産合計	5,353
固定資産合計	8,348
資産合計	20,907
負債の部	
流動負債	
業務未払金	1,284
1年内返済予定の長期借入金	26
リース債務	33
未払金	43
未払費用	1,062
未払法人税等	403
未払消費税等	254
未成業務受入金	1,935
預り金	55
賞与引当金	443
役員賞与引当金	23
受注損失引当金	131
その他	34
流動負債合計	5,731
固定負債	
長期借入金	1 363
リース債務	69
株式給付引当金	41
退職給付引当金	1,402
その他	143
固定負債合計	2,019
負債合計	7,751

(単位：百万円)

前事業年度
(2021年9月30日)

純資産の部	
株主資本	
資本金	3,107
資本剰余金	
資本準備金	4,864
その他資本剰余金	167
資本剰余金合計	5,031
利益剰余金	
利益準備金	251
その他利益剰余金	
配当積立金	600
別途積立金	2,100
繰越利益剰余金	2,217
利益剰余金合計	5,168
自己株式	257
株主資本合計	13,050
評価・換算差額等	
その他有価証券評価差額金	104
評価・換算差額等合計	104
純資産合計	13,155
負債純資産合計	20,907

損益計算書

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	
売上高		
完成業務高		18,680
売上原価		
完成業務原価		12,831
売上総利益		5,849
販売費及び一般管理費	1	3,976
営業利益		1,873
営業外収益		
受取利息		5
受取配当金	2	287
受取家賃	2	28
補助金収入		25
為替差益		10
雑収入		44
営業外収益合計		401
営業外費用		
支払利息		8
和解金		4
雑損失		8
営業外費用合計		21
経常利益		2,252
特別損失		
投資有価証券評価損		49
関係会社株式評価損		6
特別損失合計		55
税引前当期純利益		2,197
法人税、住民税及び事業税		667
法人税等調整額		16
法人税等合計		651
当期純利益		1,546

完成業務原価明細書

		前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	
区分	注記 番号	金額(百万円)	構成比 (%)
人件費		5,049	39.4
外注費		6,276	48.9
経費		1,505	11.7
当期完成業務原価計		12,831	100.0

(注) 原価計算の方法は、実際個別原価計算によっております。

株主資本等変動計算書

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

(単位:百万円)

	株主資本									自己株式
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				自己株式	
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金				
						配当積立金	別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	3,107	4,864	148	5,013	251	300	1,600	2,009	4,160	320
当期変動額										
剰余金の配当				-				537	537	
配当積立金の積立				-		300		300	-	
別途積立金の積立				-			500	500	-	
当期純利益				-				1,546	1,546	
自己株式の取得				-					-	0
自己株式の処分			18	18					-	63
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)				-					-	
当期変動額合計	-	-	18	18	-	300	500	208	1,008	63
当期末残高	3,107	4,864	167	5,031	251	600	2,100	2,217	5,168	257

	株主資本	評価・換算差額等		純資産合計
	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	11,960	55	55	12,016
当期変動額				
剰余金の配当	537		-	537
配当積立金の積立	-		-	-
別途積立金の積立	-		-	-
当期純利益	1,546		-	1,546
自己株式の取得	0		-	0
自己株式の処分	82		-	82
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	-	49	49	49
当期変動額合計	1,090	49	49	1,139
当期末残高	13,050	104	104	13,155

注記事項

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法によっております。

(2) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)によっております。

時価のないもの

移動平均法による原価法によっております。

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書等を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

未成業務支出金

個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)によっております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

主として定率法(ただし、2005年10月1日以降に取得した建物(建物付属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物付属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物(付属設備を除く)	9年~50年
工具、器具及び備品	4年~20年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

ソフトウェア

社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。

その他

定額法を採用しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 受注損失引当金

受注業務の損失発生に備えるため、前事業年度末の未引渡業務のうち、損失発生の可能性が高く、かつ、その金額を合理的に見積ることが可能な業務について、損失見込額を計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、前事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、前事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

また、当社は退職給付信託を設定しております。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を前事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を発生翌事業年度より費用処理しております。

(6) 株式給付引当金

株式給付規程に基づく従業員の当社株式の給付に備えるため、前事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき株式給付引当金を計上しております。

5. 収益及び費用の計上基準

売上高及び売上原価の計上基準

前事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる業務
工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。
その他の業務
完成基準を適用しております。

6．外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

7．その他財務諸表作成のための重要な事項

（1）消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、前事業年度の費用として処理しております。

（2）退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

（重要な会計上の見積り）

（受注損失引当金）

（1）前事業年度の財務諸表上に計上した金額

受注損失引当金 131百万円

（2）識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

「連結財務諸表 注記事項（重要な会計上の見積り）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

（工事進行基準による収益認識）

（1）前事業年度の財務諸表上に計上した金額

工事進行基準による完成業務高 1,747百万円

（2）識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

「連結財務諸表 注記事項（重要な会計上の見積り）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

（会計方針の変更）

該当事項はありません。

（表示方法の変更）

（会計上の見積りの開示に関する会計基準の適用）

「会計上の見積りの開示に関する会計基準」（企業会計基準第31号 2020年3月31日）を前事業年度の年度末に係る財務諸表から適用し、財務諸表に重要な会計上の見積りに関する注記を記載しております。

（会計上の見積りの変更）

該当事項はありません。

（追加情報）

（信託型従業員持株インセンティブ・プラン）

当社は、2018年4月に当社グループ社員（以下、「社員」といいます。）に対して中長期的な企業価値向上のインセンティブを付与すると同時に、福利厚生を増進策として、持株会の拡充を通じて社員の株式取得及び保有を促進することにより社員の財産形成を支援することを目的として「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」を導入しております。

なお、詳細につきましては、「連結財務諸表 注記事項（追加情報）」に記載のとおりです。

（従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引）

当社は、2019年8月に社員に対して、当社の株価や業績と当社の社員の処遇の連動性をより高め、経済的な効果を株主の皆様と共有することにより、株価及び業績向上への社員の意欲や士気を高めることを目的とした、自社の株式を給付するインセンティブ・プラン「株式給付信託（J-ESOP）」を導入しております。

なお、詳細につきましては、「連結財務諸表 注記事項（追加情報）」に記載のとおりです。

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う会計上の見積りについて)

新型コロナウイルス感染症の今後の広がり方や収束時期等是不確実性が高い事象であり、変異株の動向等、先行きは依然として不透明な状況が続くと認識しております。

前事業年度の当社の事業活動及び業績に与える影響は総じて軽微でしたが、海外事業においては、受注や業務の遅延等により業績に影響が発生している状況であり、翌事業年度においても影響が一定程度継続するとの仮定に基づき、繰延税金資産の回収可能性の判断や固定資産の減損の判定などの会計上の見積りを行っております。

当社の事業活動及び業績に与える影響は軽微であると判断しておりますが、当該仮定は不確実性が高いため、収束が遅延し、影響が長期化した場合には、将来において財政状態及び経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(貸借対照表関係)

1 財務制限条項

長期借入金のうち当社の株式会社三菱UFJ銀行との2019年3月28日締結の実行可能期間付タームローン契約において財務制限条項が付されております。

その財務制限条項の内容は以下のとおりであります。

借入人は本契約に基づく貸付人に対する全ての債務の履行が完了するまで、以下に定める内容を財務制限条項として、遵守維持するものとする。

(1) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の貸借対照表において、純資産の部の合計額を、2018年9月決算期の年度決算期の末日における純資産の部の合計額又は前年度決算期の末日における純資産の部の合計額のいずれか大きい方の75%以上に維持すること。

(2) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の損益計算書において、経常損益の金額を0円以上に維持すること。

この契約に基づく前事業年度末の借入未実行残高は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2021年9月30日)
契約総額	400 百万円
借入実行総額	396
借入未実行残高	4

2 偶発債務

次の関係会社の金融機関等からの借入金に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	前事業年度 (2021年9月30日)
株式会社別府鉄輪パークマネジメント	25百万円

(損益計算書関係)

1 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度64%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度36%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
役員報酬	217百万円
給料手当	1,257
賞与	440
株式給付引当金繰入額	13
退職給付費用	115
法定福利費	292
旅費交通費	117
減価償却費	68
貸倒引当金繰入額	120

2 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)
受取家賃	14百万円
受取配当金	279

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式で時価のあるものはありません。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額
(単位: 百万円)

区分	前事業年度 (2021年9月30日)
子会社株式	1,427
関連会社株式	11

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるものであります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2021年9月30日)
(繰延税金資産)	
貸倒引当金	38百万円
たな卸資産評価損	13
退職給付引当金	659
株式給付引当金	12
関係会社株式評価損	20
投資有価証券評価損	60
未払費用	34
受注損失引当金	40
賞与引当金	143
その他	56
繰延税金資産小計	1,079
評価性引当額	85
繰延税金資産計	994
(繰延税金負債)	
有価証券時価評価	42
繰延税金負債計	42
繰延税金資産の純額	951

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2021年9月30日)
法定実効税率	30.6%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.5
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	3.9
評価性引当額の増減	0.8
住民税均等割	2.7
その他	1.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	29.6

(企業結合等関係)

取得による企業結合

詳細は「連結財務諸表 注記事項(企業結合等関係)」をご参照ください。

(重要な後発事象)

「連結財務諸表 注記事項(重要な後発事象)」をご参照ください。

附属明細表

有形固定資産等明細表

資産の種類	前期首残高 (百万円)	前期増加額 (百万円)	前期減少額 (百万円)	前期末残高 (百万円)	前期末減価償却累計額又は償却累計額 (百万円)	前期償却額 (百万円)	差引前期末残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	2,608	53	23	2,639	1,791	59	848
構築物	138	-	-	138	128	1	9
工具、器具及び備品	217	27	9	235	200	17	34
土地	1,861	-	-	1,861	-	-	1,861
リース資産	61	112	43	130	37	34	92
その他	21	-	10	10	8	1	2
有形固定資産計	4,908	192	85	5,015	2,166	113	2,849
無形固定資産							
ソフトウェア	351	18	1	367	268	44	98
電話加入権	24	-	-	24	-	-	24
その他	18	24	4	39	17	0	21
無形固定資産計	395	42	5	431	286	44	145
長期前払費用	15	0	1	14	12	2	2 (1)

(注) 「差引前期末残高」欄の()内は内書きで、1年内費用化予定の長期前払費用であり、貸借対照表上では「前払費用」として流動資産に含めて表示しております。

引当金明細表

区分	前期首残高 (百万円)	前期増加額 (百万円)	前期減少額 (目的使用) (百万円)	前期減少額 (その他) (百万円)	前期末残高 (百万円)
貸倒引当金	5	123	-	2	125
賞与引当金	551	443	551	-	443
役員賞与引当金	24	23	24	-	23
受注損失引当金	188	131	-	188	131
株式給付引当金	-	44	2	-	41

- (注) 1. 貸倒引当金の「前期減少額(その他)」は、回収による取崩し及び外貨建債権にかかる評価替金額であります。
2. 受注損失引当金の「前期減少額(その他)」は、洗替額であります。なお、対応する未成業務支出金とは相殺せずに両建てで表示しております。

財務諸表

貸借対照表

(単位：百万円)

当事業年度
(2022年9月30日)

資産の部

流動資産

現金及び預金	2,025
受取手形	17
完成業務未収入金	2,256
契約資産	4,781
未成業務支出金	1,174
前渡金	27
前払費用	109
リース投資資産	13
その他	895
貸倒引当金	46
流動資産合計	11,255

固定資産

有形固定資産

建物	1,853
減価償却累計額	1,267
建物(純額)	586
構築物	129
減価償却累計額	120
構築物(純額)	8
工具、器具及び備品	220
減価償却累計額	191
工具、器具及び備品(純額)	28
土地	747
リース資産	141
減価償却累計額	59
リース資産(純額)	81
建設仮勘定	9
その他	5
有形固定資産合計	1,467

無形固定資産

ソフトウェア	40
電話加入権	24
その他	1
無形固定資産合計	66

(単位：百万円)

当事業年度
 (2022年9月30日)

投資その他の資産	
投資有価証券	270
関係会社株式	338
出資金	1
長期貸付金	51
関係会社長期貸付金	847
長期前払費用	7
繰延税金資産	990
長期リース投資資産	311
差入保証金	375
保険積立金	633
投資その他の資産合計	3,827
固定資産合計	5,361
資産合計	16,617
負債の部	
流動負債	
業務未払金	1,801
1年内返済予定の長期借入金	26
1年内返済予定の関係会社長期借入金	200
リース債務	50
未払金	259
未払費用	1,124
未払法人税等	445
未成業務受入金	945
預り金	197
賞与引当金	590
役員賞与引当金	6
受注損失引当金	74
その他	23
流動負債合計	5,745
固定負債	
長期借入金	1 336
関係会社長期借入金	666
リース債務	357
株式給付引当金	57
退職給付引当金	1,517
その他	1
固定負債合計	2,936
負債合計	8,682

(単位：百万円)

当事業年度
(2022年9月30日)

純資産の部	
株主資本	
資本金	1,000
資本剰余金	
資本準備金	250
その他資本剰余金	701
資本剰余金合計	951
利益剰余金	
利益準備金	251
その他利益剰余金	
別途積立金	2,100
繰越利益剰余金	3,633
利益剰余金合計	5,984
株主資本合計	7,936
評価・換算差額等	
その他有価証券評価差額金	2
評価・換算差額等合計	2
純資産合計	7,934
負債純資産合計	16,617

損益計算書

(単位：百万円)

	当事業年度	
	(自 2021年10月1日	
	至 2022年9月30日)	
売上高	1	20,527
売上原価	4, 5	14,254
売上総利益		6,273
販売費及び一般管理費	2, 3	4,073
営業利益		2,199
営業外収益		
受取利息		8
受取配当金	6	401
受取家賃	6	37
為替差益		65
雑収入		90
営業外収益合計		603
営業外費用		
支払利息		14
雑損失		8
営業外費用合計		22
経常利益		2,780
特別損失		
関係会社株式評価損		8
特別損失合計		8
税引前当期純利益		2,771
法人税、住民税及び事業税		786
法人税等調整額		60
法人税等合計		725
当期純利益		2,046

売上原価明細書

		当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
区分	注記 番号	金額(百万円)	構成比 (%)
人件費		5,144	36.1
外注費		7,524	52.8
経費		1,585	11.1
当期売上原価計		14,254	100.0

(注) 原価計算の方法は、実際個別原価計算によっております。

株主資本等変動計算書

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

（単位：百万円）

	株主資本									
	資本金	資本剰余金			利益剰余金					自己株式
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金合計	
						配当積立金	別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	3,107	4,864	167	5,031	251	600	2,100	2,217	5,168	257
会計方針の変更による累積的影響額				-				138	138	
会計方針の変更を反映した当期首残高	3,107	4,864	167	5,031	251	600	2,100	2,356	5,307	257
当期変動額										
剰余金の配当			2,562	2,562		600		768	1,368	
当期純利益				-				2,046	2,046	
株式移転による増減			238	238				-	-	257
減資	2,107	4,614	6,721	2,107				-	-	
現物配当			3,863	3,863				-	-	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				-				-	-	
当期変動額合計	2,107	4,614	534	4,080	-	600	-	1,277	677	257
当期末残高	1,000	250	701	951	251	-	2,100	3,633	5,984	-

	株主資本	評価・換算差額等		純資産合計
	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	13,050	104	104	13,155
会計方針の変更による累積的影響額	138		-	138
会計方針の変更を反映した当期首残高	13,189	104	104	13,294
当期変動額				
剰余金の配当	3,930		-	3,930
当期純利益	2,046		-	2,046
株式移転による増減	495		-	495
減資	-		-	-
現物配当	3,863		-	3,863
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	-	107	107	107
当期変動額合計	5,252	107	107	5,359
当期末残高	7,936	2	2	7,934

キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

当事業年度
(自 2021年10月1日
至 2022年9月30日)

営業活動によるキャッシュ・フロー

税金等調整前当期純利益	2,771
減価償却費	120
退職給付引当金の増減額(は減少)	114
貸倒引当金の増減額(は減少)	79
賞与引当金の増減額(は減少)	146
役員賞与引当金の増減額(は減少)	16
株式給付引当金の増減額(は減少)	16
受注損失引当金の増減額(は減少)	56
受取利息及び受取配当金	410
支払利息	14
その他の損益(は益)	16
売上債権の増減額(は増加)	2,570
未成業務支出金の増減額(は増加)	1,500
その他の資産の増減額(は増加)	383
業務未払金の増減額(は減少)	516
未成業務受入金の増減額(は減少)	990
未払消費税等の増減額(は減少)	254
未払費用の増減額(は減少)	62
その他の負債の増減額(は減少)	217
小計	703
利息及び配当金の受取額	407
利息の支払額	14
法人税等の支払額	644
営業活動によるキャッシュ・フロー	450

(単位：百万円)

当事業年度
 (自 2021年10月1日
 至 2022年9月30日)

投資活動によるキャッシュ・フロー	
有形固定資産の取得による支出	272
投資有価証券の取得による支出	0
関係会社株式の取得による支出	9
貸付けによる支出	487
貸付金の回収による収入	238
保険積立金の積立による支出	111
保険積立金の解約による収入	77
その他の支出	46
その他の収入	36
投資活動によるキャッシュ・フロー	574
財務活動によるキャッシュ・フロー	
短期借入れによる収入	3,500
短期借入金の返済による支出	3,500
長期借入れによる収入	1,000
長期借入金の返済による支出	159
配当金支払による支出	3,933
自己株式の処分による収入	216
その他の支出	36
財務活動によるキャッシュ・フロー	2,914
現金及び現金同等物に係る換算差額	1
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	3,036
現金及び現金同等物の期首残高	5,062
現金及び現金同等物の期末残高	1 2,025

注記事項

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書等を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法により算定しております。

2. 棚卸資産の評価基準及び評価方法

未成業務支出金

個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)によっております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

主として定率法(ただし、2005年10月1日以降に取得した建物(建物付属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物付属設備及び構築物については、定額法)を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物(付属設備を除く) 9年~50年

工具、器具及び備品 4年~20年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

ソフトウェア

社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。

その他

定額法を採用しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 受注損失引当金

受注業務の損失発生に備えるため、当事業年度末の未引渡業務のうち、損失発生の可能性が高く、かつ、その金額を合理的に見積ることが可能な業務について、損失見込額を計上しております。

(5) 株式給付引当金

株式給付規程に基づく従業員の当社株式の給付に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき株式給付引当金を計上しております。

(6) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

また、当社は退職給付信託を設定しております。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を発生翌事業年度より費用処理しております。

5. 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点は以下のとおりであります。なお、当社の取引に関する支払条件は、通常、短期のうちに支払期

日が到来し、契約に重要な金融要素は含まれておりません。

コンサルタント事業及びサービスプロバイダ事業

コンサルタント事業及びサービスプロバイダ事業においては橋梁の設計・老朽化対策、道路構造物の維持管理、再生可能エネルギー事業でのコンサルティング、地質・土質調査等を行っており、これらに関して当社が提供する業務を履行義務として識別しております。当該契約については、一定期間にわたり履行義務が充足されると判断し、履行義務の充足に係る進捗度に基づき収益を認識しております。履行義務の充足に係る進捗率の見積りの方法は、発生原価に基づくインプット法によっております。

プロダクツ事業

プロダクツ事業においては、主にエコ商品の販売等を行っております。このような商品の販売においては、商品を顧客に引き渡した時点で収益を認識しております。

6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

7. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

8. その他財務諸表作成のための重要な事項

(1) 控除対象外消費税等の会計処理

控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理しております。

(2) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(重要な会計上の見積り)

(受注損失引当金)

(1) 当事業年度の財務諸表上に計上した金額

受注損失引当金 74百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

受注契約に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末手持業務のうち、損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積ることができる業務について損失見込額を計上しております。損失見込額は業務収益総額から業務原価総額を差し引いた金額から既に計上された損失額を控除して算出しております。

主要な仮定

損失見込額は、業務原価総額の見積りに大きく依存しており、業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は変動することがあるため、業務の進捗状況、過去の業務実績等を踏まえて、これらを適時・適切に見積もっています。

翌事業年度の財務諸表に与える影響

業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は、不確実性が高く、業務内容の変更や追加業務の発生等により見直しが必要となった場合、翌事業年度の財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(一定の期間にわたり履行義務を充足し認識する収益)

(1) 当事業年度の財務諸表上に計上した金額

一定の期間にわたり履行義務を充足し収益を認識する方法により計上した売上高 20,032百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

一定の期間にわたり履行義務が充足される契約については、履行義務の充足に係る進捗度を見積り、一定の期間にわたり収益を認識しております。

主要な仮定

一定の期間にわたり履行義務が充足に係る収益認識については、業務原価総額の見積りに大きく依存しており、業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は変動することがあるため、業務の進捗状況、過去の業務実績等を踏まえて、これらを適時・適切に見積もっています。

翌事業年度の財務諸表に与える影響

業務原価総額の算出にあたって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は、不確実性が高く、業務内容の変更や追加業務の発生等により見直しが必要となった場合、翌事業年度の財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(会計方針の変更)

(1) 収益認識に関する会計基準等の適用

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することといたしました。

これにより、従来、進捗部分について成果の確実性が認められる業務については工事進行基準を、その他の業務については完成基準を採用しておりましたが、一定の期間にわたり履行義務が充足される契約については、履行義務の充足に係る進捗度を見積り、一定の期間にわたり収益を認識し、一時点で履行義務が充足される契約については、履行義務を充足した時点で収益を認識しております。

なお、履行義務の充足に係る進捗率の見積りの方法は、発生原価に基づくインプット法によっております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当事業年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。また、収益認識会計基準第86項また書き(1)に定める方法を適用し、当事業年度の期首より前までに行われた契約変更について、すべての契約変更を反映した後の契約条件に基づき、会計処理を行い、その累積的影響額を当事業年度の期首の利益剰余金に加減しております。

1株当たり情報について、1株当たり純資産額は87円25銭増加、1株当たり当期純利益は87円24銭増加しております。

この結果、当事業年度の売上高は31億93百万円、売上原価は23億71百万円それぞれ増加し、営業利益、経常利益及び税引前当期純利益はそれぞれ8億21百万円増加しております。また、利益剰余金の当期首残高は1億38百万円増加しております。

(2) 時価の算定に関する会計基準等の適用

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、財務諸表への影響はありません。

また、(金融商品関係)の注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うこととしました。

(未適用の会計基準等)

・「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号2021年6月17日企業会計基準委員会)

(1) 概要

投資信託の時価の算定および注記に関する取扱い並びに貸借対照表に持分相当額を純額で計上する組合等への出資の時価の注記に関する取扱いが定められました。

(2) 適用予定日

2023年9月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」の適用による財務諸表に与える影響は評価中であります。

(会計上の見積りの変更)

該当事項はありません。

(追加情報)

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う会計上の見積りについて)

新型コロナウイルス感染症の今後の広がり方や収束時期等は不確実性が高い事象であり、変異株の動向等、先行きは依然として不透明な状況が続くと認識しております。

当事業年度の当社の事業活動及び業績に与える影響は総じて軽微でしたが、海外事業においては、受注や業務の遅延等により業績に影響が発生している状況であり、翌事業年度においても影響が一定程度継続するとの仮定に基づき、繰延税金資産の回収可能性の判断や固定資産の減損の判定などの会計上の見積りを行っております。

当社の事業活動及び業績に与える影響は軽微であると判断しておりますが、当該仮定は不確実性が高いため、収束が遅延し、影響が長期化した場合には、将来において財政状態及び経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(貸借対照表関係)

1 財務制限条項

長期借入金のうち当社の株式会社三菱UFJ銀行との2019年3月28日締結の実行可能期間付タームローン契約において財務制限条項が付されております。

その財務制限条項の内容は以下のとおりであります。

借入人は本契約に基づく貸付人に対する全ての債務の履行が完了するまで、以下に定める内容を財務制限条項として、遵守維持するものとする。

- (1) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の貸借対照表において、純資産の部の合計額を、2018年9月決算期の年度決算期の末日における純資産の部の合計額又は前年度決算期の末日における純資産の部の合計額のいずれか大きい方の75%以上に維持すること。
- (2) 2019年9月決算期を初回とする各年度決算期の末日における借入人の損益計算書において、経常損益の金額を0円以上に維持すること。

この契約に基づく当事業年度末の借入未実行残高は、次のとおりであります。

	当事業年度 (2022年9月30日)
契約総額	400百万円
借入実行残高	363
差引額	37

2 偶発債務

次の関係会社の金融機関等からの借入金に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	当事業年度 (2022年9月30日)
株式会社別府鉄輪パークマネジメント	21百万円
PT.AMCO HYDRO INDONESIA	227

(損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、注記事項「(収益認識関係) 1 顧客との契約から生じる収益を分解した情報」に記載しております。

2 販売費に属する費用のおおよその割合は当事業年度68%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は当事業年度32%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
役員報酬	125百万円
給料手当	1,069
賞与	519
株式給付引当金繰入額	5
退職給付費用	108
法定福利費	310
旅費交通費	163
減価償却費	44
グループ関連費用	417
貸倒引当金繰入額	3

3 研究開発費の総額

販売費及び一般管理費に含まれる研究開発費

当事業年度
(自 2021年10月1日
至 2022年9月30日)

256百万円

4 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額(は戻入額)

当事業年度
(自 2021年10月1日
至 2022年9月30日)

24百万円

5 期末棚卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次の棚卸資産評価損(は戻入額)が売上原価に含まれております。

当事業年度
(自 2021年10月1日
至 2022年9月30日)

0百万円

6 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
受取家賃	24百万円
受取配当金	398

(株主資本等変動計算書関係)

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度 期首株式数 (株)	当事業年度 増加株式数 (株)	当事業年度 減少株式数 (株)	当事業年度末 株式数 (株)
発行済株式				
普通株式	9,416,000	-	-	9,416,000
合計	9,416,000	-	-	9,416,000
自己株式				
普通株式				
当社が保有する自己株式	130,381	-	130,381	-
株式給付信託が保有する自己 株式	280,000	-	280,000	-
合計	410,381	-	410,381	-

(注) 普通株式の自己株式の減少は、保有自己株式に対し株式移転により親会社である人・夢・技術グループ株式会社の株式が割り当てられたことによる減少130,381株、株式給付信託制度による「(株)日本カストディ銀行(信託E口)」の信託保有株式を株式移転により人・夢・技術グループ株式会社へ譲渡に伴った減少280,000株によるものであります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2021年12月21日 定時株主総会	普通株式	668	72	2021年9月30日	2021年12月22日
2021年12月22日 臨時株主総会	普通株式	2,562	272.09	-	2021年12月23日
2022年9月20日 臨時株主総会	普通株式	700	74.34	-	2022年9月21日

(注) 2021年12月21日定時株主総会の決議による配当金の総額には、信託E口が保有する当社株式に対する配当金20百万円が含まれております。

(2) 金銭以外による配当

決議	株式の種類	配当財産の種類	配当財産の帳簿価額(円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2021年12月22日臨時株主総会	普通株式	土地・建物	1,619,680,463	-	-	2021年12月22日
2021年12月22日臨時株主総会	普通株式	ソフトウェア	68,333,251	-	-	2021年12月23日
2021年12月22日臨時株主総会	普通株式	保有株式等	1,896,541,923	-	-	2021年12月23日
2021年12月22日臨時株主総会	普通株式	親会社株式	279,406,483	-	-	2021年12月23日

(注) 2021年12月22日臨時株主総会において、当社が保有する親会社株式を人・夢・技術グループ株式会社へ現物配当することを決定し、2021年12月22日及び23日に実施いたしました。

(3) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌事業年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額(百万円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年12月22日定時株主総会	普通株式	1,045	利益剰余金	111	2022年9月30日	2022年12月23日

(キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
現金及び預金	2,025 百万円
現金及び現金同等物	2,025

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

主としてファイルサーバー及び事業用什器であります。

また、リース投資資産として計上している木質バイオマス発電設備について、所有権移転外ファイナンス・リース契約によりグループ会社にて事業に使用しております。

リース資産の減価償却の方法

「注記事項 (重要な会計方針) 3. 固定資産の減価償却の方法 (3) リース資産」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

該当事項はありません。

(貸主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース投資資産の内訳

イ. 流動資産

(単位:百万円)

	当事業年度 (2022年9月30日現在)
リース料債権部分	24
見積残存価額部分	-
受取利息相当額	10
合計	13

ロ．投資その他の資産

(単位：百万円)

	当事業年度 (2022年9月30日現在)
リース料債権部分	338
見積残存価額部分	-
受取利息相当額	26
合 計	311

リース投資資産に係るリース料債権部分の金額の回収予定額

(単位：百万円)

	当事業年度 (2022年9月30日現在)
1年以内	24
1年超2年以内	24
2年超3年以内	24
3年超4年以内	289
4年超5年以内	-
5年超	-
合 計	362

2．オペレーティング・リース取引
 該当事項はありません。

(金融商品関係)

1．金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、設備投資計画に照らして、必要な資金（主に親会社借入）を調達しております。一時的な余資は主に流動性の高い金融資産で運用し、また、短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び完成業務未収入金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、海外で事業を行うにあたり生じる外貨建の営業債権は、為替の変動リスクに晒されております。

営業債務である業務未払金は、そのほとんどが1年以内の支払期日であります。

借入金には主に運転資金及び、新規事業に係る資金調達を目的としたものであり、返済日は最長で決算日後7年3ヶ月であります。このうち一部は、金利の変動リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、営業債権である受取手形及び完成業務未収入金について、当社の「営業企画担当部門管理規程」に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行う体制としております。

市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社は、外貨建の営業債権債務について、通貨別月別に為替変動による影響額を把握しており、必要に応じて為替予約等によるヘッジを行っております。また、投資有価証券については、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、定期的に時価や発行取引先企業の財務状況を把握し、市場や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、随時資金繰計画を作成・更新するとともに、手元流動性の維持等により流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要素を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価格が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

当事業年度（2022年9月30日）

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 長期貸付金(*3)	1,201	1,186	14
資産計	1,201	1,186	14
(1) 長期借入金(*4)	1,229	1,211	17
負債計	1,229	1,211	17
デリバティブ取引	-	-	-

(*1) 「現金及び預金」、「受取手形及び完成業務未収入金」、「業務未払金」及び「未払費用」については、現金であること、及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

(*2) 市場価格のない株式等は含まれておりません。当該金融商品の貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

区分	当事業年度(百万円)
非上場株式等	609

(*3) 1年以内に回収予定の長期貸付金については、長期貸付金に含めております。

(*4) 1年以内に返済予定の長期借入金並びに1年以内に返済予定の関係会社長期借入金については、長期借入金に含めております。

(*5) 長期借入金の時価は、元利金の合計額と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しております。

資金の貸付については、市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。

(注1) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

当事業年度（2022年9月30日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	2,025	-	-	-
受取手形及び完成業務未収入金	2,273	-	-	-
有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの	-	-	-	-
長期貸付金	75	251	383	263
合計	4,374	251	383	263

(注2) 有利子負債の連結決算日後の返済予定額

当事業年度（2022年9月30日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
長期借入金	226	226	226	226	93	231
リース債務	50	49	23	283	-	-
合計	276	275	250	510	93	231

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で貸借対照表に計上している金融商品
 当事業年度(2022年9月30日)
 該当事項はありません。

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品
 当事業年度(2022年9月30日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期貸付金	-	1,186	-	1,186
資産計	-	1,186	-	1,186
長期借入金	-	1,211	-	1,211
負債計	-	1,211	-	1,211

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

長期貸付金

長期貸付金の時価は、元利金の合計額を同様の新規貸付けを行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

長期借入金

長期借入金の時価は、元利金の合計額と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1. 子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりであります。

(単位:百万円)

	当事業年度 (2022年9月30日)
子会社株式	328
関連会社株式	10
合計	338

2. その他有価証券

当事業年度(2022年9月30日)

該当事項はありません。

3. 事業年度中に売却したその他有価証券

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

該当事項はありません。

4. 減損処理を行った有価証券

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

投資有価証券(非上場の投資有価証券)について8百万円の減損処理を行っております。

なお、非上場株式の減損処理にあたりましては、当該株式の発行会社の財政状態の悪化により実質価額が著しく下落した場合には、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。

退職一時金制度(非積立型制度ですが、退職給付信託を設定した結果、積立型制度となっているものがあります。)では、退職給付として、給与と勤務期間に基づいた一時金を支給します。

当社は、複数事業主制度の企業年金制度(建設コンサルタンツ企業年金基金)に加入しております。自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができない制度であるため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。

2. 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
退職給付債務の期首残高	2,173百万円
勤務費用	122
利息費用	19
数理計算上の差異の発生額	15
退職給付の支払額	63
退職給付債務の期末残高	2,266

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
年金資産の期首残高	751百万円
期待運用収益	33
数理計算上の差異の発生額	69
事業主からの拠出額	-
退職給付の支払額	63
年金資産の期末残高	651

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と貸借対照表に計上された退職給付引当金及び前払年金費用の調整表

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
積立型制度の退職給付債務	2,266百万円
年金資産	651
未積立退職給付債務	1,615
未認識数理計算上の差異	97
貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,517
退職給付引当金	1,517
貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,517

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
勤務費用	122百万円
利息費用	19
期待運用収益	33
数理計算上の差異の費用処理額	5
過去勤務費用の費用処理額	-
確定給付制度に係る退職給付費用	114

(5) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	当事業年度 (2022年9月30日)
債券	- %
株式	-
その他	100.0
合計	100.0

- (注) 1. その他の主な内訳は、投資信託受益証券であります。
2. 年金資産はすべて退職一時金制度に対して設定した退職給付信託であります。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

	当事業年度 (2022年9月30日)
割引率	0.90%
長期期待運用収益率	0.00%
予想昇給率	2.00%

3. 確定拠出制度

当社の確定拠出制度への要拠出額は、当事業年度148百万円であります。

4. 複数事業主制度

確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の厚生年金基金制度への要拠出額は、当事業年度102百万円であります。

(1) 複数事業主制度の直近の積立状況

	当事業年度 (2022年9月30日)
年金資産の額	93,421百万円
年金財政計算上の数理債務の額と 最低責任準備金の額との合計額	71,564
差引額	21,856

(2022年3月31日時点)

(2) 複数事業主制度の掛金に占める当社の割合

当事業年度 2.7% (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(3) 補足説明

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高(当事業年度 1,502百万円)及び繰越剰余金(当事業年度23,359百万円)であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は期間5年の元利均等償却であり、当社は財務諸表上、当該償却に充てられる特別掛金(当事業年度8百万円)を費用処理しております。

なお、上記(2)の割合は当社の実際の負担割合とは一致しません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	当事業年度 (2022年9月30日)
(繰延税金資産)	
貸倒引当金	14百万円
退職給付引当金	664
株式給付引当金	17
関係会社株式評価損	4
投資有価証券評価損	3
未払費用	36
受注損失引当金	22
賞与引当金	180
その他	57
繰延税金資産小計	1,001
評価性引当額	11
繰延税金資産計	990
(繰延税金負債)	
繰延税金負債計	-
繰延税金資産の純額	990

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	当事業年度 (2022年9月30日)
法定実効税率	30.6%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	4.4
評価性引当額の増減	0.1
住民税均等割	1.8
その他	2.3
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.2

(企業結合等関係)

共通支配下の取引等

(単独株式移転による持株会社の設立)

1. 取引の概要

2020年11月24日開催の当社取締役会及び2020年12月18日開催の第53回定時株主総会において、単独株式移転により持株会社(完全親会社)である「人・夢・技術グループ株式会社」の設立ならびに持株会社体制へ移行することを決議し、2021年10月1日に設立いたしました。

(1) 結合当事企業の名称及び事業の内容

名称 株式会社長大
 事業の内容 建設コンサルタント事業

(2) 企業結合日

2021年10月1日

(3) 企業結合の法的形式

単独株式移転による持株会社設立

(4) 結合後企業の名称

人・夢・技術グループ株式会社

(5) 企業結合の目的

当社は、グループガバナンスを一層強化しつつ、新規事業やM&Aを通じた事業軸を拡大していくなど、新たなグループ経営形態への進化が必要であると判断いたしました。

新たに設立された持株会社である人・夢・技術グループ株式会社は、グループガバナンスの強化という設立趣旨に鑑み、監査等委員会設置会社として設立し、取締役会による監督機能及び監査等委員会による監査機能の更なる強化などコーポレート・ガバナンス体制の一層の強化・充実を図ってまいります。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 2019年1月16日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基適用指針第10号 2019年1月16日)に基づき、「共通支配下の取引」として会計処理しています。

(賃貸等不動産関係)

当事業年度(自2021年10月1日 至2022年9月30日)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいことから、注記を省略しております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			合計	
	コンサルタント事業	サービスプロバイダ事業	プロダクツ事業		
日本	国土交通省	8,593	-	-	8,593
	その他官公庁	6,882	14	0	6,896
	その他民間	3,391	252	487	4,131
海外	683	201	1	885	
顧客との契約から生じる収益	19,549	468	488	20,507	
その他の収益	-	20	-	20	
外部顧客への売上高	19,549	488	488	20,527	

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「注記事項 (重要な会計方針) 5. 収益及び費用の計上基準」に記載のとおりです。

また、履行義務への配分額の算定については、約束した財又はサービスを顧客に移転するのと交換に権利を得ると見込んでいる対価の金額を描写する金額で取引価格をそれぞれの履行義務へ配分しております。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当事業年度末において存在する顧客との契約から翌事業年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 顧客との契約から生じた債権、契約資産の残高等

(単位：百万円)

	当事業年度	
	期首残高	期末残高
顧客との契約から生じた債権	4,484	2,273
契約資産	1,367	4,781
契約負債	1,407	945

契約資産は、工事の進捗に応じて認識する収益の対価に関する権利のうち、未請求のものであり、対価に対する権利が請求可能になった時点で顧客との契約から生じた債権に振り替えております。

契約負債は、顧客からの前受金であり、工事の進捗に応じ収益を認識するにつれて取り崩しております。

なお、貸借対照表上、契約負債は「未成業務受入金」に含めております。

また、当事業年度において認識された収益のうち、当期首時点で契約負債に含まれていた金額は1,386百万円であり、当事業年度の契約資産及び契約負債の残高の重要な変動はありません。過去の期間に充足した履行義務から当事業年度に認識した収益については、308百万円であります。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当事業年度末において残存履行義務に配分した取引価格の総額は、16,796百万円であります。当該残存履行義務は、概ね2年以内に収益として認識すると見込んでおります。

(セグメント情報等)

セグメント情報

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、取締役会が、業績を評価するために使用する構成単位である事業本部、部門、を基礎としたサービス内容により区分しております。

すなわち、「コンサルタント事業」、「サービスプロバイダ事業」及び「プロダクツ事業」の3つを報告セグメントとしております。各セグメントの主要業務は以下のとおりとしております。

区分	主要業務
コンサルタント事業	橋梁・特殊構造物等に関わる調査・計画・設計・施工管理、各種構造解析・実験、CM業務、土木構造物・施設に関わるデザイン、道路・総合交通計画・道路整備計画・路線計画・都市・地域計画に関わる調査・計画・設計・運用管理、各種公共施設のデータ管理等情報サービス全般、ITSに関わる調査・計画・設計・運用管理、港湾、河川防災に関わる調査・計画・設計・運用管理、情報処理に関わるコンサルティング・システム化計画・設計・ソフトウェア開発・コンテンツ開発・運営・配信サービス、PFIに関わる事業化調査・アドバイザー、環境に関わる調査・計画・設計・運用管理、建築に関わるコンサルティング・計画・設計、土質・地質調査、基礎構造および施工法に関する研究・開発、地盤災害に関する防災工事ならびに土木工事の設計施工、鉄道に関わる調査・分析・企画・計画・設計・施工監理、再生可能エネルギーに関する調査・計画・設計・施工監理・EPC・マネジメント・資金調達コンサルティング・O&Mコンサルティング・アセットマネジメント
サービスプロバイダ事業	道路運営、公共施設の運営、PPP、デマンド交通システム、健康サポート
プロダクツ事業	エコ商品販売、レンタル、情報システムの販売・ASP

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「注記事項（重要な会計方針）」における記載と概ね同一であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

なお、資産及び負債については、報告セグメントに配分しておりません。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				調整額	財務諸表 計上額 (注1)
	コンサルタ ント事業	サービスプ ロバイダ事 業	プロダクツ 事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	19,549	488	488	20,527	-	20,527
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	-	-	-	-	-
計	19,549	488	488	20,527	-	20,527
セグメント利益又は セグメント損失()セグメ ント利益	6,240	37	70	6,273	-	6,273

(注) 1. 報告セグメントの利益の金額の合計額は損益計算書計上額（売上総利益）と一致しております。

2. 資産は報告セグメントに配分していないため記載しておりません。

関連情報

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が損益計算書の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：百万円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関係するセグメント名
国土交通省	8,593	コンサルタント事業

報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

該当事項はありません。

報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

該当事項はありません。

報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

該当事項はありません。

関連当事者情報

1. 関連当事者との取引

親会社及び主要株主等

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業内容	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社	人・夢・技術グループ株式会社	東京都中央区	3,107	グループ会社の事業管理	被所有直接100.0%	資金の借入役員の兼任	現物配当	3,863	一年内返済予定長期借入金	200
							資金の借入	1,000		
							資金の返済	133	長期借入金	667
							利息の支払	0		

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

1. 資金の借入については、市場金利を勘案して、協議の上、利率を合理的に決定しております。
2. 人・夢・技術グループ株式会社に対して現物配当として3,863百万円を行っております。

子会社及び関連会社等

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業内容	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
子会社	株式会社南部町バイオマスエナジー	山梨県南巨摩郡	60	電気の販売	所有直接77.93%	資金の貸付設備の貸貸	資金の貸付	50	短期貸付金	31
									長期貸付金	411
							リース取引	-	リース投資資産	13
									長期リース投資資産	311

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

資金の貸付及びリース取引については、市場金利を勘案して、協議の上、利率を合理的に決定しております。

同一の親会社をもつ会社等

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業内容	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
同一の親を持つ会社	株式会社長大キャピタル・マネジメント	東京都中央区	90	融資	-	資金の貸付役員の兼任	資金の貸付	335	短期貸付金	268
							資金の回収	138	長期貸付金	435
							利息の受取	6		

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

資金の貸付及びリース取引については、市場金利を勘案して、協議の上、利率を合理的に決定しております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

親会社情報

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

人・夢・技術グループ株式会社(東京証券取引所に上場)

(1株当たり情報)

項目	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
1株当たり純資産額(円)	842.65
1株当たり当期純利益金額(円)	217.32

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
 2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当事業年度末 (2022年9月30日)
純資産の部の合計額(百万円)	7,934
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	-
(うち非支配株主持分(百万円))	(-)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	7,934
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(株)	9,416,000

3. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
当期純利益金額(百万円)	2,046
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-
普通株式に係る当期純利益金額(百万円)	2,046
期中平均株式数(株)	9,416,000

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

附属明細表
有価証券明細表
株式

銘柄		株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)
投資 有価証券	その他 有価証券	ASIGA GREEN ENERGY CORPORATION	569,199
		Taguibo Aquatech Solutions Corporation	28,250,000
		その他(11銘柄)	442
計		28,819,641	221

その他

種類及び銘柄		投資口数等	貸借対照表計上額 (百万円)
投資 有価証券	その他 有価証券	(匿名組合出資) 北淡路開発プロジェクト	-
計		-	49

有形固定資産等明細表

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価償却累計額又は償却累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	2,639	48	834	1,853	1,267	46	586
構築物	138	-	8	129	120	0	8
工具、器具及び備品	235	9	24	220	191	14	28
土地	1,861	240	1,354	747	-	-	747
リース資産	130	22	11	141	59	33	81
建設仮勘定	-	9	-	9	-	-	9
その他	10	3	-	14	9	1	5
有形固定資産計	5,015	335	2,234	3,116	1,648	96	1,467
無形固定資産							
ソフトウェア	367	23	180	210	170	24	40
電話加入権	24	-	-	24	-	-	24
その他	39	-	20	18	17	0	1
無形固定資産計	431	23	200	254	187	24	66
長期前払費用	5	19	-	24	9	6	15 (7)

(注) 1. 「差引当期末残高」欄の()内は内書きで、1年内費用化予定の長期前払費用であり、貸借対照表上では「前払費用」として流動資産に含めて表示しております。

2. 当期増加額のうち主なものは以下のとおりであります。

建物 内装・設備工事等(つくば) 35 百万円

土地 つくば総合研究所土地購入 240 百万円

3. 当期減少額のうち主なものは以下のとおりであります。

建物 現物配当による減少(本社) 263 百万円

土地 現物配当による減少(本社) 1,354 百万円

借入金等明細表

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定の長期借入金	26	26	0.1	-
1年以内に返済予定の関係会社長期借入金	-	200	0.34	-
1年以内に返済予定のリース債務	33	50	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	363	336	0.1	2023年～2029年
関係会社長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	666	0.34	2023年～2027年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	69	357	-	2023年～2026年
合計	492	1,636	-	-

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	26	26	26	26
関係会社長期借入金	200	200	200	66
リース債務	49	23	283	-

引当金明細表

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	125	48	77	50	46
賞与引当金	443	590	443	-	590
役員賞与引当金	23	6	23	-	6
受注損失引当金	131	74	-	131	74
株式給付引当金	41	17	1	-	57

(注) 1. 貸倒引当金の「当期減少額(その他)」は、回収による取崩し及び外貨建債権にかかる評価替金額であります。

2. 受注損失引当金の「当期減少額(その他)」は、洗替額であります。なお、対応する未成業務支出金とは相殺せずに両建てで表示しております。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	10月1日から9月30日まで
定時株主総会	12月中
基準日	9月30日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告により行う。やむを得ない事由により電子公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載する方法により行う。 https://www.pdt-g.co.jp/
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めています。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 取得請求権付株式の取得を請求する権利
- (3) 募集株式または募集新株予約権の割当てを受ける権利
- (4) 単元未満株式の買増しを請求する権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7の第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 四半期報告書及び確認書

(第1期第1四半期)(自 2021年10月1日 至 2021年12月31日)2022年2月14日関東財務局長に提出。

(第1期第2四半期)(自 2022年1月1日 至 2022年3月31日)2022年5月13日関東財務局長に提出。

(第1期第3四半期)(自 2022年4月1日 至 2022年6月30日)2022年8月10日関東財務局長に提出。

(2) 臨時報告書

2022年9月20日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第12号(財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に著しい影響を与える事象の発生)に基づく臨時報告書であります。

2022年10月11日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号(主要株主の異動)に基づく臨時報告書であります。

2022年11月14日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の4(会計監査人の異動)に基づく臨時報告書であります。

(3) 有価証券届出書及びその添付資料

2022年11月14日関東財務局長に提出

会社法第199条第1項に基づく第三者割当による自己株式処分の有価証券届出書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2022年12月26日

人・夢・技術グループ株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 中原 義勝

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 佐藤 秀明

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている人・夢・技術グループ株式会社の2021年10月1日から2022年9月30日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、人・夢・技術グループ株式会社及び連結子会社の2022年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

一定の期間にわたり履行義務を充足し収益を認識する方法により認識される収益における業務原価総額の見積り	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社グループのコンサルタント事業及びサービスプロバイダ事業においては、橋梁の設計・老朽化対策、道路構造物の維持管理、再生可能エネルギー事業でのコンサルティング、地質・土質調査等の業務を顧客に提供している。</p> <p>注記事項（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項）4．会計方針に関する事項(5)重要な収益及び費用の計上基準に記載されているとおり、収益及び費用の計上基準として、一定の期間にわたり履行義務が充足される契約については、履行義務の充足に係る進捗度を見積り、一定の期間にわたり収益を認識している。履行義務の充足に係る進捗率の見積りの方法は、発生原価に基づくインプット法を適用している。また、注記事項（重要な会計上の見積り）に記載されているとおり、当連結会計年度の売上高37,604百万円のうち、一定の期間にわたり充足される履行義務に係る業務契約等の売上高は、37,033百万円と約98%を占めている。</p> <p>一定の期間にわたり履行義務が充足する収益認識については、業務原価総額の見積りに大きく依存しており、業務原価総額の算出に当たって用いられる業務に係る作業工数、外注価格等は変動することがあるため、業務の進捗状況、過去の実績等を踏まえて合理的に見積もることが必要となる。</p> <p>また、基本的な業務内容が顧客の指図に基づいて行われ、個性が強いことに加え、業務は長期にわたることも多く、業務の進行途上における業務内容の変更や追加業務の発生等により、業務に係る作業工数や外注価格等は変動し、不確実性を伴うことがあるため、業務原価総額の適時・適切な見直しが重要となる。</p> <p>そのため、業務原価総額の決定及び見直しは、業務契約の原価管理又は進捗管理に直接的又は間接的に責任を有する者による判断を必要とする。</p> <p>以上から、当監査法人は、業務収益及び履行義務の充足に係る進捗率の算定に当たり、業務原価総額の見積りが、当連結会計年度において特に重要であり、監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、一定の期間にわたり履行義務を充足し収益を認識する方法により認識される収益における業務原価総額の見積りの妥当性を検討するにあたり、連結子会社である株式会社長大及び基礎地盤コンサルタンツ株式会社の業務について、主として以下の監査手続を実施した。</p> <p>(1) 内部統制の評価 業務原価総額の見積りに関する会社の以下の内部統制の整備・運用状況を評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 業務原価総額の見積りの基礎となる実行予算書（業務の原価管理のために作成され承認された予算書）が専門知識を有する業務担当者により作成され、必要な承認により信頼性を確保するための統制 業務原価総額の各要素について、社内承認された標準単価や外部から入手した見積書など客観的な価格により詳細に積上げて計算していることを確認するための体制 業務の実施状況や実際の原価の発生額、あるいは顧客からの業務内容の変更指示等に応じて、適時に業務原価総額の見積りの改訂が行われる体制 業務の進捗度や業務原価の信頼性について、適時・適切にモニタリングを行う体制 <p>(2) 業務原価総額の見積りの妥当性の評価 業務請負額、損益、業務内容、業務の実施状況等の内容に照らして、業務原価総額の見積りの不確実性が高い業務を識別し、以下の手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 業務原価総額の見積りについて、その計算の基礎となる実行予算書と照合し、業務種類ごとに積上げにより計算されているか、また、実行予算書の中に、将来の不確実性に対応することを理由として異常な金額の調整項目が入っていないかどうかを検討を行った。 業務原価総額について、既発生原価と今後発生予定の業務原価の見積額の合計が一定の基準額以上変動しているものについて、必要に応じて、担当部署への質問、変更契約書等との照合により、その変動が業務実態を反映するために行われたものであるかどうかを検討した。 業務請負額改定の有無や業務の進捗状況等を売上高計算資料等の閲覧により把握したうえで、業務原価総額の見積りを見直すべきかの判断について必要に応じて担当部署へ質問し、業務の内容や進捗状況等に照らしてその回答を検討した。 業務原価総額の事前の見積額とその確定額又は再見積額を比較することによって、業務原価総額の見積りプロセスの評価を行った。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、人・夢・技術グループ株式会社の2022年9月30日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、人・夢・技術グループ株式会社が2022年9月30日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基

準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査等委員会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2022年12月26日

人・夢・技術グループ株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 中原 義勝

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 佐藤 秀明

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている人・夢・技術グループ株式会社の2021年10月1日から2022年9月30日までの第1期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、人・夢・技術グループ株式会社の2022年9月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

関係会社投融資の評価	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>財務諸表に記載されている通り、2022年9月期において、総資産14,547百万円のうち、関係会社に対する株式投資簿価は8,055百万円、関係会社長期貸付金簿価は、697百万円となっており、投融資合計は総資産の過半を占めている。また、損益計算書において、関係会社株式評価損269百万円、貸倒引当金繰入額40百万円及び関係会社事業損失引当金繰入額26百万円を計上している。</p> <p>会社は、関係会社株式を取得価額で計上しているが、関係会社株式の実質価額が50%以上低下したときは、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除き、実質価額まで減額処理する方針としている。また、関係会社貸付金は個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を引当処理する方針としている。</p> <p>関係会社への投融資の評価は、将来の事業計画に基づいて評価されるため、不確実性が伴う。したがって、その事業計画の合理性・実現可能性については、会社が置いた前提を慎重に検討する必要がある。</p> <p>会社が投融資の評価に用いる将来の事業計画については、将来の成長を見込んで策定されることもあり、その達成可能性について不確実性及び経営者による判断を伴うことから、当監査法人は当該事項を監査上の主要な検討事項とした。</p>	<p>当監査法人は、関係会社に対する投融資の評価の妥当性を検討するため、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 株式の取得価額と実質価額を比較し、実質価額の著しい低下の有無を検討した。 ・ 将来の事業計画について、取締役会によって承認された事業計画との整合性を検討した。 ・ 事業計画の基礎となる主要な仮定の売上高の成長率、売上総利益率について、経営者と協議するとともに、過去実績との比較を実施した。 ・ 経営者の見積りプロセスの有効性を評価するために、過年度における予算と実績を比較した。 ・ 関係会社株式評価損を計上した関係会社株式について、当事業年度の実績及び最新の事業計画における翌期以降の売上高及び営業損益を当初の事業計画と比較して乖離額及び乖離要因を把握し、会社の判断を評価した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。